

アクタージュ 暗殺者(になるはずだった)ルート

白鳩ぽっぽ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(ガチで) 初投稿です。 文才は無いです。

見切り発車気味

尊敬する先輩方を見て始めました。 許可が必要でしたらすみません。

あと百合とか依存系が好きなんでぶっ込んで来るかもしれないです。

感想や評価を頂けると非常に喜びます。 指摘などもどんどんして下さると、助かります。

番外編ではこの作品の主人公視点やBADENDを投稿します。 実況風を楽しみにしている方は本編を、主人公についてを詳しく知りたい方は番外編もご覧下さい。

番外編は <https://syosetu.org/novel/223443> に投稿します。 よろしくお願い致します。

目次

原作開始編

夜に魅入られた少女	1
星を墮とすモノ	4
黒は黒で塗り潰せない	7
死ガ二人ヲワカツマデ	11
出会いは突然に	14
家庭の味	17
星は輝くもの	21
綺麗に咲くのは一輪だけ	25
明ケナイ夜ハナイ	29
“天使”と悪魔	32
朝の陽射しが翳る	35
星が瞬く、月は沈む	38
【幕間】 暗夜に灯火を失う／能ある “天使” は爪を隠す	43
【幕間】 蕾／その星は七光り	46
デスアイランド編	
茜色の空、鳥の鳴き声	51
“天使”が舞う頃に	55
悪魔の契約	59
独白 序	62
独白 破	65
独白 急	69
【幕間】 世の中には月夜ばかりは無い／天使のこころ	73
【幕間】 要らない花は摘まれる／星を見上げた日	77

【幕間】塗り潰した色は戻せない／星を統べる者 82

銀河鉄道の夜&星の王子さま編

綺麗な天使と月には棘がある 87

その男、曲者につき 93

星を追うものたち 98

夜に浮かぶ月 102

綺羅星に届かない 107

咲き誇る花、散り行く花 112

死に逝く者と生きて行く者 119

星の王子さま 123

「おかえり」を貴方に 128

【幕間】十六夜／悪魔の集会 131

【幕間】星に昇る／咲いた花の名は 137

【幕間】愛の天使 141

【幕間】病マナイ雨ハ無イ 147

普通の幸せ編

普通の高校生の平凡な日常 150

日が昇る 154

踏み躪られた花 161

だれかにとっての普通 168

私にとっての普通 173

【幕間】人は巡り愛（あ）う起 177

【幕間】人は巡り愛（あ）う承 184

【幕間】人は巡り愛（あ）う転 190

【幕間】人は巡り愛（あ）う結 196

羅刹女編

賽は投げられた

201

愚者の告解

208

明星

211

主人公は遅れてやってくる

216

花鳥風月 上

220

花鳥風月 下

224

石の上にも三年、山の上には何年

228

原作開始編

夜に魅入られた少女

皆さん初めまして。今回はルート開拓者及びRTA鏖殺ゲーム『アクタージュ 演劇奇譚』をやつていきたいと思ひます。

このゲームは先駆者である銀幕先輩やとり弁先輩のRTA動画、村人(LvMAX)先輩の開拓動画を見てから買ったんで、やりこんだ訳じゃないですよねえ…なので、初見の皆様とほぼ同じ新鮮な気持ちでやれると思ひます。あと最速とか実績解除は狙つてないんですが、一応タイマー計測は行ひます。最速取れたら良いですねー。『暗殺者ルート』は本当に死にやすいので、RTAには向いてませんし。

あと、このゲーム、ルート膨大過ぎて「なあにこれえ」状態なんで実況者としては卵以下の自分にルート管理なんて出来るわけないんだよなあ……シナリオライターはどんな思考してるんでしょうね。ルート管理もできない実況者がRTAやつたらチャートガバるの目に見えてるんで、今回は『暗殺者ルート』実況をやつていきたいと思ひます。

『暗殺者ルート』。このゲームは演劇奇譚と銘を打つてる割に、その自由度の高さから俳優以外の職業も選べます。その中には暗殺者つて言うのもあるんですね。夜風景ちゃん、百城千世子ちゃん等の主要人物を暗殺するルートが。別にそういう性癖つて訳じゃないんですけどこういうルートもあるよつて言う一部の人向けのご紹介と云うか(早口)。……えー、取り敢えずこのルートでは主要人物は大抵殺します。なのでそう言うのが苦手な方はブラウザバック推奨です。

取り敢えず、キャラメイクをしていきましようか。男性でも充分何ですが、女性の方が夜風景ちゃん等の女性主要人物を暗殺しやすいので女性を選択します。暗殺者ルートでも好感度つてそこそこ重要なんですよね。殺りやすさが違ひますよ。顔はそこそこで。あまり目立ってはなりません。クラスで言うところ3番目くらいの美少女だし付き合ひやすいけど、なんか1、2番目と比べると感じのレベルを

目指しましょう。髪は黒髪ロングが好きなんでそうします。異論は認めません。

名前は『頭鬼^{ずき} 恋歌^{れんか}』ちゃんです。(鬼頭ちゃんでも、レズちゃんでも) ないです。ノンケなのでそこんとこよろしくお願いいたします。

それではタイムを計りまして：ステータスを見ていきましようか。

ステータスで高いのは『魅力Lv3』、『洞察力Lv4』、『器用Lv5』…ん？『器用Lv5』!?!いや、そんなに高くて何するんだ…まあ、あつて困るものでも無いので良いですかね。『器用』は手を使う等肉体的なものに限らず世渡りの上手さにも繋がってきて、交渉系アビリティから肉体系アビリティが無い場合の序盤を幅広く補うことが出来ます。ナイフの扱いや気配系アビリティも取りやすくなるので、暗殺者ルートではLv4を取れば良いと思っていたのですが…Lv5は初めてですね。

アビリティは『オーバーフローLv4』…いや、要らんのだが!?!暗殺者に何求めてるんですかね!こっちは俳優ルートはだいたい開拓されてるから、新鮮味求めて来てんだぞ!いい加減にしろ!

気を取り直して、当たってしまったものはしょうがないですし、楽しめるゲームをしたいので不確定も取り込んでいきましょう。良かった、RTAじゃなくて。

さて、『演劇奇譚』は家系ランダムです。一般家系、芸術家系が主要人物と大体初期から知りあいになりますね。狙っているのは『暗殺家系』ですがこれは低い確率なので期待してないです。

さて、OPは飛ばします。一応とは言えタイムを測っているの、見たい方は是非購入してください。損はしないと思います。

>目覚めた貴女の上には見慣れた天井が広がっている。

>貴女は親類の家に泊まりに来ていたことを思い出した。カレーの匂いがする。家主が朝食を作ってくれているのだろう。自分も手伝えることは無いか、家主の元へと歩き出す

これは一般家系ですかね。でも親類の家に泊まりに来てるなんてスタートあったかな。ていうか、カレー?こんな序盤初めてですね。

居候スタートと名付けましょう。主要人物が親類じやなきやへーきへーき。暗殺者ルートの際は主要人物との関係は友人が適切な関係値ですね。恋人とかは異性の時だけにしておきましょう。同性で恋人になるとフラグ管理が大変です。

＞キッチンに立っているのは誰もが羨むような美貌を持った少女だ。漆を思わす黒髪を翻してこちらを見る。

嬉しそうな笑みを浮かべながら、挨拶する彼女の名前は夜風景。貴女の唯一の親類にして、学友だ。

「おはよう、恋歌。もう少してカレーが出来るわ。ルイとレイを起こしてきてくれる？」

……この実況、失踪していいですか??

頭鬼恋歌と初めて会ったのは、母の葬式でルイとレイの相手をしてくれたときだった。

彼女は自由奔放で、掴み所が無かった。けれど的確に私の心の痛みを見抜き、癒してくれる人だった。現実逃避の為の映画鑑賞も彼女は笑って付き合ってくれた。料理も出来るはずなのに、私のカレーが好きだからと殆ど毎日家に遊びに来てくれて、ルイとレイの面倒も見てくれていた。まるで姉妹のように私達は寄り添って生きてきた。

この関係が続けばいいと思った。彼女と一緒に居れたら「幸せ」という感情を忘れないでいられるから。自分でも最低だと思う。「幸せ」を忘れない為に彼女と一緒に居たいなんて。

でも、もし、彼女が居なくなってしまうえば私はきつと……その時こそ映画に溺れて二度と帰って来れないだろう。

だから、ずっと……ずっと一緒に居たいわ、恋歌。

星を墮とすモノ

危うく失踪しかけた暗殺者ルートですが、大丈夫です。夜風景親類パターンでも殺れます。殺れると言ったら殺れるんです。

＞貴女は了解の旨を伝えると、ルイとレイを起こしに行く。昨日は2人ともはしゃいでいたのでぐっすり中々起きない。

＞仕方なく貴女は2人の腋をこちよこちよし始めた。貴女の器用な手から繰り出されるこちよこちよは抱腹絶倒すること間違い無しだろう。

「ふっ、あはは!!」

＞耐え切れず2人は起き出す。2人の髪を整えつつ、朝食の席に着くように言う。

幸せそうな家族ですね。良いですねえロリシヨタに美少女とか最高ですよ。いや恋歌ちゃんはノンケなんで手を出したりしないですけど。

「ありがとう、恋歌。…いただきます」

＞カレーをよそった器を人数分置き、手を合わせる。

そういえば、今日は何時なんですかね。時系列がよく分かってないんですが。景ちゃんが女優になってくれないと暗殺しにくいんでオーディション前だといいますが。

「そう言えばお姉ちゃんたち、今日5次審査だよね?」

「そうね」

カレーに夢中になってるルイ可愛いなあニチャアと見ていると、レイの方がそんな事を言ってきました。まじか、原作スタートじゃん! まあ、自分が何もしなければ黒山墨字に拾われ……ん?今レイちゃんなんて?お姉ちゃん“たち”?

「だから、5次審査だよね?」

「恋歌、忘れてしまったの?スターズのオーディション。一緒に受けるって言ったでしょう?」

??こつちがやってない事が勝手に進んでるなんてあるんですかねえ!?!どうなってんだこのゲーム!?!続行はしますが、恐ろしいです

ね。こんなルートがあつたとは。

>忘れていた、と貴女は言う。と景とレイは笑う。恥ずかしくなつて貴女は赤面する。

忘れていた、じゃねえんだよ!!冒頭で説明しろ!!と、怒るのはここまでにして進めているとオーディションが始まりそうですね。お題は“悲しみ”。夜風景はここでメソッド演技を披露し黒山墨字の目に留まりますが、恋歌ちゃんは駄目です。そこそこの演技にしてください。ていうかスターズに入るメリットとか暗殺者ルートだと……あるかも知れないですね。星アキラ、百城千世子等はガードが硬いです、物理的に。なので殺りにくいんですね。というわけで演技はちゃんとこなしましょう。(入れるかどうかは知ら)ないです。

……終わりましたね。一応評価はAでしたが、どうなるか、神のみぞ知るですね。そう言えば演技ステータス確認してませんでしたね。ちよつと見ますか。ええつと何何、『メソッド演技』がB評価、『百式演技』がC評価?なんで?メソッド演技は景ちゃんの技術を『洞察力』で見えていたから所持しているのはまだ分かります。B評価なのは『器用』の恩恵かも知れません。でも、『百式演技』を所持しているのはなんでえ!?!もしかして百城千世子とも関わりあるの!?!死んじやう!暗殺者ルート閉じちゃう!?!

星アキラは俳優としては凡才だ。ただ人並みの感性はあるし、才能には敏感であると自負している。それは百城千世子という天才が近くに居るからかもしれない。

そんな彼から見て、夜風景の演技はただ立っているようにしか見えなかった。だが黒山墨字は彼女から“悲しみ”を引き出した。それを見て、彼は恐怖と驚きを感じた。自分に無いもの、自分では到達できないものに対する恐怖、羨望、驚愕。様々な感情が入り混じったままオーディションは続いた。そして、黒山墨字はその横にいた少女にも興味を示した。

頭鬼恋歌。このオーディションに参加する者達の中では逆に目立つくらい容姿は普通だ。可愛くはあるが、スターズでは埋もれるだろう。ただ…

「おい、頭鬼。お前も出来るだろう」

その一言で彼女の印象は変わった。頭鬼恋歌は一瞬で涙を流し、「悲しみ」を表現した。すると彼女はさめざめと泣き始めた。まさに「素の演技」という言葉が似合う。いや、「素」なのかもしれないが。ただそれで空気も印象も変わった。急に泣き出したと思えば、その後笑顔になり大丈夫だと言う。本当に泣いたのかと思つた他の者達は胸を撫で下ろす。けれど自分が抱いたのは違った。

「…おかしい」

あそこまで本気で泣いて、笑顔になれるのは普通の人には居ない。しかも彼女は芝居未経験者なのに「視点」を理解していた。千世子ちゃんと同じ技術を持ち、夜風景と同じ才能を持つ化け物。それが頭鬼恋歌に抱いた第二の印象だった。

ただ彼女と夜風景は落とされ、二度と会わないと思つたのに…翌日会うことになってしまい、複雑な気持ちになったのは秘密だ。

黒は黒で塗り潰せない

百城千世子と知り合いは嫌だ、百城千世子と知り合いは嫌だ…

そんなことを祈りながら実況していきましょう。今回はあれですね。気配を消すとか気配を察知するとかそう言う暗殺者としての技能を育てて行きたいですね。俳優は落ちました（報告）。

やっぱり、俳優ビルドとかじゃないと難しいですね。俳優ビルドでも運が絡んでくるのに暗殺者ビルド（オーバーフロー）持ちで合格出来るわけ無いですよ。これからは暗殺者一筋で頑張って行きたいですね。

>貴女が起きると不合格書を二通持った夜風景は少し悲しそうな顔をして座っていた。

大丈夫だよ、君はこれから女優になれるから、とでも言いたいですが、流石に何言ってるのってなるので慰めておきましょう。ほら慰めてあげよう、おいでよ（ブスボ）。

「ありがとう、恋歌。でも諦めが着いたわ。バイトもクビになってしまったけれど」

なんでバイト、クビになったんですかねえ？こんない子をクビにするなんて！まあ、無愛想さが反感を買ったとかでしょうか。そんなことより、気配系アビリティ習得したい。慰めてると好感度が上がりますが、そもそも名前呼びな時点で結構な好感度だと思うんですよ。ならアビリティ上げに時間使いたいというか（人間のクズ）。あそこ諦めが着いたという台詞が出たら、レイちゃんとはまでは行かなくとも、景ちゃんには女優が天職、君には才能があるみたいな感じを言っておきましょう。君が友人を増やしてくれないと主要人物とのパイプと暗殺が出来ないでしょう？

>貴女が夜風景を慰めていると、登校の時間になる。レイとルイも呼んで仕度をしよう。

あ、これは堀くん（星アキラ）が来ますね。レイちゃんが景ちゃんの演技が怖いっていうシーンです。確かに勝手に泣いたり映画観なきや笑顔思いつけないとかやばいですよね。暗殺者より怖いわ。

＞ルイとレイが泣き始めた。貴女は両方とも宥めるがルイは泣き止まない

＞貴女は車の気配を察知した。『気配察知Lv1』習熟度が少しだけ上がった。

お、『気配察知』を持ってないですがアキラくんの気配を感じましたね。このまま景ちゃん連れてってください。そして、ここで一旦育成させてくれ。自分はオーデイションは不合格でしたし、ここでアキラくんに着いて行くことは無いだろうと安心はしてます。黒山墨字から演技しろって振られました、その後のアクションは無かったので大丈夫でしょう。ぶっちゃけ演技ステータス上げてると暗殺者ビルド難しいんですよ。目立つので。

＞車の中から金髪の爽やかイケメンが現れた。彼は確か…

「すまないが、一緒に来てくれないか」

「ウルトラ仮面だ!!」

＞ルイが泣き止み、興奮した様子で話す。そうだ、彼はウルトラ仮面だった。怪人でも出たのだろうか。そう思い、自分も聞いてみる。

恋歌ちゃんはステータ斯的にアホです。『知力Lv1』なので身近な人の名前しか覚えられません。なので堀くんって言ったりウルトラ仮面としか星アキラを認識出来ません。今のところはですが。器用なのに頭悪いってなんだよ……

「えっ」

＞星アキラは貴女に話しかけられて、顔が引き曇る。

「君もウルトラ仮面を觀てるのかい？」

＞勿論だと貴女は頷き、全話見ると興奮気味に話す。そうこうしている周囲がざわめき出す。星アキラが居ることに気付かれたよ
うだ。

「頼む、早く車に乗ってくれないか…」

イケメンの言うことなんか聞けるかよ、ペツ（唾吐き）。なんてね、行ってらっしゃい景ちゃん。がんばれ、がんばれ。と気軽に応援しましょう。このイベントが終わったら全力疾走して学校に行かないと遅刻します。体力なども上がるので別に困りませんが遅刻は知力が

下がる原因にもなるので…マイナスとかは無いです。流石に0に近いのはやばいです。

「いや、それが君もなんだ。頭鬼恋歌君」

頭鬼恋歌？誰ですかね？……いや、現実逃避してる場合じゃないですね。これはポジティブに考えれば主要人物との縁が結べます。ネガティブに考えると暗殺アビリティが習得出来ません。最悪じゃないですか。なんだこれ。断つても良いですが、景ちゃんが嬉しそうな顔で恋歌も行くなると言い始めていますね。ダメだコレ、投げ出してえよ……

夜風景を見た時、コイツだと思った。俺の映画にはコイツが必要だと思った。だから、落とされた時はあのババアに文句を言った。

頭鬼恋歌を見た時、違うと思った。夜風景のメソッド演技、百城千世子の技術テクニックを持つ鬼才にも関わらず、本当の意味での個性が無い。あらゆる物が誰かの模倣でしか無い。そんな印象を抱かせた。だが…

「その演技は本物で、技術は磨かれていた」

黒山墨字が持つ『大黒天』に勧誘はしない。だが、あの頭鬼恋歌は必ず夜風景の糧となりうる。

あの少女には壁となって貰う。夜風景が女優「夜風景」となる為の。

「だからチャンスを与えるぞ、頭鬼恋歌。お前はスターズで変革を起こせ。つまらねえ演技するアイツらをもう一度輝かせて見せろ」

これはあのババアへの仕返しだ。八つ当たりとも言おう。酒をグイッと飲み干して、空を見上げる。夜には満天の星、そして月。夜風景にはありふれた星ではなく、月として夜に映えて貰わなければならない。頭鬼恋歌には太陽として夜風景を輝かせて貰わなければならない。

「楽しくなってきたな」

彼、黒山墨字はこの業界に起きるであろう変革に思いを馳せながら、帰路に着いた。

死ガ二人ヲワカツマデ

どういうことだってばよ。なんで恋歌ちゃんも一緒にアキラくんの車に乗ってるんですかね。暗殺者ルートって知ってる？

＞貴女は何故、自分も呼ばれるのかを星アキラに尋ねた。

「…1人が辞退した。それが夜風景君の粹だ。君は分からない」

「恋歌、折角役者になれるのに嬉しそうじゃないわ。どうして？」

胃が予想外のことと死にそうだからですね。まじかよ、本当になんてだ？ オーバーフロー取ってたからか？ 暗殺なんてしようとしたからか？ そりゃ、最終的にはアゾットするつもりでしたけど、今天罰は流石に先読みしすぎじゃないですかね。

＞貴女はそうかな？ と首を傾げる。嬉しくない訳では無いけど、予想外だったから頭が追いつかないのかも、と言うと星アキラも頷く。

「まあ、そうだろうね。急に訪問したのは申し訳ない」

イケメンに謝られるとムカつきますね…あ、景ちゃんの何言ってるんだ発言が出ましたね。アキラくんはさぞかし困惑してるでしょう。イケメンが困惑しているの見て飯が美味い！

そうこうしている内に着きましたね。最終審査です。お題は^{パントマイム}“無言劇”。声を使わずに仕草だけで表現する非常に難しいものです。青い人達とか有名でしたね。1回だけしか見た事ありませんが、やはり仕草だけで人を魅了するというのは感嘆の一言ですね。

＞貴女は星アリスと目が合う。眉間にシワの寄った目で射抜かれ、少しだけ緊張する。

ぶっ!? すみません、お茶吹き出しました。やばいですね、ラスボスに目をつけられました。彼女は星アキラの母親であり、スターズ社長の星アリスさんです。暗殺者ルートでは最難関、側近のスミスも強いですが彼女自身が強いです。警戒心も高く、護衛も強いとかやめてくださいよ。

そんなラスボスに目をつけられましたね。これ、やり直していいですか？ あ、駄目ですか。

よおし！ このオーデイション頑張って落ちるぞお！ 暗殺者ルート

とかやめて、幸せに暮らそうな！犯罪良くないよ、良くない。

「あなたたちの目の前には1匹の野犬がいるわ」

始まりましたね…まあ演技中はあるまり弄れないので見るだけです。

終わりました…地獄の時間でしたね。評価はS。H A H A H A、Sってあれでしょ？俳優ビルドの中でも最高峰の人がとるやつのひとつでしょ？もういやだあ……

野犬を見た事のない私は困惑した。未体験の事は私に「思い出す」ことは出来ないから。その時だった、ヒゲの男が言葉を発する前に…彼女が、恋歌が臨戦態勢を取った。そしたら、他の人達にも伝播したかのように動いた。まるで魔法のように。状況が一変した。

野犬の輪郭が見え、私の家族と大切な人を襲う前に殺らなきゃと思った。恋歌に野犬が飛び掛った！私はそれを止めようとしたけど、一歩足りなくて、恋歌の綺麗な肌に傷が付いた。痛みで彼女は顔を顰める。

許せない、怒りに駆られルイとレイに向かうまた私から大切な人を奪おうとする野犬の顔を思い切り踏み潰した。

死ぬまで、やらなければルイとレイ、そして恋歌がやられると思いを足をもう一度上げるとルイとレイに手を握られ、我に返った。

「そうだった…お芝居だった」

瞬間、拍手が鳴り響く。皆が私の演技を褒めてくれた。けれど恋歌を褒める声は聞こえなくて、少しだけモヤツとした。

「恋歌、大丈夫だった？」

座り込む彼女に手を差し伸べると笑顔で手を取ってくれる。彼女のその笑顔は私の「幸せ」で、ここにいる名前も知らない人達の笑顔とは比べ物にならない幸福感を齎す。

ああ、今回の演技だったけど、もし貴女のことを傷つけるやつが居たら私は許さないわ。そいつのことを地の果てまで追いかけて

してまうと思う。

恋歌の温かい手をいつまでも握っておきたいと思いつつ、ずっと握るのは恥ずかしさもあって離してしまふ。名残惜しいその手がいつか自然に繋がたらいいなと思う。

出合いは突然に

百城千世子と知り合いじゃなきやガバラないだろ（フラグ）。そんな訳でやっていきたいと思えます。

前回は暗殺者ビルド（オーバーフロー&メソッド演技&百式演技術）持ちなのに評価Sを取った所で終了しました。これは演技ステータスのせいです。決して実況者のせいでは無いです（震え声）。

で、結果ですよ。合格かどうか。流石に不合格でしょ。こちらら暗殺者ビルドぞ？景ちゃんも不合格で居てくださいお願いします、物語進まないんです。正確に言えば殺すのが遠ざかるんですお願いします（人間のクズ）

>貴女は夜風景と共に合格通知を覗き込んだ。一通は合格、もう一通は不合格と記されている。

…は？

>貴女の合格通知には合格と記されている。夜風景は少し残念にしつつも貴女の手を握り激励する。レイとレイも落ち込む姉を慰めつつ、恋歌お姉ちゃんおめでとうと貴女に拍手する。貴女は嬉しさと夜風景に対する申し訳なさで少し涙目になりながらも3人に感謝の言葉を述べる。

合格??

>車の気配を察知する。『気配察知Lv1』が少し上昇した。

ごうかくってなんだ？つと、思考停止していたら黒山墨字が来ましたね。ひとまず進めましょうか。

>車からヒゲの男が現れ、夜風景を見据える。

「1本の映画のために70億人からたった1人を探し続けている」

…私も覚悟を決めましょう。暗殺者ルートは続行します。夜風景親類、スターズ合格も全部乗り越えて、かならず殺してみせましょう。

目指すは「暗殺の天使」END。俳優も暗殺者も両立するというスーパーガババルトですが、未開拓であり実質これを走れば世界最速と言っても過言です。そう、過言です。こんなクソみたいなルート走るヤツとか他にいないだけです。ただでさえ大変なフラグ管理

に暗殺者ビルドと俳優ビルドの中間点という意味のわからないビルドをするので。

でも、不確定なルートは楽しいのでやっていきましょう。

「黒山墨字、映画監督だ。お前は？」

「夜風景、役者」

＞貴女はこの光景を見て、伝説の始まりだと感じた。これは夜風景という女優が駆け上がっていくシンデレラストーリーだと。

＞貴女は胸にちくりとした痛みを感じた。置いていかないでほしい、そう思った。ぎゅつと握りしめた貴女の手には、彼女に置いていかれないための切符がある。夜風景が頂点に立つなら、自分も横に立ちたいと思った。

＞貴女は『メソッド演技』がB＋評価になった。『百式演技術』がC＋評価になった。表現力に更に磨きが掛かったような気がする。

今回はここで終了します。また次回お会いしましょう。ご視聴ありがとうございました。

私とその少女と知り合ったのは偶然だった。本当に偶然。神様なんていうのが居たら呪ってしまいうくらいの奇跡の出会い。

「まるで仮面を被ってるみたい」

目立つような特徴もない、知らない女の子に、街で出会い頭そう言われた。週刊誌にスクープされ無いように頑張った変装を看破した後の一言目がこれだった。アンチか、そう思ってスルーしようとするともう一言言われた。

「その仮面、いつか脱げるといいね」

余計なお世話だ。私の努力を知らない人にそんなことを言われたくない。怒りの感情が湧くが、ここで相手の手に乗っては行けないと思いい、そのまま自宅に戻った。

「……」

自宅に帰った私は早速エゴサをした。更なる高みに昇るために。

作品をより良い物だったと言って貰えるように学習する。仮面なんてものがあったとしても、それで作品があるべき姿であるなら、
私（いせしろうぢやう） “なんていうのは要らない。仮面を目一杯被っておどけて見せよう。だから彼女の言うことなんて…”

「…零しちゃった」

彼女を思い出すとつい、力が入ってしまい、珈琲が入った紙コップを潰してしまう。手に掛かったコーヒーは不思議と熱くはなかった。時間が経ったのもあるかもしれない。いや、一番の理由はこの心の奥底から煮え滾るような何かだろう。これに名前をつけるなら

「激怒。うん、これがしつくり来ちゃうな」

自分で名前をつけた感情（モ）に思わず、苦笑する。一応は人間だから喜怒哀楽は確かにあった。けど激怒なんてものは初めてだ。しかも激怒の理由は作品が理解されなかったからでは無く、私の内面にズカズカ入り込んできたからなんて笑えない。

もし、貴女にもう一度会えたら私は “天使” として、最高の作品を貴女に叩きつけよう。貴女が拍手喝采する様を見て愉悅に浸りたいから。この感情はその時まで取っておこう。

それが彼女、頭鬼恋歌との出会いで、その後にも夜風景という子に出会って、怒りの感情を発露してしまうのだが…それはまた後の話。

家庭の味

「暗殺の天使」とかスーパーガバガバルト開拓に走る実況です。よろしくお願いいたします。

「暗殺の天使」はその名の通り、暗殺者ビルドと天使に相応しい俳優ビルドを兼ね備えていなければなりません。キチガイです。気が狂ってます。バーサーカーです。暗殺者ビルドは『器用』でどうにかなりますが、俳優ビルドは俳優ビルドだけでも成功するかどうかは分かりません。そこに不確定要素の暗殺者を入れるわけですね。「バツカじゃないの?」と蔑むのはやめてください。一応、実績としてあるんです。何を思ってこんな実績作ったのかは知りませんが……

「朝、目が覚めるとルイとレイ、夜風景が居間に座っている。どうやら貴女が来るのを待っていたようだ。」

「恋歌、おはよう。それでは、第164回夜風家、頭鬼家合同家族会議を始めます」

「はいー!」

「ルイとレイの元気な声が響く。貴女も2人に合わせ返事をする。」

「昨日のひげの男、怪しいと思った人挙手してください」

「>どうやら昨日のひげの男の話のようだ。名乗っていたが貴女は忘れてしまった。」

黒山墨字のことですね。一応ナレーションでは黒山墨字と出てきますが会話コマンドだと名前が出てこない仕様のようですね。ナレーションで出てくるのは初心者に対する配慮でしょう。名前忘れたとか意味分らないですからね。一応前回の話で堂々と名乗ったのに。

「>話はまとまり、黒山墨字の話には乗らないことしたようだ。」

「>貴女のスマホにメールが入っている。内容はカレーCMの出演オフアード。初めての仕事に貴女は気合を入れた。」

「>夜風景にも報告しておくべきだと思い、報告した。その後貴女は学校に欠席の連絡をした。『知力Lv1』が少し下がった。」

「『知力』とかもう下がっても怖くない。怖くないです。カレーCM

のオフアードですか。幸先がいいですね。夜風景と仕事が被ってないようです。それに夜風景と会うことはこの家と学校以外では少なくなるでしょう。

＞夜風景は貴女と学校に行けないことに少し不満を告げつつも学校へと向かっていった。相変わらず綺麗なフォームだ。

＞貴女に迎えの車が来た。

じゃあ、カレーCM行きましようか！今日はガバも無いですし胃痛しなくて助かりましたよ。ハッハッハ。

＞現場に到着すると、「大黒天」と書かれた車が止まっている。どこかで聞いたことのある名前だが…お酒の名前だったか…？

黒山墨字ですね（2回目）。あと大黒天様と恵比寿様を混同するのはやめてください。著作権と宗教はデリケートなんですよ、この時代。

ん？黒山墨字？いやまさかそんなこと

＞先程別れたばかりの夜風景と黒山墨字、後ろで髪を括った女性が座って話をしている。どうやら、貴女の前に何らかの仕事があったようだ。

…あ、そう言えば銀幕先輩のRTAでもカレーCM有りましたね。じゃあ、しょうがない…訳あるか!!なんでだよ!!変にフラグ立ったらどうするんだ!?

＞夜風景は貴女を見つけると嬉しそうに近寄ってくる。

景ちゃん可愛いなあ…癒しであり胃痛の原因だよ。

＞ひげの男は貴女を見つけると露骨に嫌な顔をしつつも告げる。

「おい、頭鬼。夜風を説得しろ」

＞無茶振りだ、と貴女は答えるも一応説得を試みる。

「恋歌がそこまで言うなら…」

「あ、やりたくねえならやらなくてもいいんだぜ」

＞説得は成功した。だが、黒山墨字が煽り始めた。夜風景は怒りのままに承諾した。貴女は自分の行為はなんだったのだろうと呆れた。

本当だよ。説得させられる身にもなって見ろ、黒山墨字イ!

＞髪を括った女性が貴女に話しかけてくる。

「初めまして、 “大黒天” の柊雪って言います」

＞貴女は名刺を貰った。『柊雪の名刺』を入手した。

＞貴女は名刺を貰って大人の仲間入りだとテンションが上がった。確かにテンション上がりますね。なんか名刺持つてるって大人の仲間入りって感じしません？

景ちゃんの撮影始まりましたね。序盤から『メソッド演技』EX評価の景ちゃんですが、未知のことには弱い、思い出す感情が無ければ演技が出来ないなど弱点も多々あります。というか演技はそれぞれ弱点というか伝えにくさというかがあるので、一概にこういう演技法が良いとは言えないと自分は思います。ただ景ちゃんの場合は感情移入という点で演技の評価をするなら満点以上ですね。

あ、やつぱり躓きましたね。第1の試練とも言うべき『知らない状況』です。ですが、簡単に彼女なら乗り越えられるものなので恋歌ちゃんから手を差し伸べたりはしません。ほら、もう抜け出した。

こうして見るとチートですね、景ちゃん。さて恋歌ちゃんも頑張りますかね。

私、柊雪は夜風景のことを最初、芝居の出来ない子だと勘違いした。これからクライアントにどう説明しようかと冷や汗もかいていた。あの黒山墨字が見誤ったなんて思いたくもないが…

そんなことを考えていたら墨字さんが動いた。

「お前、芝居をなんだと思ってる？ それじゃあ、いつになってもあいつに辿り着けないぞ」

その一言で夜風景は変わった。あいつが誰なのかは分からなかったけど、でもそれがきつかけになって彼女は素晴らしい演技をした。私はこの時自分の勘違いを恥じ、そして理解した。

……この子は、本物だ。皆が見惚れ、彼女に注目する。私は見てみたくなった。黒山墨字によって美しく演じる彼女を。

その後、景ちゃんの友人である恋歌ちゃんのカレーCMがあった。墨字さんが珍しくスターズなのに俺がやると言って駄々をこねた。

だから大黒天のメンバーは残らざるを得ず、一応見ておくか程度に座っていた。景ちゃんも恋歌の演技が見れると嬉しそうにしていたが、私はそんなに凄いのだろうかと疑問を抱いていた。

そして、魅せられてしまった。夜風景の演技は見る者に感動を与え、没入感に浸らせる。百城千世子の演技は見る者を惹き付ける、この作品を見て良かったと思わせる。

なら彼女の演技はなんと表現すればいいのか。カレーCMの内容はただの日常だ。カレーを作り、それを彼女が食べるだけ。なのに、その一動作に吸い寄せられ、親近感を湧かせ喉がごくりと鳴る。百城千世子の技術と夜風景の演技、それらを十二分に駆使する彼女は一体何者なのだろうか。

CMの収録が終わって、彼女はすつと元の目立たない女の子になる。それを見て私は恐ろしくなる。普通の、しかもスターズに選ばれたとはいえ、普通の少女が夜風景と百城千世子相手に渡り合う才能を有していることが恐ろしくて堪らない。

もし、彼女の才能を表現する言葉があるとすれば、それは化粧物。そう表現されるだろう。化粧物級の才能に会えた恐怖と感動で少し手が震えたのは私の心に留めておく。

星は輝くもの

カレーCM、終わりですね。お疲れ様でした。大黒天のメンバーと帰ろうと思ったら、恋歌ちゃんのマネージャーさんにスターズに寄って欲しいと言われましたね。なんですかね？イベントだとは思いますが：

＞貴女が呼ばれたのはスターズの社長室。ノックして入室していか、許可を取る。

社長室：え、まさか、星^{ラスボス}アリサじゃないですよね??

＞そこに居たのは美人だが少し怖い女性と、巷では天使と呼ばれる美しい少女、百城千世子だ。

しかも百城千世子まで居るとか罰ゲームか??なんでこの実況ガバガバなんだよオ!?!チャート組んでないからですかね。いや、でもここで貴女のこと知ってるよって言われても大丈夫だと思います。オーデイションを見たからって言われ、隅々まで演技の評価をされますが彼女が恋歌ちゃんに興味を持つことは無いです。景ちゃん並の才能を持っていなければ目をつけられません。芝居好きの少女の演技をしている筈です。はー(クソデカため息)、ビビらせないで欲しいですね。全く。

＞百城千世子は貴女に近寄ると笑顔で話しかけてくる。

始まりましたね、ここで演技ステータスの再評価などが行われます。技術という点で彼女は非常に素晴らしいです。恐らく、作中でも1位を誇るでしょう。なのでここで再評価されることで演技ステータスの伸びも変わってきます。意外と重要なイベントですが、マイナス方向にも変わりがかねないことと話が長いのでRTA勢には好まれない手法ですね。『暗殺の天使』ENDでは、俳優ビルドの適度な調整が必要になるので助かります。大好きだよ、千世子ちゃん(手のひらドリル)。

「久しぶりだね、頭鬼恋歌さん。覚えてるよね?」

＞話しかけてくる彼女は笑顔だが、その裏には怒りの感情が見え隠れしている。そう言えば彼女とは街であった事がある。覚えている

と返事をする、彼女は満足そうに頷いた。

待つて。待つてください。知り合いはキツイぞ。千世子ちゃんは元々知り合いにも厳しいので、再評価に問題はありませんが、感情に怒りが入ってるのはよく分かりません。感情マイナススタートはこのゲームでは有り得ない話ではありません。嫉妬などの感情は俳優ルートなどでは当たり前です。ですが、怒りつてなんだ？興味でも無く、怒りつてなんだ（錯乱）。

あと知り合いスタートがキツイと言ったのは、感情は揺れ動くものとはいえ、ジェットコースター並に上がる訳では無いからです。怒りの感情からスタートしたということは怒りの感情から普通、普通から親しいまでの流れが必要になる訳ですね。RTAしていたら再走案件です。

このゲームにおいて好感度は目に見えてわかるものではありません。確かに名前呼びで親しいなど簡単には分かります。ですが数値化されていないので、その好感度が高過ぎるのか低過ぎるのか適切なのが掴めずBADENDに行くことが多々あります。因みに暗殺者ルートでは好感度は友人が望ましいと最初らへんで説明しましたが、低過ぎる場合は速攻で犯人だとバレます。高過ぎる場合は試したことがないので分かりませんが。

そんな風には説明をしていると進みましたね。どうやら新しいお仕事みたいです。景ちゃんとは違う仕事がいいですね…

>貴女はドラマのエキストラの仕事を得た。どうやら青春系ラブコメディのようだ。

いいですね！これはいい！エキストラの仕事は地味だとか、主人公がいいだとか言われますが、エキストラとはその世界を作り上げるのに非常に重要な仕事です。台詞もかつこいいものはありませんが、見ている人にこの世界ではこういう言葉を話す、こういう服を着ていると印象付けることが出来ますからね。群衆無くして主人公は成り立ちませんから。

それにエキストラの仕事では、空気になることが大切です。空気になると言うのはその場において当たり前、それが無いと落ち着かないと

いう意味で自分は使ってます。目立たないようにする『気配遮断』、それと一緒に空気を読み、視点を理解する技術である『百式演技術』を磨くことが出来ます。

これはいい仕事を引きました。暗殺者ビルドも俳優ビルドも上げられるとか良物件過ぎますね。

> 貴女は領いて立ち去ろうとすると、百城千世子に呼び止められました。

ん？ なんででしょうか。これ以上ウキウキな気分を破壊しないで頂きたい。

「宜しくね、頭鬼恋歌さん」

挨拶、でしょうか。さつきもしたのに不思議な子ですね。そういう所が素敵だと思いますが、友達出来ない要因では？

今回はエキストラの仕事から始めたいと思います。ご視聴ありがとうございました。

私が呼んだのは、頭鬼恋歌だけだったはずなのに何故かあの子まで来ていた。

「アリサさん、頭鬼恋歌ちゃんって子、採用したんだよね？」
「…ええ」

「天使」と呼ばれ、周囲の視線を気にする彼女が自分の前で肉を目の前にした飢えた獣のように目を光らせているのを初めて見た。頭鬼恋歌を採用したのは失敗したか、そう後悔した。

本来であれば採用するはずがなかった。メソッド演技という異能、百城千世子の技術を持つとはいえ、彼女は簡単に他の役者を喰らい潰す。そんなことをされてはスターズが成り立たない。だが

「頭鬼恋歌、良いですね。ビジュアルは少しい程度だが、彼女の演技は良かった」

「まあ、夜風景を落としてしまった以上、彼女には劣るとは言え、商業的価値はあるでしょうね。取っついておいては如何ですか、社長」

大半の審査員からそう言われてしまつては独断で落とす訳には行かなかつた。苦々しく思いつつ合格通知を彼女の元に郵送した。

そんな風に思つていると、ノックと入室許可を求める快活な声が聞こえた。憂鬱な気持ちを息を少し吐くことで引き締め、前を向く。入室を許可すると、笑顔の少女が入ってくる。千世子に目を少しだけ向けると、満面の笑みを浮かべているのが見える。それを見てくだらないことを思い出す。確か笑顔の起源は威嚇だという説だったような気がする。：あながち間違つてないのかもしれない。

礼儀良く頭鬼恋歌は挨拶すると、早速千世子が仕掛ける。ある程度進むと満足したらしく、私の方に視線を掛ける。

「話は終わったかしら。頭鬼恋歌、貴女に仕事がある」

仕事の内容はドラマのエキストラ。彼女ほどの才能をここで使うのは惜しいと言われかねないし、普通の役者であれば文句を言うものも少なくない。役者であれば目立ちたい筈なのだから。

だが、彼女は違った。役者の仕事に貴賤はないと言い放ち、やらせてくださいとまで言ってきた。

：認めたくは無いが、そういう気概は役者にとって必要なものだ。幸せなまま輝き続ける一番星というのがスターズの目標である以上は手放して褒めることは出来ないが。

千世子がまた話しかける。というよりは挨拶だろう。このドラマの主演は千世子であり、推薦してきたのも彼女なのだから。

この後のことを考えると、頭痛が止まらない。今よりずっと煌めいているスターズのことを、そしてそれを焼き尽くすほどの熱を持つ太陽のことを。手綱を握らなければと気をもう一度引き締める。

綺麗に咲くのは一輪だけ

さて、やって来ましたね。エキストラ。今回出演する作品の内容をサラッと説明すると、小悪魔系女子高校生が転校してきた強面男子高校生（ゴリラ）とイチヤイチャするお話です。かーっ、ぺっ（唾吐き）。青春とか自分に無かったもの出されるとムカつきますね。そんな個人的なことは置いて、何故か主演女優の名前が伏せられてるんですよね。なんで？

> 貴女がセットを眺めたり、カメラの位置を把握していると、誰かが近づいてくる気配を感じる。『気配察知L V I』を獲得した。

『気配察知』k t k r！『気配察知』のいい所は視線に対して敏感になれる点ですね。俳優においてカメラがどこを撮っているのかが瞬時に何処にあるか分かるのは強みですし、暗殺者には言うまでもなく必須な技術です。近づいてくるのは誰でしょう。一応、気付かないふりをおきましょう。何かイベントが見れるかも知れませんし。

> 目を手で覆い隠され貴女は驚いた。ほのかに甘い香りが漂い、耳元で囁かれる。

だれえ：

「だーれだ」

> クスツと笑う声が聞こえるが、その言葉節にはまだ怒りを感じる。

あっ：（察し）

> 貴女は声からその人物の名前を言い当てる。

「バレちゃった、頭鬼さん鋭いね」

> 目を覆っていた手を離され、貴女が後ろを振り向くと、可愛らしく悪戯がバレてしまった子供のように舌を少し出す百城千世子が立っていた。

ぐっ、可愛い：：というか、千世子ちゃんが何故ここに？好感度が高いとかでないと思援は無いと思うんですが：特に千世子ちゃんの場合は特定の人と親しくしているところを周囲に見られるのを嫌います。何がスキヤンダルになるかわかりませんかからね。

>どうしてここに？と貴女が尋ねると、百城千世子は笑顔で答える。

「主演だもの、当たり前でしょ？」

あー終わった。これは失踪案件ですわ。前回の挨拶はそういうことですか。千世子ちゃんにめっちゃくちや嫌われてませんか？恋歌ちゃん。用意周到ないじめですよこれ……

>貴女が驚くと、百城千世子は嬉しそうに頑張っただけ告げ他のキャストとの打ち合わせに行ってしまう。

エキストラだからこれ以上、千世子ちゃんと関わることは無いですし、今日限りの出演なので問題はありませんが、何処かで好感度調整必要ですね。友人は無理でもビジネスライクな関係を目指しましょう。

監督から指示があり、始まりましたね。恋歌ちゃんは教室で真面目に勉強するAちゃんになりきりましょう。知力低いですが頭いい風の演技は出来ますよ。

このシーンでは千世子ちゃんがゴリラとご飯を食べてイチヤイチャするシーンですね。割と終盤に近いです。もう殆ど結ばれているのに近いですね。それにしても…ゴリラも演技は主演として素晴らしいですが、千世子ちゃんは群を抜いてますね。今のカメラの切り替えで入りかけた他のエキストラをあーんすることで隠しました。自分も千世子ちゃんにあーんされたいです。

前回も言った通り、ここでは空気を読みましょう。千世子ちゃん主演の作品で暴れていいのはデスアイランドくらいです。しかもこの好感度だと余計な恨みを買いかねません。じつとして置くが吉です。

よし、演技にガバは無く、滞りなく終了しましたね。千世子ちゃんに見つかる前にコソコソ帰りましょうね。才能があり過ぎるところで主演を霞ませてしまい、周囲の好感度を下げたりするので、俳優ルートでも天才な方はそこを注意しましょう。実際、買ったばかりの頃は嫉妬に駆られた主演に殺害ENDとかあったので…

おっ、あそこにいるのは源真咲くんですね。デスアイランド編ではお世話になった方もいらっしやると思いますし、彼を乙女ゲーのごと

く攻略した方も居ると思います。今回はエキストラですね。恋歌ちゃんと同じです。話しかけてみましょうか。

＞貴女は椅子に座って電車を待つ青年に話しかける。

「ん、ああ…誰かと思えばアンタか。スターズの奴だったよな」

＞少しダルそうにしながらも話してくれる。源真咲と名乗る青年と電車から降りるまで話した。

彼基本的にお人好しなんで好きですねえ…あと殺しやすいです。好感度も上がるので恋人にでもなれば即殺せますよ。

そう言えば、再評価された演技ステータスを確認してませんでした。えっと『メソッド演技』A―評価、『百式演技術(改)』C評価。メソッド演技が上がってるのはなんでですかね!?いや、マイナスも付いているので実質B＋よりちよつといいかな程度ですが…あと、『百式演技術』が『百式演技術(改)』になってます。なあにこれえ…

頭鬼恋歌と喋ったのは帰りの電車を待っていた時だった。スルツと隣に座って自然に喋りかけてきた。めんどくさかったが、スターズに新人が入ったのはホームページで把握していたからパイプ作りじゃないけど少しだけ話そうと思った。

喋っていると何年来の友達かと思うくらいに話が弾んだ。あいつは人の懐に入るのが上手かった。SNSを交換しようと思っ掛けられ、つい交換してしまった。

家に帰って、初対面なのに色々ぶちまけてしまったことに恥ずかしさを覚えた。自分の方が演技は上手いのにはルックスだけで役を取られた話とか、そういうのを話してしまった。

恥ずかしさを紛らわす為にテレビを付けて忘れようとした。何か映画でも見よう。そう思ったらシチューのCMが始まった。

思わず見入ってしまった。繊細な表情を出す彼女に勝てないと思った。名もしれない女優だが、きつと化けるだろうなど。だけどそれが悔しくてしよがなかつた。

暫く俯いていると、カレーのCMが始まった。そこには今日会話した頭鬼恋歌の顔があった。快活な少女だが目立つタイプではなく、俺でも演技力で、経験で、技術で勝てるかもしれないと思った彼女は化け物だった。

勝てないとかそういう次元じゃなかった。技術が違う。百城千世子のあの惹き付け方を少しアレンジしていて、周囲との差がまだあるが慣れてくればもっと上手く人の視線を集めるだろう。先程の女優のようなりアリティも兼ね備えている。見る者にカレーを食べたいと思わせ、この商品の名前を印象づけるだけではなくきちんと自分の主張をする。

啞然とした。こんな、演技があるのかと。そして自分を省みて笑った。いや、笑うしか無かった。経験も努力も無駄なのだ。彼女達のような天才には自分のような凡人が追いつく隙など無くて、他者を見下すことでしか自分を保てない自分が憎くてしようがなかった。

「おれは…」

何になりたかったのだろうか。演技ですらないものを振り回して、役者を目指して。

かくして、源真咲はこの瞬間に死んだ。これから彼を演じるのは、源真咲だ。凡才な自分で追いつけないなら、自分なんてものは殺してしまえばいい。

それだけが天才に追いつく唯一の解だと思ったから。

明ケナイ夜ハナイ

前回の終わりは取り乱して申し訳ありませんでした。失踪しようと思っていたんですが、思い留まりました。新しいEND開拓はこの後の走者達の希望になると思うので(建前)、別に新しいEND開拓で名を挙げたいとかじゃないです(本音)。

メソッド演技が上がっていたのは、正直好都合です。この後のデスアイランド編で千世子ちゃん、景ちゃんと戦うにはこの演技は欠かせませんから。ですが：百式演技術(改)はよく分かりません。不確定要素であり、今までの実況者でも見たことの無い発展を遂げてるからです。評価上下は有り得ます。筋トレをしなければ筋肉が落ちていく人が居るように、演技も技術を磨かなければ下がります。ですがオリジナルという形で発展するのは今回が初めてです。他に発現した方が居れば是非動画投稿をお願いしたいですね。

取り敢えず、真咲くんの連絡先をゲットしましたがデスアイランド編まで彼と会うつもりはありません。恋歌ちゃんには暗殺者ビルドの準備をして貰います。暗殺者ビルドで必須なのは『気配察知』、『気配遮断』、『暗殺術』ですね。『気配察知』は習得済み、『気配遮断』は習熟度上げ中ですが、『暗殺術』に限っては普通のやり方では習得出来ません。当たり前ですがこのルートで主要人物以外の人物を殺してはなりません。犯行現場を見られたら容赦無く殺って構いませんが。『暗殺術』を習得には“人を殺す”、“誰かから教わる”のふたつです。先程も言った通り主要人物以外の殺害は例外を除きNGなので、必然的に“誰かから教わる”しかない訳です。じゃあ誰に教わるの？と問われればこの方でしょう。

「初めまして、頭鬼恋歌さん。まさか貴女の方からやってくるとは：意外でした」

＞貴女は彼に要件を伝えた。彼は最初驚いた顔をしたが、次の瞬間には、にこつと笑っている。その笑みは胡散臭さとは程遠いが、何故か信用出来ない。

「いや、まさか貴女のような方がそのような技術を欲しているとは。

ですが、私もビジネスマンですよ？」

「>貴女は取引を持ちかけた。彼は隅々まで聞き、拍手した。素晴らしいな。都合が良すぎて、まるで悪魔と喋っているかのようだ」

「>それはお互い様では？と貴女は彼に答える。彼はまた笑うと、そう言えば自己紹介がまだでしたね。と言っても私の元に来た以上、知っているでしょうがと名刺を差し出す。

「私は天知心一と言います。貴女をこの業界で一番に輝かせましょう。ああ、いえ、夜風景をこの業界で、の方が貴女の意向に沿っているでしょうか」

「恋歌お姉ちゃん、遅いね」

レイがぼつりと呟く。最近は何日泊まっていたので、寂しくなったのだろう。私も、少し：いやだいが寂しい。恋歌が居る時はこの部屋は明るくて、帰ってきたと思える場所だった。

「恋歌に見て欲しかったわ」

今日やったエキストラでのお仕事は残念ながら外されてしまったけど、それ以上に「自分の知らない自分」を知れたことがとても嬉しくてしやうがなかった。

本気の恋歌の芝居を見たのは二回だけ、一回目はルイとレイが寝たあとに見せてくれた『ロミオとジュリエット』。二回目はカレーのCMの時。彼女は私の目を見据えてふつと笑った。私が恋歌の視線を間違えるわけないからきつとそう。あの時彼女は私にこう訴えたのだ。

『置いてっちゃうよ』

それだけは嫌だ。早く演技が上手くなって、恋歌に追いつかなければならない。スターズで彼女はもっと技術を磨くだろう。演技をする度に彼女が遠く離れていくのを感じる。

待っていて、恋歌。必ず追いつくから。そして貴女の隣に相應しく

なったら。その時こそ…

「景ちゃん、レイちゃん、ルイくん、たっだいまあ」

元気に満ち溢れた声が玄関から聞こえる。その声で一気に家が騒がしくなる。そして私の心も満たされる。

「おかえり、恋歌」

とびっきりの笑顔で彼女を迎えよう。彼女が好きな、愛情を込めたカレーで彼女を幸せにしよう。それが私に生きる意味を、“幸せ”をくれた彼女に対する私が今出来る唯一のお返しだから。

“天使”と悪魔

デスアイランド編が始まるまでは暇です。一応、『暗殺術』や『気配遮断』の習熟度上げは有りますが、夜なので。あと単調なのでこの習熟度上げは動画に乗せません。ご了承ください。

じゃあ、それまで何するの？と聞かれれば日常パートです。やったぜ！胃痛の原因がだいぶ薄れるぞ！と思ったら大間違いです。寧ろ胃痛が増します。現在の状況を説明すると景ちゃんはデスアイランドのオーデイションを受けに行っており、恋歌ちゃんは確定しました。多分、千世子ちゃんのせいですね。別に強権を使った訳では無さそうですが…この子、使わない？みたいなニュアンスはあったと思います。先輩から嫌がらせを受けてます、助けてください。

日常パートにおいてRTA勢は習熟度上げを勤しみ、他の主要人物との好感度を疎かにしていると思います。ぶっちゃけ出来ることから、自分も好感度無視したいですが千世子ちゃんから熱烈な怒りアピルを受けている以上、緩和が必要です。なので、千世子ちゃんとデートします。

もう一度言います。千世子ちゃんと、デート、します。これは非常にリスクです。好感度高くないと振られる確率しかないイベントですがスターズであれば、ある程度は仕方なく着いてきてくれます。現場を回すために仕方ないよねと言わんばかりに退屈そうな顔で。一回スターズのイケメン俳優で攻略しようとして、退屈な顔をされた時はトラウマになりました。やめてよ、その顔。

＞百城千世子を遊びに誘った。すると百城千世子は満面の笑みを浮かべ了承した。今度の土曜日に遊ぶ約束をした。

うえええ!?満面の笑みを浮かべは好感度が高い時に出るセリフですよオ。どういうこと?情緒不安定にも程があるでしょう。今度の土曜日ですが、景ちゃんと千世子ちゃんの初対面ですね。景ちゃんに千世子ちゃんには注意しとけと言っておくべきでしょうか。新人、いびりやがつて…

取り敢えず約束は出来ました。ラッキーですね、こんなに上手く行

くことは殆どありませんよ。今回は短いですがここで終わりにしたいと思います。ご視聴ありがとうございました！

土曜日、顔合わせが終わった私は水族館で頭鬼恋歌を待っていた。今日は夜風さんのお陰で頭鬼恋歌に抱いていた怒りが更に燃えるのを感じた。勿論、夜風さんにも怒っている。だけどこの身を焦がすほどの感情は彼女だけにある。

「遅かったね」

息を切らしてやってきた彼女に私はチケットを渡す。どうやら何か用事があつたようだ。

「それって、私より大切な用事？」

言って後悔する。面倒臭いことを言ってしまった。何よりなんだその質問は。まるで独占欲に駆られた彼女のような発言に自己嫌悪を催す。

彼女は申し訳なさそうにごめんね、というので、いいよと返すと、パツと笑顔になり私の手を引く。この切り替えの早さは演技でも活かされていたなと思う。夜風さんは引き摺り込まれてしまいそうな怖さがあるが、彼女はギリギリのラインを知っているのだろう。

一通り見て、ベンチで休む。その時にこの間の私が主演を務めたドラマの話になった。可愛かったと少し褒めてくれた後に、でもあの時の演出はと続き、私の技術をよく見てるなと思う。説明は下手くそだけど、私が失敗したと思つた点をきちんと話してくれる。

そう言えば、彼女に撮影が終わった後、ゆっくり話そうと思つていたのに彼女はそそくさ帰ってしまったのだ。私の演技をもっと褒めて欲しいのに。私が貴女より演技が技術が優れていることを証明するチャンスだったのに。

でもそれを直接言うのは私が我儘を言っているようで不愉快だ。これはただ「女優」が「お客さん」の下した評価を覆したいだけなのだから。

「楽しかったね、水族館」

思っても無いことを言ってみる。水族館なんてこれっぽっちも興味が無くて、貴女に誘われたから来ただけ。貴女に対する感情いかりの再確認でしか無かったのに。貴女は幸せそうに頷いて、また来ようねなんて。

「…本当に嫌い」

絶対に聞かれてはならないけど溢れてしまうこの言葉を出来るだけ小さく言う。彼女は何か言った？と首を傾げるが、私はなんでもないと返す。

私がスターズの「天使」なら、頭鬼恋歌は悪魔だ。人の心を惑わし、油断したら地獄の業火で焼き尽くす。そんな悪魔だ。

そんなことを考えていると、日が傾き始めていることに気付く。もう閉館の時間だ。…感情いかりを確かめる時間は終わり。帰り次第、統計と学習が待ってる。ただ彼女に、これだけは言っておかなければならない。

「…恋歌ちゃん、私は売れる作品を作るためなら何だってする。仮面を被ってでも、技術だけだと嘲笑されても、スターズのゴリ押し女優だと批判されても。私は売れる作品を作らなきゃ行けない」

夕陽で顔が見えないけど、彼女は少し笑っている気がする。

「貴女は凄いや。夜風さんの演技のリアリティさも、私の技術も取り込んで進化し続けている。でも、私も」

私も、負けない。貴女が私から目を離せなくなるほどの作品を叩きつけてみせるから。

朝の陽射しが翳る

千世子ちゃんとの水族館楽しかったですね。好感度が上がったんじゃないでしょうか？いやあ、デートスポット、ネットで調べた甲斐がありましたよ。ビジネスライクヘ1歩踏み出しましたね。

さて、今日は本当に日常パートです。高校に出席します。動画では初めてですね。このゲームで学生であるメリットは本来あまり無いです。俳優ルートなら時間取るのが難しく最悪中退、暗殺者ルートなら牢獄入りでENDなんてザラです。ただ景ちゃんのようないメソッド演技特化型や他のルートでは楽しみつつ必要な時間になってきます。

「暗殺の天使」において『知力』は必要ありませんが、景ちゃんに関わった映画研究部を殺すのは必要になります。景ちゃんに関わってしまったのが運の尽きですね。安心してください、痛みも感じさせないまま殺るので。

＞貴女は映画研究部に向かう。中ではスマホを弄った少女がソファに寝転んでいる。少女は貴女を誰かと勘違いしているようだ。

「吉岡、おっそいよ…」

＞笑顔で挨拶する。挨拶は仲良くなるための第1歩だ。

「えつと2組の頭鬼さん…?」

＞どうやら貴女のことを彼女は知っているようだ。貴女は映画研究部に入りたい旨を伝える。

「あ、いや、私はその幽霊部員みたいなものだから」

知ってますよオ。リョーマくん大好きでもんね…ニチャア。冗談です。NTRは個人の内です楽しむものだと思います。そんなどうでもいいことは置いて、何故映画研究部に入部するかを説明しておきます。簡単に言えば、彼女たちと仲良くなって殺りやすくする為と夜風景の帰る場所を作る為です。恋歌ちゃんが居た方がスムーズに行くと思うんですね。やったことは無いですが、やる価値はあると思います。

取り敢えずは距離を詰めていきましよう。彼女は景ちゃんにトラ

ウマ付けられてますが、恋歌ちゃんほどの『器用』さならぐんつと近付けます。ぶつちやけ寂しがり屋なんですよ、彼女。なのでリョーマくんが居ない時は恋歌ちゃんて埋めましょう。

次回は少し進んで、デスアイランド編から始めたいと思います。ご視聴ありがとうございます。

その日はリョーマも居なくて、吉岡に飲み物をパシらせていたから部屋に1人だった。リョーマも居ないし、飲み物さえ来たら帰ろうと思っていたら。ドアが空いた。

「吉岡、おっそいよ…」

面倒臭いけど受け取ろうとしたら、可愛い黒髪の少女が立っていた。そして元気に挨拶される。戸惑う私に入部届を出してくる。

彼女は最近スターズに所属したと言われる頭鬼恋歌だったか。2組の方だから遠いけど噂が流れてきていたから覚えている。可愛い、が夜風景の方が上だな、なんて失礼なことを考えている自分がいた。でも間違いなく、会話のスキルは彼女の方が上だった。見下したりせず、対等に私と話してくれた。だからか、つい言ってしまったのだ。「夜風って居るじゃん？私、あの子のこと嫌いなんだよね…絶対見下してるし」

今でも失言だったと思う。傷つけられたからって傷つけて良い訳じゃないのに。

はっとした時には私はソファに押し倒されていた。そして笑顔の頭鬼恋歌に耳元で囁かれた。

「景ちゃんのこと、あんまり悪く言うとは…×しちゃうよ?」

冷や汗が止まらなかつた。今まで温厚だった彼女が一瞬にして鬼に変わったかのように恐怖を感じた。身体が動かなくて、息が乱れる。彼女から放たれる威圧に対応出来ない。

「い、い、いめんなさい」

そう言うのが精一杯で、彼女がよく言えました、と離れた時には号

泣してしまった。その後は彼女からも謝罪があつたけど。私はこのことを忘れない、いや忘れられないだろう。

星が瞬く、月は沈む

前回の日常パートが終わり、デスアイランド編に入ろうとしたんですが、急遽一個お仕事が入りました。しかもエキストラでは無く、1話限りのゲストのような形ですが、そこそこ有名な作品ですからいい経験だと思い引き受けました。

このゲームでは基本的にスターズで商業的価値が認められれば、簡単に主役級とか華のある仕事をさせて貰えますが、アリサさんに（悪い意味で）目をつけられると端役とかあまり仕事を与えられません。横暴だ!!、なんて社長室に殴り込むとゲームオーバーです。権力に逆らうなんてアホなこととはしてはなりませんよ。

今回恋歌ちゃんが演じるのは、刑事ドラマの犯人役です。いや、マジかよ。凄い良い役頂きましたね。我、新人ぞ? いいんですか、社長（ごますり）。共演者は和歌月千ちゃんですね。くっそかわいいので投稿者のお気に入りです。真面目なところとか好きだし、控えめに言って結婚して欲しい……でも、そんな彼女は被害者役なので恋歌ちゃんに殺されます。現実でもいつか殺されるので予行練習ですかね。

現場に行くまで、ロケバスで台本を読んでおきましょう。恋歌ちゃんには『知力L V 1』なのでアドリブ多めになってしまいがちですが、それは作品の雰囲気壊しかねないので。あと和歌月ちゃんが緊張していたら話して適切な緊張感に持っていくことで、好感度を上げつつ演技評価が下がるのを防げます。演技は1人だけが突出しても評価が下がるので千世子ちゃんが居ない時は自分で共演者達の演技をカバーしましょう。演技力低い子でも何かしらフォローできる点があるので。ですから『百式演技術』とは行かなくても、俯瞰する技術は俳優ルートの際は所持しておいた方がいいと思います。景ちゃんのよう到他者に影響を与えるアビリティを持っていればそれでも構いません。

> 貴女は現場に着いた。台本は何度も繰り返し読んだので少しは覚えられただろう。貴女は適度な緊張感を感じる。

いいですね、4割くらいは台本は覚ええました。『知力』低めの割にはやるじゃないですか。え？4割は少な過ぎる？……さて、適度な緊張感もあるみたいなんでこれはいい演技が出来ると思いますよ！

……終わりましたね。つつがなく進んだと思います。ド定番の崖で追い詰められましたね。ていうかなんで崖に追い詰めちゃうんですかね。説得ミスったら死にますよ？

それにしても『暗殺術』を取っていたからか、迫真の演技が出来ましたね。監督からも褒められましたし、悪い気はしないですデユフ。いやあ、もつと褒めてくれていいですよ？恋歌ちゃん、褒められると伸びるタイプなんで。

帰りのロケバスでも和歌月ちゃんと好感度上げをしておきましょう。別に個人的な感情は一切ありませんが。少しくらい友人以上が居たってええやろ、な気持ちです。親友の方が殺りやすいから好感度を上げていますですよ？変な勘ぐりはやめてください（早口）

>ロケバスから下りて帰ろうと歩いていると、先に降りた筈の和歌月千と出会った。どうやら彼女と同じ方向らしい。

やったぜ!!…ゲフンゲフン、失礼しました。つい大声を。冷静に、進めていきましよう。ここで好感度が下がったら失踪します。

>貴女は彼女と一緒に帰ろうと提案した。

「良いですけど…」

>少し困惑した顔の彼女と貴女は帰路に就いた。

へへっ、困惑した顔も可愛いですね。いやあ、今人生を一番謳歌していますよ。こんな幸せでいいんですか？やっぱり推しキャラと喋れるのもこのゲームのいい所ですね。今まで散々クソゲーとか、頭おかしいとか言ってきましたがやれば出来るじゃないですか。

>貴女と和歌月千が帰っていると

ん？なんかイベントですかね？

>目を見開いた夜風景が貴女と和歌月千の目の前に立っていた。彼女からは怒りと哀しみの感情が見える。

??なんで景ちゃん、そんな複雑な感情に？デスアイランドのオー

デイションのせいですかね。確かに俯瞰の視点がないのを気にするのは役者として分かりますが。勿論、恋歌ちゃんは『百式演技術』持ってますから心配無いです（強者の余裕）（煽り）（コーナーで差をつけろ）。

＞夜風景は口をパクパク動かすと目を伏せ、走って行ってしまった。

なんだったんでしょか…取り敢えず、今日はここまでにします。次回からデスアイランド編をやっていききたいと思うので宜しくお願いします。

私、和歌月千と頭鬼恋歌は同期だ。だが実力に大きく差があると私は理解している。本来、私が居る座も夜風景が取っていた筈なのに私が受かってしまった。

オーデイションで見た彼女たちの芝居は、私が努力して追いつけるものか。そう考えると自分が受かったことに納得がいかない。

それでも芝居は好きだし、全力で取り組むことに変わりは無かったです。そんな努力が実を結んだのか、被害者役とはいえ刑事ドラマに出させて貰えることになった。

「スターズ所属の和歌月千です。若輩者ですが宜しくお願いします」

先輩や共演者の方に挨拶回りをしておく。そこには頭鬼恋歌も着いてきていた。彼女は今回犯人役という新人にしては異例の大抜擢をされていた。それに文句を言うスターズのメンバーや他事務所の方も居たが、彼女の演技を見ればその文句は賞賛に変わるだろう。彼女の演技は良い意味でも悪い意味でも人に影響を及ぼす。

ロケバスに乗り込み、現場が近づくに連れ、緊張で震えてきてしまった。殺陣の経験はある。だが緊張というのは経験があってもやってきてしまう。止まれ、止まれと念じていると余計に震えが増す。すると隣に座っていた頭鬼さんが手を握ってくれ、微笑んでくれた。少し落ち着いてくると、彼女はお話しようと言葉を解してくれ

た。程よい緊張感になるとロケバスは現場に着いた。彼女にお礼を、
と思つたが彼女は既に居なくなつていた。

演技が始まり、私が彼女に部屋で殺されるシーンになった。だが、
彼女の身長は私より小さく、見る人が見れば鍛えているのが分かる私
を殺す演技をしてもリァリテイが無いのでは、と心配した。そんな心
配は彼女の演技で無用だと思ひ知らされたが。

「来ないでー」

ナイフを持った彼女が近づいてきて私が叫ぶ。凶器を持っている、
それは確かに怖い。だが、もしかしたら抵抗出来るかもしれない。そ
んな体躯の彼女に私は本気で恐怖を感じていた。ひとつひとつの足
運びが違う。目が、手が、違う。まるで暗殺者のように音もなくひた
ひた近付き、ナイフが私の胸に刺さる???

「はい、カット！いいね、和歌月ちゃんも頭鬼ちゃんもいい演技だったよ」

監督からいい演技だと褒めてもらえる。それは役者にとって嬉し
いことであるはずなのに。今はそんなことが頭に入つてこない。冷
や汗が止まらない。心臓の鼓動がうるさい。あのロケバスで私の手
を握ってくれた温かい手が、一瞬にして私の命を奪う冷酷な手に変貌
した。

彼女が冷や汗をかく私にタオルを渡してくれる。大丈夫？と微笑
む彼女にロケバスの時を含めた感謝をして離れる。

ロケバスでも彼女は話しかけてきてくれたが上手く笑つて喋れた
かは分からない。引き攣つていたら失礼だと思ひつつも、引き攣つて
しまうことをしようがないとも感じていた。

ロケバスから降りて歩いていたら、また彼女に出会つた。飲んでい
たお茶を吹き出しそうになるもすんで留まる。スターズの俳優が
そんなことをしてはいけない。彼女は笑顔で一緒に帰ろうと言つて
きた。同じ方向らしいので断る理由も思ひつかず頷いた。

そうやって一緒に談笑しながら帰っていると目の前に夜風景が居
ることに気がついた。瞳孔は開き、私と恋歌さんをじつと見ている。
様子がおかしいことに気づき、喋りかけようとしたら何処かへ行つて

しまった。恋歌さんと顔を見合せ首を傾げる。一体、何があったのだ
ろうか。

【幕間】 暗夜に灯火を失う／能ある “天使” は爪を隠す

見て、しまった。恋歌が私以外の知らない女の子と楽しそうに喋っているのを。心が張り裂けそうになるほど痛い。デスアイランドのオーディションで茜ちゃんに迷惑をかけてしまったことより、真咲君と武光君にフォローを任せつきりにしてしまったことより、悔しくて辛くて。

「かお、ぐちゃぐちゃね」

家に帰らず、近くのトイレに逃げ込む。鏡を見ると涙で顔が酷いことになっていた。家に帰れば、恋歌が帰ってきてしまう。そうしたらあの人と喋っているのを嫌でも思い出してしまう。映画を見ればこの感情も忘れられる…だろうか。多分出来るとは思う。笑顔も、いつも通り。でももし何かの拍子にこの感情を思い出してしまったら、私はきつと耐えきれない。

「…恋歌は私の事、どう思ってるのかしら？」

聞いてこなかった彼女の私に対する感情。聞けば楽になれるかもしれない。でも嫌いとかうざいとか思われていたら私は立ち直れない。ルイとレイのことすら忘れて映画にのめり込んでしまうかもしれない。

「恋歌…ねえ、恋歌……」

この想いが何なのか、まだ私に理解出来ないけど。恐らく醜い感情だろう。嫉妬、憎悪、溺愛、憤怒、悲哀…どう形容すればいいのか。言葉では表しきれない。でも私は役者だ。

「…戻ろう」

涙に濡れた顔を水で洗い流し、トイレから出る。私の中にある醜い感情は私の “知らないモノ” だ。そして言葉で表現出来ないなら、芝居で表現すればいい。

恋歌と喋っていたあの人には感謝しなくてはならない。私にこの感情を教えてくれたのはあの人なのだから。

いつの間にか、口角が上がっていることに気づく。それを頑張つて元に戻す。いけない、この感情は取っておかないといけないものだから。私が新しい「私」に進化する為に必要なモノ。

まずはデスアイランドオーデイションでの失態を取り返す。そして千世子さんの技術を手に入れれば。

「恋歌は私を見てくれるはず」

置いてかれてはならない。彼女と私は常に隣に居なければいけないから。

台本を読む。共演者たちの癖や演技を見る。監督の作品の傾向からスタッフ一覧を隅々まで見て、夜風景と恋歌ちゃんの2人が目に入る度に少しため息をついてしまう。どちらもイレギュラーだ。夜風景は共演者たちをおかしな方に引っ張りかねない。恋歌ちゃんは共演者たちを呑み込みかねない。

「それじゃあ、困るんだよね」

作品はたった一人で回っているものじゃない。演出家、脚本家、その他のスタッフ、資金を提供してくれる企業、役者そして1番大切な大衆。これらの何かが欠けてしまったらその作品は成り立たない。イレギュラーのせいで作品はお蔵入りですなんて笑えないのだ。

10秒でチャージ出来るモノを飲みつつ、カメラ位置、画面サイズの確認もする。それと平行して彼女たちの対処を考える。

恋歌ちゃんは恐らく空気は読める。自分の影響力を知らないだけで、撮影自体を破壊するつもりは無い。だから頑張れば抑えられる、かもしれない。

「問題は夜風さんなんだよね」

彼女は周囲を顧みない。自分の演技をありのままに演じてしまう。好きじゃないものを好きないように振る舞えないし、その逆も出来ない。お芝居としては未完成過ぎる。周囲の影響力も恋歌ちゃん程じゃないにしても持っているのだ。

「また私任せ、か」

でも嫌ではない。女優は天職だと思っているし、何より。

「ここで私が恋歌ちゃんを夜風さんを完璧に制御出来たら、恋歌ちゃんは私に拍手喝采を贈るしかないよね」

仮面を被ったまま、*“天使”*のまままで貴女に勝てたらそれはどれだけの喜びなのだろう。柄にもなく、ワクワクしてきてしまった。気持ちを落ち着けると私はまた作業に戻る。パソコンと紙をめくる音だけが部屋に響き始めた。

【幕間】 蕾／その星は七光り

頭鬼恋歌と出会ったあの日から俺、源真咲の人生は全て変わった。誰よりも努力するなんて生半可な気持ちじゃ駄目なんだ。死ぬ気でなんて中途半端じゃ、あいつらには追いつけない。ひとつひとつの演技を丁寧に演じろ、そして源真咲なんて必要のない人間は殺してしまえ。その役に成りきれ。技術も大事だが、小手先で演じることに意味は無い。誰もそんなところ見ていないからだ。

「…飯、食ってなかったな」

演技法や最近の有名な俳優、作品、脚本家、演出家は大体チェックするようにした。朝昼夜の殆どをそれに費やして、偶にバイトをして飯を食う。最近ではその飯すら忘れがちになるし、バイトすら辞めて演技に集中したいがそれでは食い扶持が無い。

「時間が足りないな…才能も無いから笑っちゃおう」

自分で言っておいて悔しさが湧き上がる。けどこれが俺の原動力だ。才能も無いくせに演技が上手いなんて思い上がっていた自分を思い出す度に殺したくなる衝動に駆られる。羞恥ではなく憎悪だ。

飯を食べに、電車に乗り込む。その間もスマホでオーディション関連の検索は欠かさない。すると百城千世子の動画が急上昇に乗っているのを見かけた。試しに押してみようと画面をタップする。

「スターズ主催映画『デスアイランド』は24名の若手俳優を起用する予定です。うち12名は私を始めとしたスターズの俳優が務めさせて頂きます。残り12名は一般オーディションから募ります」

「私達と一緒に映画を作りませんか」

「スターズはまだ見ぬ才能を求めています。私はあなたとの共演を楽しみにしています」

ああ、天啓というのはこのように来るのか。神様なんて信じていなかったけど信じてしまっそうだ。スターズの引き立て役？上等だ、お前からかひとつでも多くの技術を盗んでやる。それに、あいつも居る。俺をこの地獄に突き落とした頭鬼恋歌も必ずこの映画に出る。勇んで応募をしに行く。その時にはもう飯を食うのを忘れていて、帰

りの電車で地獄を見たが。

そして1ヶ月後、俺の心を折ったもう1人、シチューの女である夜風景の起こしたオーディションでの事件で、別の意味で心を折られそうになるが、それは後で話そうと思う。

星アキラに主役の才能は無い。それは芝居に精通していたら抱いてしまうものだ。もし他の役を演じる才能があっても、それは未だ埋もれている。

星アキラに見た目以上の価値は無い。それは応援する層にミーハーな女性が多く、評論家には演技をつまらないと称されることからそう揶揄される。

星アキラは親の七光りと称される。スターズ所属だから、星アリスアがゴリ押しして起用させているのだと。大衆の評価が彼に下している評価は、スターズと星アリスア、百城千世子のお零れだと。

「…はっ…ぐっつう」

自宅のトレーニングルームで汗を流す。いつもは1人で筋トレしているのだが…今日は来訪者がいる。チラツと目を横に動かすとベンチプレスを大量の汗をかきながら持ち上げる黒髪の少女が見える。彼女の名は頭鬼恋歌。僕の後輩で、僕が追いつくことの出来ない天才の1人。

「あの、頭鬼君。なんでナチュラルに君は僕の部屋でトレーニングしているのかな」

堀先輩が筋トレしてるので、と何処かズレた回答をする。こういう所も夜風君を思い出させ苦手だし、意外と自由な所も千世子ちゃ…千世子君を思い出させる。あと僕の名前は星だ。

そもそも彼女をここに連れてきた経緯からして自分でも首を傾げる。昨日、事務所に仕事から帰ってきたら、珈琲を啜っていた彼女が筋トレ用具について聞いてきたのが会話の始まりだったのは覚えて

いる。女性で筋トレ用具について聞いてくる人はあまりいなかった。：というかスターズで余計な筋肉を付けかねない筋トレをする人は居なかったから調子に乗って語り過ぎてしまったのが間違いだっただけかもしれない。

「じゃあ、明日堀先輩の家で筋トレ良いですか？明日、休みですよね」あまりに自然に問われ咄嗟に、ああ、と返してしまった。いや、僕が悪いんだが。喋ることに夢中で彼女の質問もろくに聞いていなかった自分を殴りたい。この現場が、もし他の人に見つかったらスキャンダルだ。星アキラ、新人を自室に連れ込み、夜のトレーニングなんて冗談じゃない。筋トレで出た汗より、冷や汗が体を伝う。デスクアイランドを前にそんな不祥事を起こす訳にはいかない。

1 度息を吐いて冷静になると、汗だくできつそうな彼女を見て、休憩にしよう、と止めておく。筋トレは適度な負荷をかけるものだ。細かい彼女の体では明日に支障が出る可能性もある。身体が資本の役者が体調を崩す訳には行かない。

だが筋トレをしなくなると妙な静寂が訪れる。いつもお喋りな彼女にしては珍しく喋らず、変な緊張を覚える。

「堀先輩は、私の事嫌いですか？」

「うえッ?! い、いや：別にそんなことは無いが。後、星だ。いい加減覚えてくれないか頭鬼君」

唐突に投げ掛けられた質問に僕らしからぬ声が出る。そう、嫌いでは無いのだ。苦手なだけで。勿論、恋愛感情としての好きを持つことも無いし、同僚としては芝居に対する姿勢のみ好ましいとも思う。先輩に対する敬意は皆無だが。

「堀先輩って私の事、どう見えています？」

「どう、とは？」

「：うーん、みんな、私の事避けるんですよ。だから演技も含めて私はどう見えてるのかなって」

それはそうだ。スターズの中でも君は異色。夜風君寄りの演技でありながらここに所属し、自分達の演技まで殺しかねない俳優を好き好むわけない。彼女を避けないのは、オーディションで彼女に敵わな

いと悟った僕や和歌月君、千世子君くらいだろう。

「君、本当は理解しているんだろう？千世子君と同じ技術を持つ君が自分の置かれている状況を分らないはずない」

そう、千世子君と同じ、他人の視点を理解してそれを自分の演技に応用している彼女がこんな事に気づかない筈がない。

「理解はしてます。けど皆誤解しているんですよ。私に景ちゃん程の才能は無い、成長も無い。千世子ちゃん程の技術は無い、経験も無い。私、中途半端なんです」

僕の部屋の窓から彼女は下に居る人々を眺める。彼女が中途半端？なら自分は一体なんなのだ。君より、才能も技術もない自分はなんなんだ。

「星先輩、私の本当の演技見てくれませんか。誰の真似もしていない私の演技を」

「君の、本当の演技…？」

彼女は頷くと、演技をし始める。デスアイランドでの一幕を。その演技はいつもの彼女じゃない。まるで、星アキラ自身の演技を見てるかのような。模範解答であるが故につまらない、誰の目にも止まらないそんな演技だ。

「私、主演を張れる演技を持つてるわけじゃないんです。助演すらまともに出来ない。誤魔化しなんです、私の演技は全部。景ちゃんの真似、千世子ちゃんの真似、王賀美陸の真似」

自嘲するように語る。それを僕に語ってどうしたいのか、理解出来ない。自分も演技出来ない仲間だと言いたいのか。それなら、違おうと答えよう。僕は「本物の役者」になりたい。君とは違う。そう言うおとすると。

「でも、そんなことどうでもいい。私は真似でもいい。偽物でいい」
雰囲気が変わる。いつもの彼女だ。先程と同じ台詞、所作をしている筈なのに人を惹きつけ、作品をより良いものとへと昇華するそんな演技。僕が恐れ、敵わないと思いつつ、見惚れて、愚かにもそうなりたいと手を伸ばそうとしてしまった演技。それが終わると彼女は僕に手を差し出す。

「先輩、私と手を組みませんか。私が貴方を『本物の役者』にします。その代わり、スターズで私を自由にさせてください。他の先輩、邪魔なんです」

悪魔の囁きだ。自分に彼女を自由にする権限は無い。けど『本物の役者』というのは自分にとっての最大の願いで。

いつの間にか、彼女が差し出していた手を握っていた。これが星アキラの分岐点と言ってもいいだろう。主役を引き立てる『脇役』。そんな人生も、もしかしたらあったかもしれない。けれど彼はそれを放棄した。頭鬼恋歌の言葉で、彼女の演技を見て、彼は『主役』になる未来を選んだ。それは苦難と挫折の道だ。自分の才能から目を背け、理想を取る愚かな行為だ。でも彼は後悔しない。逃げない。

「僕は『本物の役者』になる」

いつもの楔としての決意じゃない。何度も絶望すると覚悟の上の決意だ。

今宵、七等星は僅かに光を増した。

デスアイランド編 茜色の空、鳥の鳴き声

前章をなんて括ればいいのかでほぼ一日費やしていましたが（実話）、思い付かないのでデスアイランド編を投稿したいと思います。

前回は、和歌月ちゃんと仲良k…じゃ無く暗殺の為の前準備をしていたところを景ちゃんに目撃されました。動画を編集して気づいたんですが、景ちゃんめちやくちや目を開いてましたね。すごく…おつきいです…なんて馬鹿なことを言ってる場合ではなく、もしかしてよく分からないが好感度が下がったのでは？と不安になりました。

以前も言った通り、ジェットコースター並の感情の揺れはこのゲームに実装されていない筈なので大丈夫だとは思いますが、愛情と憎悪は紙一重らしいですからね。皆さんも後ろから刺されないよう気をつけてくださいね！恋歌ちゃんは刺す側ですが。

結論としては、大丈夫でした。寧ろ今までよりスキンシップが激しくなりましたね。お風呂も一緒に入るようになりましたが、そのシーンを流すのは動画BANされかねないので投稿者の胸の内に秘めておきます。景ちゃん攻略ルートでもすればいつでも入れるみたいなので、やりたい方はどうぞ。

話が逸れましたが、デスアイランド編では千世子ちゃんの仮面を剥がす、景ちゃんが成長する、恋歌ちゃんが助演としての技術を高める為に使います。主要人物殺害の為には、この後出てくる人達と戦えるだけの力が必要なのでデスアイランド編は非常に有意義な時間ですね。この次に来る銀河鉄道の夜編は経験値も表現力もどちやくそ高いので是非やりたいですな。

因みに現在の恋歌ちゃんでは明神阿良也と戦う所か興味すら持つて貰えないです。そうすると銀河鉄道の夜編に出演出来ないの注意してください。スターズのイケメン俳優でやった時は名前は愚か、
“劇団天球”に足を踏み入れることすら許されませんでした。雑魚

がよオ!

また話が逸れましたね。すみません。デスアイランドのロケ地にはスターズ組とオーデイション組は別々で移動します。こちら辺でも対応の差が出ていますね。と言っても有象無象に近い俳優と、技術も名声も持っている俳優では対応に差が出るのは必然ですね。

> 貴女はロケバスに乗り込む。一番前の窓側の席に座ると横に笑顔の百城千世子が座る。

：千世子さん? ここ、和歌月ちゃんが座るところですよね? おかしいなあ、前回ガバが無かったから油断して席を間違えたみたいです。VIPがここに居る訳無いですよ。

> 貴女は自分が席を間違えたのだろうと席を立とうとする。ぐいつと袖を引つ張られ、貴女は無理矢理席に座らせられる。

「合ってるよ、恋歌ちゃん。私、酔いやすいから後ろに居ると直ぐに対応出来ないでしょ?」

窓側の方が酔わないと思います。あと、強権使わないでください。そんなに恋歌ちゃんのこと嫌いか!? 和歌月ちゃんと好感度稼がせろよ! イチャイチャして満足したら刺し殺すんだよ (人間のクズ) !!

うう、胃痛がしますね...別に千世子ちゃん隣でも進行に問題は無いです。心の持ちようです。隣にナイフ持った暗殺者が居るくらい恐ろしいですよ。

「おはよう、恋歌君」

> おはようございます、堀先輩と貴女は返す。

「いや、星なんだが...」

お、アキラくんですね。今日も爽やかフェイスですね。：死ぬばいののに (小声)。そう言えば君付けはアキラくんのデフォルトですが、名前呼びは珍しいですね。いつの間にか好感度が上がってるみたいです。好感度上げる面倒が減って投稿者は嬉しいですね。勝手にそこそこの関係値になってねえかなあ? そうすると進行するの楽なんですけど。まあ、好感度上げの楽しみが一切失われますからやりません。

> 道中では、星アキラ、百城千世子を中心に会話した。

！
さて、現場に着きましたね。初日に死ぬ役では無いので頑張るぞー
なんの見所さんも無く、初日は終了してしまいましたね。2日目に
期待しましょう。ご視聴ありがとうございました。

「…やっぱり、納得がいかへん。どうして、私が受かったんやろ」

釈然としない気持ちを抱えたまま、隣で台本を読み込む真咲ちゃんに話しかける。真咲ちゃんは同じ事務所に所属しているが、以前より雰囲気が変わったような気がする。演技も、周囲をフオローする力は元々高かったが、更に良くなっている。ただ役作りに没頭し過ぎて危うい姿を見せる時もあるが。

「…知らないですけど、やる気が無いなら辞めた方がいいですよ。夜風にああ言った以上、茜さんは最後までやり通すべきだ。そうじゃないとオーディションを落ちた奴にも夜風に切れた時のアンタにも失礼だ」

至極、当然の事を言われ、自分の発言を恥じる。受かった以上、合格基準が不明瞭だとしても役者としてやるべき事はやる。

「せやな…台本読み邪魔してごめん」

「大丈夫ですよ。この台本ほぼ暗記し終わってるんで。どう感情を込めるか考えてただけっすから」

そう言われ、真咲ちゃんの台本を見ると何度も読み込んだのだろうボロボロになっていた。以前の彼も、作品をきちんと知ろうという傾向にあったがここまでだったか。

「結構、読み込んでるんやね」

「…凡人が追いつくにはこの程度じゃ足りないですよ」

スターズの役者と比べているのか、そんなことを言う。私も負けていられないな、と台本を取り出す。台詞をどもったりしたら、他にも迷惑がかかるから。

俺、烏山武光はそこそこ恵まれていると思う！12名しか合格しないオーディションに受かり、夜風景という将来が気になる役者と仕事ができるのは僥倖だ。スターズの技術、特に百城千世子の技術を間近で見れるなんてそうそう無い。だからこそ、俺は恵まれている！

初日、スターズ組とオーディション組がデスアイランド内の校舎で合流するシーンで早速百城千世子の技術を目の当たりにした。湯島が台詞をどもってしまった所を自然にフオローする。全体を把握する力が無ければ、出来ないことに演技中ながらも感心してしまう。

そして、彼女を見た。いや見てしまった。彼女は夜凧と同じ原作には居ないキャラらしく、今回デスアイランドの運営と繋がるスパイのような役目だ。

頭鬼恋歌、無名だがスターズのオーディションを突破した以上は演技力を疑う必要は無い。だが予想以上だった。

「…見ちゃった？駄目だよ、駄目な子だなあ」

偶然彼女が扮するマイカが運営と連絡していたところを発見し、最初の犠牲者が出るシーンだ。まるで、本当に人を殺したことがあるかのような冷酷な目で、それで居て殺すことに快樂を見出した子供のような無邪気な笑みを浮かべてナイフを振り上げる。見ているだけで、足が震え、心臓を掴まれた気分になる。

横で見っていた夜凧は感受性が強そうだった。なら吐くくらいしそうだと思いつつ、目を動かす。

「凄い…人を殺すってああいう芝居になるのね。恋歌」

目を大きく開き、一挙一動を見逃さないように捉えていた。それは吐いている方がマシだったと思わせるくらい、口角を吊り上げて人を殺すという芝居を学んでいる何かだった。

その後、夜凧から芝居の稽古に付き合っただけと言われ、殺さないよな？と変な確認をしまい首を傾げられた。

“天使”が舞う頃に

さて2日目ですね。景ちゃんの嘔吐シーンがあります。嘔吐フェチの方は大喜びでしょうね、私はそこだけ2倍速にしますけど！

因みにここでは恋歌ちゃんは出ません。恋歌ちゃん扮するマイカちゃんは千世子ちゃんとかのグループだったり一人でいることが多いので。べ、別にぼっちちゃうわ（動揺）

自分のシーンが終わったら、この景ちゃん達のシーンを見て明日の朝飯を食べ次第、東京に戻ります。CMを1本撮った後に少し休憩挟んで、深夜にデスアイランドに帰ってくる感じですね、地獄です。おっと千世子ちゃんが隣に来ました、帰ってくれないか。俺はノンケなんだ。

「恋歌ちゃんも夜風さんに興味があるの？」

>唯一の親類と一緒に住んでいる、いい演技をすると貴女がそう答えると百城千世子はそう、と答えて黙る。

そう：（無関心）じゃないよ!?くそっ：何が正解だったんだよ。

演技が始まりましたね、じっくり見ましょう。『洞察力』のお陰で他人の演技を見れば見るほど、演技ステータスに経験値を還元しやすくなりますし、俯瞰技術を得た景ちゃんはいいい見本になります。『メソッド演技EX』は伊達じゃないのですよ。

うお、やっぱり何度見てもアレですね。迫真、否、本当の感情から引き出されてるからなあ：勉強にはなりますが恋歌ちゃんが使うとスターズからの信用がはやめちやに下がります。投稿者も吐くのは嫌ですね。ですが、これで景ちゃんが『百式演技術』に近いものを獲得しつつあります。この後倒れるので、介抱しましょう。茜ちゃんとも仲良くなりたいですから。武光くんともここで会話出来るので、友人程度には仲を深めておきましょう。後々彼とも演技するかもしれないですし。

>貴女が夜風景の部屋を訪れようとすると、扉の前に源真咲と背の高いうるさそうな男が立っている。

「げっ：恋歌」

「ん、頭鬼か」

「>不審者?と貴女は2人に問う。

「な訳ねえだろ。お粥と水だよ」

「すまないな、頭鬼。今少しいい所でな」

まあ、そうでしょうね。自分も彼女たちの関係修復に手を出すつもりはありません。いずれ恋歌ちゃんに殺されてしまうので、残り少ない人生を謳歌して欲しいですからね。

>扉の向こうから笑い声が聞こえる。夜風景と湯島茜が笑い合っているようだ。少しだけモヤつとする。

ん?なんでしょうね今のログ。取り敢えず入りましょう。時間は有限ですよ。

>貴女は2人にそろそろ入らないかと提案する。お粥が冷めてしまっただろう。

「わかっているよ、行くぞ」

「ああ」

ここで本日は終了したいと思います。ありがとうございました。今回は3日目ですね。

ロケバスに私は乗り込む。そして窓をずっと見ている恋歌ちゃんの隣に座る。和歌月さんだと思ったのか、こちらに顔を向けた彼女が驚くのを見て、喜びを感じる。悪戯が成功したから嬉しいだけで、恋歌ちゃんだからでは無いことは念押ししておく。

「千世子ちゃん、私席間違えたみたい」

少し動揺しているのか震えた声で私に言って席を離れようとする。残念、行かせないよ。彼女の袖を引っ張って席に座らせ、わざとらしく溜息をつきながら喋る。

「合ってるよ、恋歌ちゃん。私、酔いやすいから後ろに居ると直ぐに対応出来ないでしょ?」

適当なことを言っているので彼女にはお見通しだろう。だけど、彼

女が席から離れなければ私にとって満足だ。

「おはよう、恋歌君」

アキラ君が乗り込んできて、私に挨拶した後、恋歌ちゃんにも挨拶する。少しだけ私は驚く。彼が私以外の女性に名前呼びするなんて珍しいから。何かあったのか、アイコンタクトでアキラ君に聞いてみるもはぐらかされる。

「…恋歌ちゃんとアキラ君って仲がいいの？」

その態度に少し苛立ちを覚え、聞いてみる。自分でも何故そんなことを聞くのか分からないが。

「堀先輩とは筋肉の仲だよ」

「待ってくれ！それは何かおかしい！偶に一緒に筋トレしてるだけだ、千世子ちゃ…千世子君」

ふうん、と言いながら2人を見る。確かに恋歌ちゃんが恋心を抱いているようには見えない。ならいいか、と私の中にあるよく分からない感情を棄てる。恋歌ちゃんに対する感情は怒りだけあればいいと私は思うから。

その後、夜風さん達オーディション組と合流するシーンを撮り、次にそれぞれのシーンを撮っていく。早めに今日の撮影を終わらせた私は恋歌ちゃんの演技を見に行く。

：相変わらず良い演技をする。夜風さんのような暴走をしないように巧みに感情をコントロールしつつ、カメラの位置、距離を理解している。流星に人を殺したことは無いだろうけど、上手く恐怖の感情を周囲に見せている。

近くに烏山くと夜風さんが居るのを見つける。烏山くんは冷や汗をかいており彼女の演技に当てられているのが分かる。後で彼が暴走しないように、調整しなきゃなと心にメモする。そして夜風さんはじっと見ている。技術も感情も学習しているのだろう。私に言っていた俯瞰技術は恋歌ちゃんも習得しているのだから。

2日目、夜風さんが初の台詞を言うシーン。どんな演技をするのかを見る為にセットに行く。恋歌ちゃんも立っていた。

またよく分からない感情が浮かんできたので、誤魔化す為に彼女に

喋りかける。

「恋歌ちゃんも夜風さんに興味があるの？」

「うん、唯一の親類だね。一緒に住んでるんだ。景ちゃんは良い演技をするよ。私が嫉妬するくらいね」

嫉妬する、なんて言いながらも嬉しそうに彼女の話をする恋歌ちゃんに名状し難い感情が湧き上がる。私の演技のことはあまり褒めないのに、私の演技だけを見てほしいのに。私が貴女に最高の演技を見せなきや行けないのに。

「そう…」

自分でも驚くほどの冷たい声が出た。誰にも分からないように歯を食いしばって感情を殺す。夜風さんに抱く殺意にも似たこの感情と、恋歌ちゃんに抱いたこの感情のふたつは私に必要な無いものだから。

その後、夜風さんは吐いたりして色々大変だった。部屋に戻った私は何時もの日課であるエゴサすら忘れてベッドに倒れ込む。

「…私は”天使”（ももしろちよこ）。私が背負ってるのはこの作品全て」

呪文のように呟いて、私の心を落ち着かせる。そうでもしないと、何かに歯止めが利かないような気がしたから。

悪魔の契約

3日目の朝です。朝食を食べたらCM撮影に向かいました。プロデューサーさんが迎えに来てくれるので急ぐ必要はありませんが。

＞貴女が朝食を摂りに、食堂に来ると堂上竜吾と和歌月千が言い争っている。

原作におけるスターズ内での景ちゃん論争ですね。ぶっちゃけ関わらなくてもいいんですが、止めておきましょうか。先輩と同期よ、無駄な争いはやめませんか。

＞貴女は和歌月千の近くに朝食を置くと、2人の争いを止めようとする。

「頭鬼、お前だけにはこの話止める権利ねえからな」

「ごめん、恋歌さん。貴女だけはちよつと静かにしてて」

＞貴女は2人に一齐に言われてしまった。貴女は2人を止めることを諦め、夜風景たちの方で食べようと席を移動した。

何でだよ!?!止めるよ!!こんな失敗初めてなんですけど?!恋歌ちゃんスターズで虐められてるんですか?これ訴えていいですか?!

つか、2人で仲良く恋歌ちゃんの事ハブるなよ。畜生が…

景ちゃん一緒に食べよ!（豹変）そう言えば、ここでゲロ女呼ばわりされる景ちゃんを慰めれば好感度上げられるんじゃないですかね。しかも他の3人の好感度も!いやあ、着々と暗殺に向けての準備が進んでいますね。

＞貴女が夜風景のところに来ると、機嫌がいい夜風景がテーブルを持ってきてくれる。源真咲は嫌そうな顔をする。

「一緒に食べましょう、恋歌。あの人たちのことは放っておいて」

「マジかよ…いや、いいけど」

「よろしくな!頭鬼」

「よろしく、恋歌ちゃん」

優しいですねえ、皆。真咲くんはなんでそんな顔をするのかな?景ちゃんには劣るけど恋歌ちゃんも美少女ですよ?!

＞朝食を食べたあと、4人に別れを告げる。

さて、次はお仕事ですね。今回のCMはヘップシュです。サツカー選手が勝てないジャンケンをすることでお有名な奴ですね。その第2弾が恋歌ちゃんになりました。なんかいい仕事貰ってばっかですね。いいんですか？

＞貴女が外で待っていると上からへりが現れる。扉が開かれると中には天知心一が座っている。

「久しぶりですね、頭鬼恋歌。いえ、私の有能な商売道具パトナリの方がいいですか？」

＞呼び方なんてどちらでもいいと貴女は答え、へりに乗る。

「つれないですね。折角の機会ですし仲良くなろうと思ったんですが」

彼は嘘じゃなくて正直に話します。まあ、正直とは言え怪しさ満点ですが、プロデューサーとして、人の心を操る者としては有能です。普通の走者で手を借りる人は恐らく居ないでしょうし、自分も出来るだけ手を借りたくはありませんが、〃暗殺の天使〃ENDは主要人物殺害を暗殺しながら、暗殺ビルドと俳優ビルドの混合をする鬼畜ENDです。その主要人物には天知心一も入ってますし、彼がこの後手掛ける作品の役者達も入っています。何処かで接触しなければいけないなら、早めに接触して殺す機会を狙いましょう。

CMの現場に着いたら、挨拶回りも程々にして、カメラの位置など現場全体の把握に努めましょう。天知心一からもある程度の情報をへりで貰っていますが、やはり目で見るのが重要ですからね。

よし、評価はA+ですね。プラスは中々つかないですし、暗殺ビルドしながらもこの評価はオーバーフローや演技ステータスのお陰ですね。

次回はデスアイランドに戻って撮影ですね。ご視聴ありがとうございました。

彼女、頭鬼恋歌と出会ったのは、カレ―CMで見た彼女に目を付けたその日の夜だった。しかも彼女の方から私に会いに来たのだ。

「貴方が天知心一さんだよね」

「初めまして、頭鬼恋歌さん。まさか貴女の方からやってくるとは：意外でした」

彼女のような芸術家アーティストは私のような人間を嫌う。こちらが莫大な投資とコネで培ったものを芸術と呼ぶ曖昧な物で追い抜いていく。だからこそ、相容れないと思っていたのだが。

「人を殺す技術が欲しいの。あと、夜風景をこの世界で一番の女優にしたい」

面食らった。それはそうだ。初対面の男に人を殺す技術が欲しいと宣った挙句、自分では無く他者の1位を願うという歪な願いをされたのだから。驚いた顔を笑顔に戻すと私はこう告げる。

「いや、まさか貴女のような方がそのような技術を欲しているとは。ですが、私もビジネスマンですよ？」

彼女にどちらも叶えてやるから対価を寄越せと持ちかけると直ぐに回答が来た。彼女の回答を聞き、私の口角が少し上がる。聞き終わると拍手する。いい商売道具パートナーにはきちんと接するのがモットーだ。

「素晴らしいな。都合が良すぎて、まるで悪魔と喋っているかのようだ」

「それは貴方と同じ」

何も言わずに笑顔で名刺を渡す。これからの商売道具パートナーに名前を忘れられては困るから。

「私は天知心一と言います。貴女をこの業界で一番に輝かせましょう：ああ、いえ、夜風景をこの業界で、の方が貴女の意向に沿っているでしょうか」

それが彼女との契約、夜風景をこの業界において王賀美陸すら超える女優にする。その代わり、頭鬼恋歌という商売道具を自由に扱っていいという契約。

彼女が帰った後、これからのことに思いを馳せる。頭鬼恋歌という商売道具をどう扱っていいこうかと…

独白 序

はい、今回はデスアイランド編撮影18日目ですね。え？飛び過ぎ？…見所さんに文句を言っってください！では始めて行きたいと思いません。

さっさと仕事を終わらせましょうか。景ちゃんと千世子ちゃんのバチバチを見たいので。

＞貴女は最後のシーンに臨む。

簡単にこのシーンの説明をすると、恋歌ちゃんが千世子ちゃん扮するカレンの友人の1人を殺害しようとして、止めようとしたアキラくんに殺されてしまうシーンですね。

過剰正当防衛だと思うんですけど（名推理）（棚上げ）。

終わりましたね。デスアイランド編での演技評価はCMとか個別の仕事のみ見れます。デスアイランド自体の演技評価と演技ステータスの変動はデスアイランド編終了時に纏めて計上されるので、もしかしたら評価が悪い可能性もあります。というか大いにあります。景ちゃんと千世子ちゃんがバチバチ戦っていると、その気に当てられて他の俳優達の演技評価が変動しやすいので…

＞貴女が撮影を終えると、百城千世子と夜風景の初共演を見に行く。貴女は少しわくわくしている。

さて『洞察力』をフル活用する時が来ました。千世子ちゃんの仮面にヒビが入るシーンは“暗殺の天使”ENDに必要です。天使の名を冠する以上、百城千世子は邪魔ですからね。早く仮面剥いで仕舞いなさい、景ちゃん！

僕はスターズ所属の映画監督だ。売れる作品を作る。それは当たり前で難しい事だが、スターズであれば簡単に売れた。

「…つまらないな」

昔、主演女優にNGを出し続け泣かせたことで、業界を干された。その時に拘りは捨てた、情熱があつても撮る為の機材も人材も居ないのでは映画を作ることは出来ないから。星アリスにスカウトされて、スターズに所属してから有名俳優、有名原作。売れる為の大衆向けの映画ばかりを生み出してきた。最初はその売れ行きに満足していた。それはそうだ、誰かに認められるというのは心地良いから。けど、売れるのが当たり前になって、売れる為と同じことを続けて、自分が自分で無くなつていく気がしていた。

「こんなこと機械でも出来るじゃないか」

その通り。売れるだけなら機械が監督した方がいい。大衆の求める作品を正確に把握し、寸分の狂いのないスケジュールで作品を作ってくれるだろう。でも、それじゃあ駄目なんだ。人間が監督をしている理由は、心があるからだ。売れるじゃなくて、誰かの心を動かすよいうな、そんな映画を作るのは同じ人間しか居ない。

今まで撮ったシーンを見直す。目を引く役者は3人。百城千世子、夜風景、頭鬼恋歌。百城千世子は素晴らしい役者だと思う。あの技術に到達するまでどれだけの時間を使ったか。その技術は演出家すら唸るものだ。

「それはそうか。スターズの看板を彼女が背負っているんだから」

あの技術は自己研鑽だけのものじゃない。僕のような監督は勿論、作品に関わるもの全てを背負う為に磨かれた技術だ。その苦労もプレッシャーもただの役者が、女の子が背負うには重すぎる。だからこそ、それを背負う為に、彼女は強く美しい「天使」を演じるしかない。だけどそれにも飽きてしまった。だから壊すには、イレギュラーを入れるしか無かった。スターズ所属の監督として最悪で最低の行動だ。拾って貰った恩を仇で返す様なものだから。

「君の言った通り、千世子ちゃんは夜風ちゃんに興味津々だ。そしていい傾向を見せ始めてる」

後ろに居るだろう、夜風ちゃんとすれ違いに入ってきた少女に話しかける。オーデイションの時、夜風景を合格させたのは僕の意味と彼女の推薦もあつたからだ。

「景ちゃんならやれるって、言った通りだったでしょ？手塚監督」

「勿論、可能性はあると思っていた。君の言葉で確信に変わったけどね。でも、君だって変えられたんじゃないかい？」

彼女、頭鬼恋歌は首を横に振る。新人でありながら、他のスターズのメンバーを押し退ける暴君。スターズでありながら、夜風景のような感情的な演技を持つ異端。そして、百城千世子の技術を独学で培った新星。自分で言っておいてなんだが、まるで物語の主人公のようだ。圧倒的才能で周囲を魅了する。そんな彼女なら百城千世子の仮面だって壊せる、そう思ったのだが。

「…偽物じゃ、無理ですよ。千世子ちゃんの事を理解出来てもそれ以上の事は出来ない」

夜風ちゃんの演技を眩しそうに眺める。偽物が何かは分からないが彼女が出来ないと言うならそうなんだろう。

「それで、君のシーンは明日で最後だけど。この島からもう出るのかい？」

少しだけ意地悪に聞いてみる。答えは当然No。仕事が終わってもこの島でまだやることがあるらしい。

「そうかい。ところで君も夜風ちゃんも千世子ちゃんもだけど、ノックしないのが流行ってるのかい？」

彼女は首を傾げ、出ていく。最近の女の子の気持ちは理解出来そうもないな、と苦笑する。

独白 破

…さつきより天気が悪くなってきた。台風になるかもしれない。カーテンの隙間から少しだけ外を覗く。夜風さん達の枕投げを断つて来たのは、恋歌ちゃんの部屋だった。

急な訪問にも彼女は対応してくれて、珈琲を入れてくれた。

「ありがとう」

彼女はお喋りだ。夜風さんは勿論、あらゆる人と喋る。でも本当に彼女が捉えているのは夜風さんだけだ。盲目的なまでに夜風景を信賴している。それが気に食わない。

彼女の演技を何度も見た。何度も繰り返して見て、気づいた。彼女は私とも違う。夜風さんとも違う。歪で異常な進化を遂げつつある。私が出来なかった王賀美陸と同等の力を身につけようとしている。それが気に食わない。

彼女の笑顔が離れない。あの水族館で見た笑顔が脳裏から離れてくれない。最初は激しい怒りから始まった。次はよく分からない気持ち。その次は気持ち悪くなるくらいの嫉妬と……。とにかく気に食わない。

取り敢えず演技をするにはこの気持ちに整理をつけなければならぬ。夜風さんと恋歌ちゃんにかき混ぜられたこの気持ちを。でも、思考は徐々に乱れていく。

私は後悔していない筈だ。スターズの看板、“天使ももしろちよこ”として頑張ってきた。リスク管理を完璧に行って、作品を良くして、利益を出してきた。“仮面”を被る時だって、作品の為だった、スターズの為だった。

私は可哀想なんかじゃない。数ある女優の中でも私を選んでくれる人々が居る。この綺麗な“仮面かお”を求めてくれる人達が居る。“天使”は常に誰かに愛されているのだから。

私は日本に居る役者の中でも、トップで無ければいけない。スターズを支えなきゃいけない、作品がおかしな方向に捻じ曲がらないよう修正しなきゃいけない。それが私の役だから。

私は：私には女優しか無い。独りは慣れてる。女優になる事で独りになるならそれでいい。

本当に？それを嫌だっと思ってたことは本当に無いか？少しでも重たいと思っただことは無いか？過剰な期待に吐き気を抑えて撮影したことは無いか。

おもい、つらい、たすけて、ももしろちよこってだれ、つらい、たすけて、おもい、ももしろちよこ、てんし、ずきれんか、きらい、いかり、しつと、■、よなぎけい、ふみこまないで、せおわなきや、やくをえんじなきや、こころはいらない、わたしはじよゆうだから重くないおもくないオモクナイ。うん、重くない。辛くも無い。

大丈夫？と恋歌ちゃんに話しかけられて肩が跳ねる。思考の海に沈んでしまっていたようだ。今日の私の演技について少しだけ話す。彼女にも、夜風さんのように「仮面」が崩れていくように見えたらいい。本当に彼女たちは嫌いだ。そうやって私の努力の結晶に容赦無く素手で触れてくるから。

「恋歌ちゃんは、私の「仮面」を壊そうとしないんだ」
「…」

無言。口を開こうとして、閉じる。それを数度して。

「それは私の役じゃ無いから」

いつもの明るい彼女とは少し違う何処か達観した目で首を横に振る。

「駄目だ!!」

手塚さんの怒鳴り声が聞こえる。大方、台風での話でプロデューサーと喧嘩しているのだろう。冷めてしまった珈琲を飲みきると恋歌ちゃんの方を向く。気持ちはまだ完全に落ち着いた訳では無いが、私が必要な場面だ。私の心より優先されるのは仕事だ。

「最後まで、見届けてね。恋歌ちゃん」

それだけ言うとう手塚さん達がいるであろうロビーに足を運ぶ。この撮影をこんな中途半端で終わらせない。恋歌ちゃんの前で、スターズの「天使」として、そんな失態は出来ないのだ。

なんか千世子ちゃんが急に部屋にやってきて殆ど喋ること無く帰っていききました。なんだったんでしようか…

取り敢えず、景ちゃんのアツパーによって千世子ちゃんの仮面の真実を景ちゃんは掴むことが出来ましたね。このゲームに一瞬で真実を掴むシステムは実装されてません。なので千世子ちゃんが仮面を被っていて、その仮面の理由がなんなのかを理解しなければ景ちゃんには何にも理解出来ないってことですね。これはプレイヤー側も一緒です。自分が知っていたとしても、操作キャラが地道に情報を集めなければなりません。変な所リアルなんだよなあ…

気を取り直して、撮影24日目です。また台風ですね。この時期と南の島は悪条件ですが、スターズのスケジュールに合わせた結果です。このスケジュールをずらす事は可能です。スターズ所属の監督とかプロデューサー、俳優であればある程度ずらせませんが、景ちゃんの成長を阻害するので、実績解除以外では非常に使われにくいです。ってwikiに書いてありました。

> 貴女は激しい風と雨に打たれる百城千世子と夜風景を中継越しに見る。

> 夜風景が百城千世子を庇う。今までの彼女の演技とは比べ物にならない精度だ。

「…やっぱり、すげえな」

「芝居とは思えへん…」

> ただ、それは主演を霞ませる演技だ。

ここからですね。景ちゃんの本気の演技と、千世子ちゃんの本気の演技が始まります。これは絶対に恋歌ちゃんを育成するために必要になります。

> 行こうとする百城千世子の手を夜風景が掴む。そこから垣間見得るのは恐れだ。友人が死地に行こうとしている。それを止めるのは正しい行為だ。

「ケイコ、大丈夫」

＞百城千世子が夜風景を落ち着かせる。そして彼女の手を掴んで走り出す。

さて、クライマックスに差し掛かりましたね。今日はこの辺で切らせていただきます。ゞご視聴ありがとうございます。

独白 急

クライマックスから始まる実況です。今回は景ちゃんも千世子ちゃんも本気の演技になって、デスアイランド運営から逃げるシーンです。

＞周囲がざわめく。百城千世子と夜風景の演技はリアリティに溢れる演技で、逃げていく様にごくりと喉を鳴らす者も居る。

＞百城千世子の仮面が崩れ始めている。本当の芝居に近づき、リアリティが増すほど彼女の芝居は美しく輝きを放つ。

良いですね、長かった…『天使』の称号は俺のもんだ！く完くとは簡単に行きません。千世子ちゃんが天使で無くなったからといってまだまだ無名の新人が天使を名乗ることは出来ません。これからも育成しないと行けません。王賀美陸くらいになれば名乗れるんじゃないですかね。人生5周くらい掛かりそうですけど。

＞百城千世子の足が水に取られる、だが夜風景によつて突き飛ばされ夜風景は林の向こうへと消えていく。

「ケイコ!!」

＞百城千世子から台詞が出てこない。仮面が崩れて行く。綺麗な仮面が涙でぐちゃぐちゃの顔に変わる。悲しみを感じる。作られた涙ではなく、本当に悲しい時に出る涙だ。

ヨシ！（現場猫）。千世子ちゃんの成長と『『天使』から私へ』のトロフィーをゲットしました。それじゃあ景ちゃん助けに行きますかね。

＞貴女は百城千世子の仮面が無くなったのを確認すると夜風景の元へ駆け出していく。

場所は分かっているんで邪魔すんなよオ!?

「ちよ、恋歌ちゃん!？」

「おい、待ってって」

＞貴女が駆けつけると、百城千世子たちに囲まれた夜風景がネットに引つかかかっており、擦り傷以上の傷は見当たらない。

「千世子ちゃん、恋歌、私：顔ケガしてない？」

> 貴女と百城千世子は笑顔で頷く。

さて、最終日までは飛ばしますね。見所さんがっ!?

> 貴女は夜風景の部屋で目が覚める。ずっと付きつきりで看病していた。

「恋歌、もう撮影は終わり…?」

> 体調が良くなった夜風景が問う。貴女は頷き、外に出るように促す。

クランクアップですね。やっと評価が出ますよ。Aだと良いですね。前回のCMではA+でしたが、ここまで規模が大きいと評価も厳しいので。

評価S+

……? バグ? すみません、もう一度見ますね。

評価S+

アイエエエエ! S+!? S+ナンデ!? 演技ステータスを見てください!! おつかしいだろ、オーバーフロー持ちとはいえさあ! 『メソッド演技』A評価。まあ、これは良いでしょう。これは予測出来ました。『恋式演技術』…? こんなのwikiに乗ってませんよ? しかも評価無しってなんだ? 買ってそんなに日にち経って無いんですけどバグり始めましたかね?? 胃痛凄いですが……

「恋歌、これ美味しいわ」

「おい、夜風、お前取りすぎだろ」

「元気で何よりだな」

「せやね…タレ零れるで景ちゃん」

放心状態のままボタンを押していたら夜になっていましたね……取り敢えず『恋式演技術』は置いておきます。現実逃避とも言いますが、分からないものは分からないので。

> 貴女は夜風景から串に刺した肉を受け取る。こんな風で大勢で食べたのは久し振りでテンションが上がる。

> 夜風景達と食事をしていると、誰かが近づいてくる気配がする。『気配察知Lv2』の習熟度が少し上がった。

あ、これは千世子ちゃんですね。景ちゃんと反省会でしよう。恋歌

ちやんがそれにお呼ばれするようなミスはしてないので大丈夫です。
肉うめえ〜!

「夜風さん、恋歌ちゃん、ちょっと反省会デベートしに行こうよ」

＞笑顔の百城千世子が貴女と夜風景に話しかける。

「ご、ごめんなさい。何かしましたか（震え声）」

＞静かなさざ波が聞こえる。満天の星空の下、貴女と夜風景、百城千世子は歩く。百城千世子は夜風景と喋りあっている。

これ、恋歌ちゃん必要でしたかね？こんな所に居られるか！俺は帰らせて貰う！

＞この場に居ていいものか悩んだ貴女はそそくさ帰ろうとして百城千世子に袖を掴まれる。

「恋歌ちゃん、私はもう『天使』じゃ無くなっちゃった。でも、夜風さんのお陰で私は本当の意味で天使になれる」

そうですか…じゃあこの手を離してもろて…

「私、貴女に『天使』のまま勝とうと思っていたんだ。だけど、夜風さんと共演して今のままじゃ無理だって気づいた。だから夜風さんの芝居を盗んで貴女と同じステージに立つ」

＞夜風景に見えないように位置を調整され、急に百城千世子が零距离になる。

「これは決意表明。貴女に対する気持ちと新しい私への」

＞百城千世子は貴女から離れると自分の舌でペロツと可愛らしく唇を舐めて笑う。

「貴女も、私以外に負けちゃ駄目だよ」

＞百城千世子は軽い足取りで夜風景と花火をしに行ってしまう。
貴女はそれを呆然と見つめる。

……………どうなってるのお？これえ

線香花火を見ながら、デスアイランドを撮る事が決まってから今日までのことを思い出す。

千世子ちゃんのことを理解せず、顔が見えないことを恐れたこと、仮面を被っていることを哀れんだこと、でもその仮面が本当は優しさと強さで出来ていたこと。

恋歌の演技がカレールームの時とは比べ物にならないほど良くなっていたこと。感情の込め方も、それを相手に伝える技術も、俯瞰する技術も。今の私では勝てないと思ってしまうくらいに。

サインを下さいと言われ、嬉しかったこと。オーディション会場で武光さんに、真咲さんに、茜ちゃんに出会えたこと。茜ちゃんに迷惑をかけたこと。真咲さんにフォローして貰ったこと。武光くんにお前と共演したいと言って貰えたこと。

最後までお芝居が出来て、花束を貰ったこと。美味しい食事を食べられたこと。

千世子ちゃんと反省会で喋れたこと。

それら全てが大切な思い出で、私の醜い感情を抑えてくれる。

：千世子ちゃんが恋歌とキスをしていた。私に見えないようにしようとしていたけど。本当に偶然に見えてしまった。

こんなに黒くてドロドロした感情はお母さんが死んだ時以来だ。恋歌とあの人が喋っていた時以上の昏い感情に驚く。私には母が死んだ時と同じ感情が眠っていたのだ。

線香花火がポトッと落ちる。それを足で踏みにじる。野犬の時とは違う。何度も振り落とすものではなく、相手に永遠に痛みを与えられるようにぐりぐりと手加減する。

そして先程の流れ星に願ったことには続きがある。一生、お芝居を続けるだけじゃなくて恋歌の隣に居る。それが私の願い。お芝居を続けていけば、もっと上手くなれば、千世子ちゃんを超えれば貴女は私だけを見てくれる？

ねえ、恋歌、どうすれば、貴女に■して貰えるのかしら。

【幕間】世の中には月夜ばかりは無い／天使のこころ

噂に拠れば愛には対価が必要らしい。なら私は恋歌に対してなにをすれば、彼女は愛を授けてくれるのだろうか。

「景ちやあん、これわかんない」

私に抱きついてきて、助けを請う。私達はまだ学生だから仕事ばかりではいけない。勉強をきちんとしないと芸能活動を停止させられる。

「恋歌、自分で解かないと駄目よ。昨日も私に聞いてばっかりだったわ」

「いーじゃん、わかんないのは聞いた方が早いの！だから景ちゃん教えてください」

可愛らしく目を潤ませて懇願してくる。あまりの可愛さに頷きたくなるが、彼女の為を思って首を横に振ろうとして止める。愛の対価として、お世話をするというのはどうだろうか。

「景ちゃん…?」

名前を呼ばれて停止していたのに気づく。なんでもないわ、と返すとまたじゃれついてくる。その様子が犬みたいで可愛くて頭を撫でる。本当に■してる。片時も離れたくない。千世子ちゃんに渡すなんて以ての外だ。あの日のことを思い出して、ぎゅっと恋歌を抱き締める。そして首筋を少しだけ食む。ぴくっと反応する様子に思わず笑みがこぼれる。

「蚊がいたみたい、恋歌」

「え？本当？やだなあ、腫れないといいけど」

「大丈夫、制服なら襟で隠せるわ」

困ったような顔も■おしい。そっかあと何も疑わない貴女の素直さも■してる。デスアイランドの撮影が終わってから、日に日に彼女への■が増しているのを感じる。少しの動作にも目が惹き付けられしてしまう。■らしいと感じてしまう。

「もう夜も深いし、お風呂に入って寝ない?」

彼女がそんな提案をしてくる。最近是一緒にお風呂に入るように

している。ルイとレイとも入るが、2人が成長したら2人きりで入るのだ。千世子ちゃんには一緒に暮らすこともお風呂に入ることも出来ないだろう。自分に優る点があると直ぐに愉悦の笑みを浮かべてしまう。恋歌に対する感情が抑えられない。独占したい、ずっと誰も居ない場所で■し合いたい。特に千世子ちゃんが居ない場所が望ましい。

この■情が歪んでいるなんて分かりきってる。でも、抑えられなくなっていく。千世子ちゃんに取られたくない。

お風呂に入っている時も、寝ている時も、ご飯を食べている時も、お芝居の時以外ずっと恋歌のことを考えている。

「これって幸せなことよね」

大好きなお芝居と恋歌のことだけを考えていればいいのだから私は幸せなのだろう。だからこの幸せを奪おうとするなら誰であろうと容赦はしない。お風呂に入って、眠そうな恋歌の髪を乾かしながらそんなことを思う。

■してるの、恋歌。最初は気持ち悪いって思ってしまうかもしれないわ。けど必ず私だけを見て貰えるように努力する。貴女が幸せで居られるように、私が幸せで居られるように。永遠に、一緒に居ましょう？

完全に寝てしまった彼女を起こさないようにうなじに顔を埋めて、優しくキスする。これが私のものだという証拠。この行為が私の中にある激情を抑える唯一の方法。

夜は更けていく。月の光は雲で覆われ、一切の光を通さない。

スターズの事務所に来ると、今日、仕事が無い筈の恋歌ちゃんがソファで眠っていた。制服なのを見る限り、学校から直接来て疲れて眠ってしまったのだろう。少し思いついたことがあったので、誰も居ないのを確認した後やってみる。

足音を立てずに静かに近づき、髪を触る。さらさらした黒髪は触つ

ていて飽きない。頬を突つついても起きない。

「…恋歌ちゃん、起きないとしちゃうよ」

ソファが2人分の重量で少し軋む。今の私を客観的に見ると寝ているいたいな少女を襲おうとしている暴漢だろうか。まあ、鍵を閉めているし、他の人のスケジュールは完璧に把握しているから今日事務所に誰かが唐突に来ることは無い。顔を彼女に近づけ、デスアイランドの打ち上げでしたようにキスをしようとする。恋歌ちゃん目が開く。

「ち、千世子ちゃん!? って痛ア!?!」

勢い良く起きるので、彼女の頭と私の頭がぶつかる。

「…なんだ、起きたんだ。おはよう、恋歌ちゃん」

「な、なんだじゃないよう。千世子ちゃん」

ビクビクと小動物のように痛みを堪える姿が可愛らしい。少し涙目なところもポイントが高い。すると、彼女の首筋の痕に気がつく。襟で隠されているが、それは。

「蚊に刺されたの?」

「ん? うん、なんか昨日刺されたみたい」

恥ずかしそうに首に手をやって隠す。その姿を愛らしく思うと同時に夜風さんへの憎悪も増す。一緒に暮らしていることをアドバンテージに早速手を出したのか。あの時、恋歌ちゃんとキスをした時、わざと彼女の目に留まるようにしたのは間違いだったか。

「ふうん…恋歌ちゃんも役者なんだから気をつけた方がいいよ。邪魔な虫には」

恋歌ちゃんにこの感情が伝わらないように微笑む。

デスアイランドでのあれは決意表明だ。私が“天使”を止めて新しい私へと羽化することと、恋歌ちゃんを夜風さんから奪うことへの決意表明。私の演技は今も進化している。夜風さんの演技も、恋歌ちゃんの演技も学習して物凄い勢いで。今まで停滞していた分を取り戻しつつある。

「今日、仕事無いよね? どうしたの?」

「んー、堀先輩とお喋りしに来ただけ」

…アキラ君は何をしているのだろうか。いくらそういう感情も関係でも無いからって懐かれているのは、癪に障るなあ。喋るだけなら私でもいいじゃないか、なんでアキラ君なのだろう。

「私じゃ…ダメ？」

目を潤ませながら、恋歌ちゃんに抱きつく。少し甘えたいとかそんなことはひとつも考えていない。涙も演技だ。

「え？駄目だよ〜」

彼女はふにやつとした笑顔でそんなことを言う。

私のブラックリストにアキラ君が載った瞬間だった。

【幕間】 要らない花は摘まれる／星を見上げた日

「源君さま、最近どうしちゃったのさ。君らしくない演技してさ。ちよつと迷惑だつて言うのがね？来ちやつてんだよね」

「すみません…けど」

「けどじゃなくてさあ。困るんだよねえ、僕らみたいな普通の事務所
の俳優が、大手の俳優を食うような演技をすると睨まれちゃうワケ」
「…」

「これ、今月分の給料だからさ。分かるよね？自主的なら君の経歴に
も傷が付かないし、なんなら別の所に…」

「いえ、大丈夫です。お世話に、なりました」

その日、俺は事務所を辞めさせられた。原因は俺がスターズの奴ら
から学んだ演技と夜風や恋歌を研究して引き出した感情的な演技だ。
作品がめっちゃくちやにならないようには気をつけている。演技は上
手くなったと思う。小手先を止めてから、のびのびと演技出来るよう
になった。だからこそ共演者の邪魔になりかねない。特にスターズ
の様な大手事務所には自分らの俳優より高いレベルになりかけてい
るのは邪魔だろう。

「…今月分の給料これっぽっちかよ」

渡された封筒もすぐに尽きるくらい金額。バイトもあまり行か
なくなつてしまつたから、金が無い。あんなに頑張つて演じたのに駄
目だった。俺に最初から才能があればこんなことにはならなかつた
のかもしれない。

行くあてのないまま、東京の街を彷徨う。煩わしい人通りが多い道
を避けて、小道を通ろうとすると通行人にぶつかつてしまった。

「あ、すみませ」

謝ろうとしたら、胸ぐらを掴まれた。咄嗟のことで頭が真っ白にな
る。いや咄嗟じゃなくても知らない人に胸ぐらを掴まれたら頭が
真っ白になるだろう。やばい人にぶつかつたとパニックになつてい
るぞ。

「おい、お前、名前は？」

慰謝料請求か？はたまた東京湾にコンクリ詰めか。どちらにせよ死に近い。

「み、源真咲…です」

胸ぐらを掴まれているので苦しげな声になる。自分の胸ぐらを掴んでいる通行人の顔をよく見ていると、あの著名な演出家、巖裕次郎に似ている気がする。

「そうか、お前。うちに来い。俺の名前は巖裕次郎だ。知ってるか？ま、知らなくても構わねえ。行くぞ真咲」

おっさんでそんなに強そうにも見えないし、杖をついているのに抵抗出来ない力で引つ張られる。どうやら拒否権は無いらしい。

これが俺の『劇団天球』への所属の切っ掛けで、舞台俳優 源真咲の原点だ。

「おいおい、真咲い。お前、女慣れしてなさそうだな」

亀太郎がへらへらした顔で俺の肩に手を置いて話しかけてくる。俺は面倒臭いという表情を顔にさせて話す。

「いや、アンタほどじゃねえよ。初対面でエクスタシーなんて演技した時点でお察しだよ」

「はアアア!?バキバキ卒業してますがア!?」

「その発言が童貞だつて言ってるんだろ!?」

「きやあ、真咲ちゃん童貞だなんて破廉恥ね！」

「ああ!？」

俺が童貞と言った瞬間に内股になって口に手を当てていかにも恥ずかしいと言ったように頬を赤らめる。無駄な演技力を発揮しやがって。軽く舌打ちすると、近くで稽古していた七生さんが冷たい目で俺らを見てくる。

「あつ、な、七生さん違うんすよ!?きっきのはこいつが言い始めて」

「真咲くん、人のせいするのは良くないと思いまーす」

「きつも…」

その一言だけ呟くと稽古に戻っていく。女性から気持ち悪いと言われるほど心にくるものは無い。苛立ちをぶつけるために、亀太郎の尻を蹴ると、あふんつと言つて倒れる。取り敢えず、七生さんに弁解

しに行く。

そう、デスアイランドの撮影からたった1ヶ月で俺の人生はまた更に激変した。街で突然ぶつかったのは、舞台演劇に於いて知らぬ者は居ない巖裕次郎。もし、俺が映画俳優のままだったら知らなかったであろう人物。彼の劇団には無名ながら俺なんかより優れた俳優が沢山居た。そしてその筆頭は明神阿良也。夜凧と似たような感情の出し方と千世子のような技術を併せ持った男版頭鬼恋歌。この場所で俺は本当の才能に気付かされることになる。

「だからっ！格好つけてないって言ってるだろう!!」

「格好付けてるんですよ！あーやだやだ、無自覚な格好つけほどウザイものは有りませんよ」

「なっ…!?!」

「自分がイケメンだからって調子に乗らないでください、堀先輩。貴方が主役になるにはまずダサさを身に付けてください。そこからなんですよ!」

「僕がイケメンだとか関係無いだろ!?!後、星だ！いい加減覚えてくれ!」

誰も居ないスタジオを借りて、久し振りくらいに大きな声を出す。恋歌君との演技の指導だが、彼女は厳しい。少しでも気を緩めれば罵声を飛ばしてくるし、僕の演技の拙さを的確に突いてくる。凶星だから頭に血が上って、喧嘩みたいになる。

「と言うかダサさってなんだ!?!曖昧な言葉じゃなくて説明してくれないか!?!」

「それを掴むのが堀先輩の仕事でしょうが!」

「ぐっ…」

その通りだ。役作りは他人からヒントを貰っても、本当に役に成りきるのは自分なのだから。自分が理解しないことにはダメなのだ。

「…2時間経ちましたし止めましょうか」

「…そうだね」

スターズの仕事やトレーニングの傍らにやっているこの指導は、僕らの睡眠時間を削って行われている。役者として無理なことは御法度だが、ここまでしないと僕の殻は破れない。

「送るよ」

もうだいぶ外も暗い、女の子ひとりでは危険だろう。そう思っていたら、スタジオの扉が開いた。もう殆どのスタッフは帰ったはずだが、と思つて見ると、そこには笑顔の千世子君が立っていた。

「アキラ君、恋歌ちゃん、なにしてたの？」

いや長い付き合いの僕には分かるが、あれは作り笑いだ。よく分からないが怒っている。慎重に言葉を選ばなければ殺される気がする。先程の指導でかいた汗とは別に千世子君からのプレッシャーで更に汗をかく。恋歌君も気付いているようで冷や汗をかいている。何か言わなきゃと思つたのか彼女は口を開く。

「堀先輩に手取り足取り教えて貰つてたの。えっと…この業界での生き方みたいなの？」

「それ、ここでやる必要あるのかな？しかも息絶え絶えだしなにか激しいことでもしてたんじゃないのかな」

「あ、いやあ…その」

恋歌君は演技が上手いのに、絶望的に嘘が下手だ。あと、言葉の選択を致命的に間違える。千世子君に論破されると慌ててこちらを見る。止めてくれ、いま僕に振らないでくれ。僕も誤魔化すのは下手だし、殺されたくない。

この演技指導は内緒の指導なのだ。僕が後輩に演技指導をされているのも、夜に同僚とは言え女性と密室で2人つきりなのもあまり褒められたことじゃない。いくら察しのいい千世子君とは言え、密室で恋歌君と僕が2人つきりになって息も乱れているのはどういう状況だと思ふだろう。

いや冷静になって考えれば、ちゃんと説明すれば聞いてくれる筈だ。嘘をつくのはよくないだろう。誤魔化す方に動きかけていた思考を元に戻す。

「…その、実は恋歌君に（演技の）指導してもらっていたんだ。何分、大声を出すほど熱中した（演技議論は）初めての経験でね。だが終わってみると（気分が）気持ちいいね。疲れはするが…いい経験だった。声が響いていたなら申し訳ない」

無理矢理言葉を繰り出す。千世子君がすつと目を細める。沈黙が重い。誰か助けてくれ…

「そっか、声は聞こえなかったから大丈夫じゃないかな。あ、車で送ってくれないかな？私も恋歌ちゃんも女の子だし、危ないでしょ？」

にこつと微笑む。どうやら助かったらしい。何が彼女の逆鱗に触れ、本当に助かったかは全く分からないが。

帰りの車で恋歌君と千世子君ばかり喋っていて、僕に一切話は振られず、なんとも言えない気持ちになっていた。

【幕間】塗り潰した色は戻せない／星を統べる者

巖裕次郎に夜風の話をして少し経ったある日、夜の公園をぶらつく。柗と夜風はもう帰宅して寝ているだろう。そのくらいの深夜だ。夏間近だからか、若干蒸し暑くてイライラする。

「あつ…ヒゲ男さん」

「誰が、ヒゲ男さんだ。テメエ。俺の名前は黒山墨字だ。覚えろ。つか、お前こんな真夜中に何してやがる」

「お散歩」

「散歩だあ…？女ひとりで？お前、夜風ん家に泊まってんじやねえのか。あいつがお前をひとりでこんな所歩かせるとは思えねえんだが」
「うん、お散歩。今日は久しぶりに自分の家に戻るの。だから景ちゃんはこのお散歩のこと知らないよ」

公園で見つけたのは黒髪の背のちっちゃなガキ。夜風家の同居人。そしてスターズの新星。頭鬼恋歌。夜風のメソッド演技も、千世子の技術も持った俳優だ。才能はあるが、俺は絶対に使いたくないタイプの人間。

「ふうん…じやあ、ちよつと付き合えよ」

「私、ヒゲの男は生理的に無理です。ごめんなさい」

「そうじゃねえよ!!話についてことだつての」

こういう所が苦手だ。夜風といい変な天然を持ちやがって…

公園のベンチに腰掛ける前に、自販機で珈琲をふたつ買う。

「おら、奢りだ」

「…優しい所、あるんだね。墨字さん。そんな怖い顔してるのに」

「うるせえ、怖い顔は余計だ」

少し離れて同じベンチに座る。相変わらずパツとしない雰囲気。奴だ。顔は悪い訳じゃない、好きな奴は好きだろう可愛らしい顔立ちと低い身長。だが、目立たない。日常生活で言えば、さっきの子、可愛かったな。でも他にも居そうじゃねで済んでしまう感じ。なんだこの例え。まあ、そんなことは置いといて。その評価は演劇となると一変する。そのひとつひとつの動作から目を離せない、まるで頭鬼恋

歌に憑依しているかのように感じる。頭鬼恋歌が思ったことは観客も感じる。プラスもマイナスも全て。観客を虜にする演技。その点ではこいつを高く評価している。だが…

「それで、お話って何？墨字さん」

「…お前、いつまでソレで演じるつもりなんだ？」

「…：…なんのこと？私、分からないな」

頭鬼は首を傾げる。十中八九、分かっているだろう。こいつの演技は、観客を惹き込むというより観客に取り憑くような演技だ。魅せるんじゃないくて魅させる。メソッド演技の他人版とでも言えばいいのか。勿論、普通の演技でも、観客が役に感情移入することはある。だが、こいつの演技は役そのものを観客に叩き込む。実際にこいつの演技を見て、人生が狂ってしまう奴だって居るだろう。役が体験してきた事を急に自分の事のように思わされるのだから。

こいつの演技の本質を最初見た時は気づかなかった。いや、ここまですでに進化したのか。デスアイランドの収録で夜凧も千世子も取り込んで学習したのだろう。

この演技をするには役を観客にも入りやすくさせなきゃいけない。それは演じる奴が役と別の思考を持ってはいけない。夜凧はそれを感情を思い出すという方法で行っていたが、こいつは違う。こいつは自分の感情を空っぽにして、その役そのものになってるんだ。夜凧を演じて、メソッド演技を模倣することも出来る。千世子を演じて、あいつの技術を模倣することも出来る。自分が無い演技。

「ソレは危険だ。お前も、観客も」

「…：…」

いつもは軽口を叩く頭鬼が黙り込む。そして数秒後、口を開く。重厚な雲に覆われた夜空のような目で、無邪気に笑って。

「だから？」

「…：…」

その回答がなされるとは思っていなかった。こいつだって人間だ。自分の事を危険に貶めるようなことをしないとと思った、俳優として大切な観客の事を蔑ろにするわけがないと思った。

「墨字さん、人って何年生きられるんだろうね。今は人生百年って言うけどさ。俳優は、女優は、老いたらそこで終わりなんだよ。私は女優のまま死にたい。景ちゃんの隣で舞台に立って死にたいの。景ちゃんが早くてもダメ、私が早くてもダメなの。遅いのは論外。私達が今輝ける時に見せなきゃ、終わりなんだ。それにお客さんだって美しい役者を望んでる。美しくない女に価値は無いんだよ」

「私に才能は無いんだ。だって、景ちゃんは私の演技を軽く超えちゃった。私は綺麗じゃないんだ。だって、千世子ちゃんの方が綺麗なのは明白だから。墨字さんもそう思うでしょ？大丈夫だよ、私が一番わかってるから」

「だからごめんね、墨字さん。私は今、やらなくちゃならないんだよ。これ以上誰にも負けたくないから。お客さんには申し訳ないけどさ。私は演じなきゃいけないんだ。皆が望む頭鬼恋歌を。誰かが望んだ頭鬼恋歌を」

想像以上の深淵を見せられた。軽い気持ちで覗き込めば一生帰る事の出来ない深淵を。夏の蒸し暑さだけじゃない汗を感じる。これが恐怖、つて奴か。ゾクツとしたのは初めてではない。夜風景を初めて見た時もあったがそれは恐怖では無かった。恐怖で纏まらない頭で言葉を紡ぐ。

「その演技だと俺が夜風とお前を共演させないって手もあるんだぞ」
「無いよ。墨字さんは私と景ちゃんを絶対に使う。だって、墨字さんも人でなしだもん。自分の撮りたいモノの為ならなんだってするでしょ？」

悔しいが凶星だ。これ以上は野暮だなど思った俺は、一つ、息を吐いて、頭鬼恋歌を見据える。これだけは言わなければならぬから。
「頭鬼、後悔すんなよ。お前がそう決めたなら、俺の忠告を聞いた上でその結論を出すなら、俺は止めない」

「…ありがと、墨字さん。珈琲、ご馳走様でした！あ、送らなくて大丈夫だからね。家、近いし」

「そうかよ、送る気なんざ元々無かったわ」

「あはは、そう？じゃあね」

俺が送らないと言うと少し笑いながら立ち上がった。ばいばいと元
気よく手を振って帰っていく。それを黙って見送る。そして一言呟
いてしまう。

「あいつ、ジキルとハイドみてえだな。マジで人格切り替えヤバすぎ
だろ…」

そんな呟きは深夜の暗闇に吸い込まれていった。

デスアイランド撮影以降、夜風景と頭鬼恋歌の演技が変わった。い
や、進化したの方が正しい。アキラと千世子の演技が変質したのもそ
うだが、胃が痛くてしようがない。

「社長、こちら資料です」

「ありがとうございます」

「清水です。では失礼します」

渡されたのは天知心一と頭鬼恋歌が繋がっていることを示す資料
だ。何処で彼と知り合ったのかは知らないが、彼女に来る仕事の何個
かは彼が手配したものだろう。

「…頭鬼恋歌、貴女は何を考えているの？」

自らの過去を追体験するメソッド演技。夜風景はそれを異常な程
の力で魅せる。彼女のことにも心配ではある。アレは戻る場所が無け
れば心を失いかねない。だが頭鬼恋歌はそれを上回る。観客にメ
ソッド演技をさせる、なんていう訳の分からない演技をするのだ。メ
ソッド演技の恐ろしさを知っている人間ですら戻って来れないこと
があるのに、そんなことを知らない普通の人間に強制的に過去を追体
験させる演技。現に、彼女の演技を見て変わっていった人間が何人も
居る。

ノックが聞こえる。天知心一と頭鬼恋歌だろう。あの話をするつ
もりなのだ。数秒、目を閉じて入室許可を出す。

「こんばんは、夜分遅くすみません社長。良い話を持ってきました。
巖裕次郎の最後の作品、『銀河鉄道の夜』に合わせ、これを公演しま

す。勿論、これに向けて何ヶ月もキャストは稽古をしていますので、後は許可さえ頂ければ…というモノです。スターズのごり押しと呼ばれ続けてきた星アキラと、スターズの新星である頭鬼恋歌による「星の王子さま」。実にスターズに似合うお話だ」

全くバカげている。これは良い話などでは無い。だが承認せざるを得ない。何故なら。

「これが他の役員幹部からの推薦状です。皆さん快く書いてくださいました。社長、これだけの意見があるのです。無視すれば幾ら社長でも限界があると思いますが」

何枚もの紙が私の前に出される。役員幹部の半数以上が合意の旨を出している。

「幾ら払ったのかしら」

「とんでもない、心付け程度ですよ。これから儲けますので私の懐は全く痛まない」

頭鬼恋歌は天知心一の横で黙っている。彼女がこれを希望したのだろう。彼女が望んだ以上、無理に止めない。だが、キャストに疑問を持つ。

「アキラには才能が無いのは貴女も分かるでしょう。必ず貴女の足を引っ張るわ」

「…確かに。でも彼とならきつと成功します。だって彼は貴女の息子だから」

最初、それは私が手を回すという事だと思った。だが目を見て違うと感じた。彼女は本当にアキラを信用しているのだ。

「…そう、なら頑張りなさい」

私にはこの言葉しか言うことが出来ない。彼女の真意は分からない。だが、退出する時に彼女は振り向いてこう言った。

「貴女は私の憧れでした。だから、この作品は絶対に成功させます。スターズの看板は穢しません…それでは失礼します」

深く息を吐き、外を見る。見慣れた風景だ。夜空は雲に覆われ一切の星が見えない。それがこの会社の未来を暗示する様で嫌になりカーテンを閉めた。

銀河鉄道の夜&星の王子さま編 綺麗な天使と月には棘がある

実況に時間が空いてしまいましたね。すみません、何でもしますから！（なんでもするとは言っていない）。では銀河鉄道の夜編やって行きたいと思います。

評価S+と千世子ちゃんキス事件は忘れしました。なんだったんだあれ：

今日は仕事も休みですし、景ちゃんと一緒に大黒天に遊びに行きましようか。臭いフェチストーカー男こと明神阿良也と出会うには景ちゃんを介してか、巖裕次郎に見出されるか、舞台俳優になった方がいいです。映画俳優に全然興味無いので、彼。ちなみに原作通り、臭いがしない役者にはほぼ関わりないので、演技ステータスが貧弱貧弱ウ!!だと無視されます。握手を求めてスルー、劇団天球に足を踏み入れたら即追い出され、挙句の果てに誰？呼ばわりされます。因みにスターズのイケメン俳優の時はされました。泣いて泣いて泣きました。人ってあんなに泣けるんですね…1ヶ月毎日会いに行つたのに誰？とかキツツ…学生時代思い出すわ……

そんな鬱状態は忘れて、大黒天に行きましようね。

> 貴女は夜風景に “大黒天” に行きたいと話す。彼女は嬉しそうに頷いた。

では、大黒天まで飛ばしてっと。着きましたね、大黒天。柊さん、可愛いですよ。和歌月ちゃんの次に推しです。アホ毛は正義なんですよねえ…読み切りの時も好き好きの好きでした。和歌月ちゃんと柊さんの攻略とかこれ終わったらしたいですね。まあ、修羅場とか僕苦手なんで、1人ずつですかね。やるとしたら。ギャルゲーの2人同時攻略とハーレムとかフラグ管理大変なの良くやりますよね。僕は二股とか良くないと思います。

「あれ、こんにちは。珍しいね？恋歌ちゃんも来るなんて」

「うわ、頭鬼が来てんのかよ…」

＞柗雪が笑顔で迎えてくれるが、ヒゲの男は面倒くさそうな顔で椅子に座っている。ヒゲを剃ってほしいと伝える。

「余計なお世話過ぎるだろ!？」

＞貴女は黒山墨字を無視して、柗雪に勧められた椅子に座る。彼女からオレンジジュースを貰う。貴女はありがとう、と感謝する。

「ううん、景ちゃんの友達だしね。寧ろオレンジジュースしかなくてごめんね」

「なんで、俺無視されてんだ？なあ」

「クロちゃん寂しいの？」

「違えよ」

「寂しいのね。ルイと私が構ってあげようか」

「違うっての」

可哀想ですね、黒山墨字。でも勘のいい奴は嫌いなので、そのままでいてください。

「そう言えば、あの作品で成長出来たんだろうな」

「バカにしないで頂戴、黒山さん。私こう見えて、カメラに隠れて嘔吐したんだから」

「…柗」

「え、私に振るんですか？分かりませんよ」

「…頭鬼」

＞貴女は俯瞰出来るようになったという事では？と黒山墨字に話す。

「流石、夜風と長い間過ごしてきただけ有るな。いや、分からねえよ。なんだ嘔吐したんだからって」

投稿者もわかりません。どうして嘔吐したことをそんなに誇って言うのか。そして恋歌ちゃんが理解出来るのも凄いですね。別に羨ましくはないんですけど。

さて、ここから観劇の話が出ます。本来はチケット2枚なんです。が、黒山墨字が気を利かせて3枚取ってくれていることが有ります。貰えなかった場合はアキラくんを刺し殺してでもチケットを奪いましょう。嘘です、包丁で脅し盗るだけに抑えましょう。後で殺すチャンス

はありますから。

＞貴女がオレンジジュースを飲んでいると、黒山墨字と夜風景が会話している内容が耳に入ってくる。

「演劇？」

「ああ、チケットを貰ってな。2枚ある。行ってこいよ」

馬鹿野郎!? あーあ、黒山墨字の所為で一人の尊い命が失われましたね。さよなら、アキラくん。恨むなら黒山墨字を恨んでくれよ。あと黒山墨字、お前は私が直々に殺す。まあ、元々両方殺す予定でしたが。尊い命? なにそれ、食えんの? (人間のクズ)

「私、それより次のオーディションを受けたいのだけど」

「観劇も勉強だ。千代子でも誘って行ってこい」

「千世子ちゃんと…」

台詞が原作と違いますね? どうしたんでしょう。黙ってこちらを見てきますね。オレンジジュース飲みたいんでしょうか。まあ、暑いですしね。あげましょうか。

＞視線に気づいた貴女は、オレンジジュース飲む? とオレンジジュースを夜風景に差し出す。

「あ、の、飲むわ。でもそうじゃなくて…」

「何、言い渋ってんだお前。一緒に行きたいなら行きたいって言えばいいだろ」

「なんで先に言うの!? 断られた時の私の気持ちを考えて変態!!」

「ああ!? 誰が変態だ!? 帰ってきたら意味分かんねえ繊細さを発揮しやがってよ!」

なんで喧嘩してるんですかこの人達(呆れ)。まあ、誘って貰えましたがし目的を達成出来るので、領いておきましょう。その日はぼっちりスケジュールを空けました。アキラくんも命が助かりましたね。

＞貴女が行きたいと言えば、黒山墨字と喧嘩していた夜風景がぼつとこちらを向く。

うお!? 急に見られるのは驚きますね。心臓止まるかと思いました。

「本当!? 約束よ、恋歌」

＞貴女は領いて、夜風景と約束する。

さて、次回は阿良也邂逅ですね。ご視聴ありがとうございました。

恋歌と観劇する約束をした夜、早速千世子ちゃんにLINEした。有り体に言えば、恋歌と一緒に演劇を見に行くという自慢だ。

自分でも嫌な女だと思う。だけど、それ以上に嬉しくてしようがない。千世子ちゃんは恋歌とデートしたことが無いだろう。観劇した後は女子高生らしくスタバに行つて飲み物を飲むのだ。勿論その模様は写真付きで千世子ちゃんに送つてあげる。

返信が来たので、見てみるとそこには水族館らしき場所で笑顔の恋歌と千世子ちゃんの写ツィンショット真が貼つてあつた。

「…恋歌」

「んー？なに、景ちゃん」

私の近くで学校から出された宿題と格闘する彼女に、先程の写真を見せる。

「これ、いつ行つたのかしら」

「デスアイランドの顔出しの後くらい？仕事でちよつと遅れちゃつたからゆつくり見れなかつたんだよね。もう一回行きたいなあ。クラゲとか可愛かつたよ」

「そう」

ドロドロした暗い感情が湧き出る。それを黙っていた恋歌に怒りもある。私を誘つてくれれば良かったのにどうして私じゃなくて千世子ちゃんだつたのか。千世子ちゃんだつて今まで私に黙っていた。千世子ちゃんは絶対に許さない。

「今度、行こつか景ちゃん。千世子ちゃんも誘う？」

「千世子ちゃんは忙しいだろうから私達だけで行きましょう、恋歌」

「そつか…千世子ちゃんは人気者だもんなあ、しょうがないか」

だが、恋歌が私にも行こうと言つてくれて途端に気分が良くなる。千世子ちゃんも誘うと言つた時は思わず早口で言葉を並べてしまつた。水族館に行くなら千世子ちゃんより楽しいデートにして見せる。

一緒に住んでいるから出発から帰りまでずっと居られる。千世子ちゃんは別れなければならぬけど、私はずっと居られるのだ。

スマホに返信するのも忘れて、恋歌に勉強を教えてあげる。勉強を教えてくれてありがとうと笑顔で感謝の言葉を言われる。…■して。この程度で貴女が満足してくれるならいくらでも教えてあげるわ。だから、その代わり貴女の■を頂戴、恋歌。一生分の■を。

夜風さんから恋歌ちゃんとデートをするというLINEが来る。だが、私は動じたりしない。直ぐに水族館での写真を送信する。残念ながら、恋歌ちゃんの初めては私が貰っているのだ。

初めてと言えは…アキラくんと恋歌ちゃんの関係だ。あの場では怒り狂って冷静さを欠いていたが、普通に考えて鍵を閉めて行こうし、あの場所でやらないかと帰ってから、虫の世話をする時に思い当たった。本当にしていたらアキラくんを殺さなければならなかったから良かったと思う。

あれは友人としての仲の良さだろう。正確に何をしていたかは分からないけれど、アキラくんの言っていた事を補完すると演技の練習だと思う。そう思いたい。

「…夜風さんは気づいているのかな」

恋歌ちゃんには危うさがある。可愛いのは勿論、騙されやすいから男に付いて行ってしまふ…等では無く、その精神性だ。あの子は私以上に映画に執着している気がする。いや演じるという行為そのものにすら執着している。だから、彼女が何か危険なことをする前に止める係が必要だ。彼女の心を埋める何かが必要だ。それは夜風景じゃなくて私でありたい。だから夜風さんには気づかないで欲しい。私だけが彼女を理解出来ていれればいいのだ。

唇に人差し指を当てて、デスアイランドでのキスを思い出す。一方的な好意だ。分かっている。けれど確実に私に振り向かせる。今まで大衆の目を惹き付けてきた私がたった一人の為に全力を出すなん

て笑えてくる。だけど、それは大衆を振り向かせるより困難な舞台だ。本気を出して立ち向かわなければいけない。

「今はちよつとアドバンテージを取られてるかもしれないけど直ぐに追い付くよ夜風さん」

一緒に住んでるなら、同僚としてひとつでも多く一緒に舞台に立ちう。貴女より先に色んな彼女の初めてを奪おう。デートとキスは奪ったから次は何にしようか。

自分の中から湧き出る感情に驚きつつも、ワクワクが抑えられない。人を愛するというのはこういう気持ちなのかと驚くと同時に感謝する。恋歌ちゃんと居れば知らない自分を見れる。そんな気がした。

その男、曲者につき

さて、明神阿良也邂逅回ですね。今の恋歌ちゃんならちよつと覚えて貰えるでしょう。景ちゃんには劣るかもしれませんが。

＞貴女は夜風景とお揃いの服を着る。可愛らしいデザインに貴女は満足する。

いやセンス無すぎだろ。なんだ、『TASMANIAN DEVILタスマニアデビル。別名はフクログマ、フクロアナグマ、フクロクズリと言うらしく、主に死肉を食らう肉食動物。詳しく知りたい場合はwikiを参照してください』って。でも景ちゃんがオススメしてくれたので唇を噛み締めながらダサイと言わずに着ます。

「恋歌、似合っているわ」

景ちゃんも満足そうに写真を撮らないでください。黒歴史ですよこれ。早く行きましょう。

＞貴女が劇場に着くと客席数は3000を超えている筈だが、殆ど埋まっている。席に座ると夜風景と開始まで静かに話す。

そろそろ始まりますね。阿良也くんの演技は勉強になりますが、景ちゃんの方が経験値としてはうま味です。俺ア、舞台とか出ねえからなあ：（フラグ）。じゃあ、なんで見に来たんだよって話ですが、暗殺の為ですね。そこそこ印象残しておかないと殺しにくいんですよ。本来ならターゲットから外しても良かったんですけど、暗殺の天使“ENDは主要人物殺害がメインですからね。嫌になりますよもう。

＞照明が点く。そこに立つのは一人の青年だ。彼は静かにセリフを読み上げる。

「その罫に親父が喰われたのは、俺が15になった夜のことだった。親父はマタギだった」

＞舞台の上という遠い場所に居るはずなのに、近くに居るように錯覚する。観客が彼に引き寄せられるのを感じる。

景ちゃんと比べるとやはり高い表現力ですね。今の景ちゃんが持つてないものを殆ど持つてます。感情に基づいた芝居を身体全体で観客に表現する。まさに化け物ですね。

「恨みはない、ただ今夜奴を殺して喰うのはこの俺だ」

＞彼は涙を流しながら決意する。

＞拍手と共に幕が下がる。終わると人々は席を立ち、感想を言い合っているようだ。

さて、終わりました。面白かったですね。いや、面白いなんて言う陳腐な感想しか言えない自分が嫌になりますね。景ちゃんは成長したらあれを超えるのか…その前に天使の実績解除しなければなりませんね。じゃあ、行きましようか。何処に？阿良也くんのところだよオ！

＞貴女はまだ舞台を見ている夜風景に明神阿良也の所へ行かないかと提案する。

「…うん、そうね。私、あの人のサインが欲しいわ」

＞貴女は頷くと、星アキラに連絡する。でも夜風景の言葉にモヤつとする。

なんか度々モヤモヤしてますけど、恋歌ちゃんどうかしました？まあ、いいか。アキラくん、いーれーて。

「はい、星アキラです。えっと、恋歌君何かな？」

＞貴女は明神阿良也のサインが欲しいので、会見場に入れて貰えないかと頼む。

「えっ…僕も明神阿良也の舞台行きたかったんだが…まあ、それは良いか。分かった。確か知り合いのスタッフが居たはずだ。伝えておくよ。僕の分もサインよろしく」

＞星アキラからの連絡を終えると会見場に向かう。沢山の記者たちが明神阿良也を取り囲んでいる。話を聞いていると急に彼は立ち上がる。

「じゃケイコがあるんで」

＞貴女は夜風景にサインを貰いに行こうと言いに行く。すると記者たちが貴女を見て騒ぎ始める。

「おい、あれって頭鬼恋歌じゃないか」

「確か、スターズの新星とか呼ばれてる奴か？でもパツとしない顔だ

な。あれくらいならどの事務所もいんだろ」

「いやいや、頭鬼恋歌のCM見たか？あれはやべえよ、カレーのルーと嫁に頼んだの初めてだわ。嫁には変な顔で見られるしよ」

＞急に記者たちが押し寄せてくるので貴女は困惑する。

邪魔なんですけどお!?アキラくん居ないところなるんですね、面倒臭いな!?

「…ねえ、君ら役者?」

＞いつの間にか明神阿良也が近くに居て、貴女と夜風景を見ている。

「いいね、君。凄く臭う。俺の好みの臭い」

「…嘘」

＞夜風景に薄い笑いを見せて彼は話す。夜風景は臭いと言われたことがショックなようだ。そして貴女をじつと見る。

「君は…なんだ?臭う。それも強烈な臭いだ。だけど…鼻が曲がりそうなほど臭い。死臭に近いな。もしくは熟れ過ぎた果実?いや、例えが思いつかない」

「恋歌はいい匂いよ。死臭なんてしないわ」

なんかめっちゃくちや興味持たれてませんか?いや、ちよつと興味持って貰えるだけで良いんですけど…

「…君は良いな。君、無意識に共演者を振り回すタイプだ」

「…千里眼?」

＞夜風景に目を移す。夜風景は明神阿良也からそう言われると後ずさる。

「千里眼?面白いねそれ。そう俺、千里眼持つてるんだ。俺の千里眼によると君の尻はまだ青い。だから、まだ早い。んで、君は…やばい。鳥肌が立ったのなんて久しぶりだ。つーことでまた会おう」

＞笑って夜風景に言うと、貴女を見て更に笑う。そして言いたいことだけ言うと帰っていく。

嘘やん…なんか恋歌ちゃん、臭いフェチストーカー男に狙われてるんですけど。

演技が終わったあとの会見は要らないと思う。自分の言いたいことを理解しない奴らに何を言っても無駄なのだから。会見をしたとしても一言で済ませたい。稽古の方が何倍も重要だし、疲れたので寝たい。

「二人演じる度に、生まれ変わったような気分になる。そのために生きてる気がするというか」

これを理解してくれるのはここに何人いるだろうか。一人でも居れば僥倖だ。これ以上は無駄だと判断し、帰ろうとする。引き止める声が聞こえるが、無視していると別のざわめきが起こったのを感じる。そして出会った。あの2人に。

「君ら、役者？」

思わず、記者達を押し退けてその2人に話し掛けていた。1人は俺好みの臭いをさせた女、もう1人は異常なほどの臭いをさせた女。どっちも興味がある。特に、異常な方。こいつは臭いが混じっている。隣にいる俺好みの臭いと似た臭いもすれば偶に無臭になったり俺好みじゃないけど他の匂いがする。でも1番は。

「死臭に近いな。もしくは、熟れ過ぎた果実？ いや、例えばが思いつかない」

腐った様なそれでいて美味いと錯覚させる臭いだ。鳥肌が立つのを感じる。この役者を知れたことに感謝しかない。もっと知りたい。だけど、それは叶わないな。これから銀河鉄道の夜がある。ウチに彼女が来てくれれば面白いんだけど。

暫く喋っていると俺好みの臭いの方が俺の事を千里眼って言うてる。だからそれに乗って喋った。また会える日を楽しみにしておく。まあ、俺好みの方はもう少し熟れてからの方が好きだけど。

劇場に帰ってくると巖さんが居たから話しておく。今日出会った俺好みの臭いと鳥肌が立つ程の臭いのしたあの2人の話を。

「…いつか、共演出来たら面白いな」

それがあんなにも早く来るとは思わなかったし、あの鳥肌が立つ程

の臭いの女…頭鬼恋歌と対決するとは夢にも思っていなかった。

星を追うものたち

前回のあらすじを簡単に説明します。臭いフェチストーカー男に粘着プレイされました。犯人は明神阿良也です。捕まえてください。

ちょっと興味持って欲しいと思ったら、あの異常な興味の持ちようとかこのゲームは0か100しか知らんのか。クソゲーめ…！

顔見せは成功したので、知り合い程度には認識されたと思います。舞台には参加する予定無いんで銀河鉄道の夜編はつまらない暗殺術上げとそろそろ「暗殺の天使」ENDに向けて走り出します。今日はアキラくんとお仕事みたいです。全然内容がわからないのですよね。やっぱりクソゲーじゃないか！

>貴女は稽古場に着く。そこには和歌月千、星アキラなどスターズの俳優だけではなく色んな者たちが居る。椅子に座っていた天知心一がこちらを見て、にこつと笑う。

天知さん!?しかも和歌月ちゃんと他の舞台俳優ですね。劇団天球ほどではありませんがそこそこの有名な劇団員も居ます。なんだこれ。まるで舞台をするみたいなの配役ですね。

「やつと来たか、恋歌君。稽古が始まるよ」

な、何のですかね…なんか聞ける雰囲気じゃないんですけど。

>天知心一がパンつと手を鳴らし、全員がそちらを見る。

「主役も揃ったことですし、「星の王子さま」をかの巖裕次郎率いる劇団天球に負けないように頑張りましょう。私は貴方達に期待しています」

……「星の王子さま」?いや、そんなまさか。「銀河鉄道の夜」にぶつけて舞台公演をするってことですか!?馬鹿か!?こちらら映画俳優ぞ!?しかもキャスト一覧を見る限り、恋歌ちゃんと堀くんが主役。恋歌ちゃんは頑張ればどうにかなるかもしれないが…星アキラは原作でも主役としての才能はありません。もう嫌だ、失踪するんだ……

なんて絶望している場合じゃありません。こうなったらまた予定

変更です。『星の王子さま』に参加するということは舞台に出るということ。そうすると『羅刹女』も開放されます。というかそこに行ってしまう。運命に抗えないって奴ですね。因みに『羅刹女』のどちらサイドに就くかは自分の中で決まっています。景ちゃんです。当たり前だよなあ!?!天使負かさないと天使になれないので。後、共演者として景ちゃんの演技を見れるのはうま味です。暗殺者ルートから離れていつてないかこれ？

…そんな訳ないだろ！いい加減にしろ!!

やるなら全力です。八つ当たりも兼ねて、『銀河鉄道の夜』を超えます。初めて景ちゃんの本気で演技を競う場ですが、負ける気はありません。RTAでも無いので時間のロスとか気にしないで行けますし、『星の王子さま』をやると言うのも初めて聞いたルートですのでゲーマーとしては盛り上がってますね。

私、和歌月千が呼ばれたのは『星の王子さま』と言う舞台のキャストとしてだ。最初は私の努力が認められたからだと思った。だが、稽古部屋に入るとそこには有名な舞台俳優たちが談笑しており、入口付近には星アキラさんが居た。アキラさんは私に気付くと近づいてきてくれる。

「やあ、和歌月君。今回は宜しく」

「宜しくお願ひします」

「固くならなくていいよ。それにしても遅いな、彼女。いつもは早いんだが」

少し緊張しながらアキラさんに挨拶する。そして彼の言う、彼女という言葉に首を傾げる。

「彼女、ですか?」

私が入ってきた扉が開く。皆の視線がそこに集まる。容姿は可愛い、千世子さんとは比べものにならない。だが、彼女の雰囲気にもまれる。彼女から視線が離れない。彼女が私達の視線を離さない。

「やつと来たか、恋歌君。稽古が始まるよ」

アキラさんと天知心一だけがその場で動けた。アキラさんが普段通りに彼女に話しかけ、天知心一が手を鳴らしてその場の雰囲気や元に戻す。

アレはなんだ？ 以前の彼女じゃない。彼女は目立たない存在だった筈だ。演技は優れていても、落ち着いた雰囲気だった。あんなに他者を惹き付ける者だったか。

「初めまして、皆さん。私が頭鬼恋歌です」

その彼女の名前は、頭鬼恋歌。私の同期だが、遠い場所に居ると感じた。あのサスペンスの時より更に進化した彼女がそこに立っていた。さつきまで笑っていた筈の舞台俳優たちの顔が研ぎ澄まされているのが分かる。彼女に当てられて、負けてられないと思ったのだろう。

「舞台は初めてですが、私は必ずこの作品を成功させます。皆さんと共に『星の王子さま』を作り上げたい」

一つ一つの言葉がストンと自分の中に入ってくる。絶対に成功させなきゃ行けないと思わされる。

「同じ時期にあの巖裕次郎氏が演出する『銀河鉄道の夜』があると不安に思われるかもしれない。私が主役であることに不満を抱いている人も居るかもしれない。だから私は実力で魅せます」

笑顔で言葉を紡いでいく。洗脳されているかのように気分が高揚していく。天知さんが言っていた巖裕次郎の作品と同時期であることに不安がっていた者がもしかしたらかの作品を超えられるかもしれないと思い始める。頭鬼恋歌に不信感を抱いていた者が、彼女の声に耳を傾け始める。

「見せつけましょう。我々の演技が誰にも劣らぬということを」

ここにいる役者の中には前は売れていたが、今はそんなという者もいる。その者たちが希望に満ち溢れた顔を始める。

拍手喝采が鳴り響く。熱気が稽古場を包み込んだ。私も、彼女の元であれば変われる。そう思った。

：相変わらず規格外だ。演技で舞台俳優たちの潜在能力を引き出すだなんて夜風君と彼女以外この日本で見たことが無い。

先程まで喋っていた和歌月君の顔を見る。恋歌君に心酔しきった顔だ。つくづく、恋歌君が宗教勧誘の人じゃなくて良かったと思う。神を信じさせるのは彼女の得意分野だろう。演じるだけで他者に自分の思想を共有させられるんだから。彼女に掛ければ、人心を掌握するのは簡単だ。彼女は他人の望むモノに成りきれのだから。的確に人の弱い所を突いてくる。求めるものを与える。そんな救世主のような存在が彼女だ。

星の王子さまの舞台は、前々から舞台俳優たちは稽古をしていたらしい。自分達もしていたが、全員の顔合わせは母さんからの許可が下りるまで出来なかった。それをどうにかしたのが、恋歌君と天知心一。何をしたのかは聞いてもはぐらかされる。ただ彼女は僕の為にこの舞台を用意したとだけ伝えてきた。ならそれに応えない訳にはいかない。

僕の演技はデスアイランドの時より遥かに伸びた気がする。恋歌君曰くまだまだ足りないとの事だが。

僕の望みは“本物の役者”になることだ。この作品で僕は更なる進化を遂げる。

彼女となら、それが叶う気がした。

夜に浮かぶ月

臭いフェチストーカー男から逃げようと思ったたら、そいつと全面対決することになりました。どういふことやねん…

今、恋歌ちゃんは舞台稽古とCMとかの仕事に掛け持ちしてますね。軽く拷問です。これ労働時間とか超過して…あつ、はい。そうですよね、僕が甘かったです。

仕事楽しいー!!

> 貴女と星アキラは舞台の稽古をしている。窓から見える外は真っ暗だ。

「やっぱり、ここの入りがダメだな。『ぼく』の気持ちに寄り添えていない」

> 貴女と星アキラは稽古を続行する。

因みに今の所、この舞台が成功する確率は5割行きません。そもそも星アキラが主役というのはすっごい足枷です。スターズの俳優として場馴れはしてますが、それはNG有りの映画でのお話。アドリブが出来たとして、舞台上で通用する演技じゃないです。以前より声の張りや感情の出し方は上手くなっていますが…劇団天球の役者には程遠いですね。それは恋歌ちゃんサイドの他の役者もです。和歌月ちゃんも演技は下手では無いですし、上手い方ではありますが、中の上が良いところでしょう。

はーつつかえ？お前、走るのやめたら？これ勝てないやん？

だからホモはせつかちなんですよ。落ち着いてください。要するに星アキラを変えればいいんです。どうやって？ひたすら演技指導です。撮影以外はアキラとほぼ一緒に居ます。アキラくんを景ちゃんの家に入れて行きます。記者にバレたら不味いですが、天知さんとアリスさんの力で隠します。だから天知さんの協力が必要だったんですね（後付け）

恋歌ちゃんの演技ステータス、『恋式演技術』は説明文がほぼ機能してないですが、読んだ感じでは他人に影響を与える技能だと思われます。というかそこしか分かりませんでした。運営は早く修正お願い

します。

これを使ってアキラくんを魔改造します。邪神アキラくんにならないように時々、千世子ちゃんに見せてあげましょうね。再評価して貰いましょう。大切ですよ、これ。手間がかかりますが、RTAじゃないんで(念押し)。許してください、何でもしますから！アキラくんが！

アキラくんの尻を賭けたところで、お家に帰りましょうかね。アキラくん、稽古終わりにして家で焼いてかない？

＞貴女はもう夜も遅いし、帰ろうと星アキラに話しかける。

「…そうだね。明日、ここの台本の読み合わせを頼む」

＞今日家に泊まれば今日中に出来るかと貴女は言い、友達を家に連れていくというメールを夜風景に送信したことを話す。

いやあ、用意周到ですね。皆さん、褒めてくれて構いませんよ？

「いや、恋歌君の家って夜風君と君とあの子達だけだろう？男が上がり込むのは不味いんじゃない？」

なんでですかね？渋ってないで早く来て欲しいんですが。攻めてみますか。

＞だから？と聞き、それじゃいつになっても主役になれないよと返す。星アキラは考え、溜息を吐き領く。

「わかった。君は意見を曲げないからな…ただ出来るだけバレないようには…してるだろうな。君は用意周到だから」

＞勿論と返し、夜風景の家に向かう。

さて。稽古地獄ですよ、ルイちゃんとレイちゃんは寝ててもアキラくんのことは寝かせません。元はと言えばお前の演技ステータスのせいだからな！恋歌ちゃんに『恋式演技術』が無かったら、この実況止めてましたよ。本当に。

恋歌が友達と称して、男を連れて来た。星アキラを。以前も夜遅くまで彼と居て、彼の車で帰ってきた。

…殺してしまおうか。

笑顔で恋歌を迎える。殺意でアキラ君を迎える。悪寒を感じたのか、びくつと彼が震える。

「寒いのかしら。夏なのにおかしな人ね」

「…その、久しぶりだね。夜凧君」

「久しぶりね、アキラ君」

「ただいま！景ちゃん」

恋歌が私に抱きついてくる。もしかしたらこの男と抱き合ったかもしれない体で。だけど、殺意より幸福感が勝る。彼より私に抱き着いてくれたという嬉しさだ。私も抱きしめる。

「おかえり、恋歌」

「…やっぱり僕はお邪魔かな」

私たち2人の■が尊いからか。彼はそんなことを言い始める。そのまま帰れば、後で殺すだけにしてあげるわ。

「星先輩、約束しましたよね」

その一言で彼は止まる。そして、思案して私に話しかけてくる。

「僕と恋歌君に君の思っているようなことは無いよ。ただ、僕は…なりたいものがあるんだ」

彼はこんな顔をする人だったか。いつも笑顔で人を思いやる人だったのは知っている。だけど、こんなに覚悟を決めた顔をする人だったか。

「そう。今日は恋歌の好きなカレーだけど良いかしら」

「…ああ、皿洗いとか手伝えることがあれば手伝うよ」

「やった。景ちゃんのカレー、本当に美味しいんですよ！堀先輩」

嬉しそうに恋歌が鼻歌交じりに歩いていく。私も彼も子供のような姿を見て、顔を見合わせて笑う。

ルイとレイはもう寝かしてある。だから大きな声を出さないようにと2人に言い含めた。

夜、どんな稽古をしているのかを見に行った。巖さんにも阿良也君にも言われた「深さ」と「伝わりやすさ」の両立。黒山さんに指摘さ

れた掘り下げた感情を表現する技術。阿良也君にも似た演技をする恋歌からなら何かを掴めると思った。

恋歌の部屋を見るとただ寝てるだけのように見える。それをアキラくんが見てるだけ。でも、私には恋歌の唇が少し開いて、笑顔に見えた。分からないけどそれが嬉しく感じる。『彼』が大切なものに見える。

凄い演技だと思う。けど私の問題を解決出来るものじゃなかった。これ以上、彼らの稽古を邪魔しちやいけないと思って帰ろうとしたら、恋歌に話しかけられた。

「景ちゃん、何か悩んでる？私で良ければ相談乗るよ」

「えっと…うん。アキラ君、お邪魔してもいいかしら」

「ああ、構わないよ。今日はここで終わりにしようと思っていた所だしね」

アキラ君の許可も貰って、座る。そして話す。私が悩んでいることを。そしたら恋歌に笑われた。

「な、なんで笑うの恋歌。私真剣に悩んでいるのに」

「ええ？だって景ちゃん、出来てることを出来てないって言うのは面白いことでしょ？」

「出来ていることって…黒山さんと同じこと言うのね」

「そりゃそうだよ。墨字さんじゃなくても同じこと言うよ。例えばね」

恋歌が急に私を抱きしめる。思考が停止して、またフル稼働する。お風呂に入ったばかりだからかい匂いがする髪もサラサラでとうかアキラ君が見ている恥ずかしいでもやっぱり嬉しい。

「こうされるとさ、嬉しいでしょ？そういうことなんだよ。私は景ちゃんに喜んで欲しくてこうするの。私も貴女が喜んでくれたら嬉しいの」

顔が近い。キスが出来そうな距離で彼女が笑う。胸のドキドキを抑えて、彼女の言いたいことを理解する。

「そうね、私確かに忘れていたんだわ」

当たり前過ぎて、私の頭の中から抜け落ちていた。観客に喜んでだれか

らうこと。それが俳優にとっての原点。そして俳優じゃなくても、誰もが昔から出来ていたこと。表現は難しいものじゃないんだ。私が笑えば貴女を笑顔に出来る。貴女が笑えば私も笑顔になる。

「ありがとう、恋歌。思い出させてくれて」

「どういたしまして」

暗い雲に隠されていた月が少し光を取り戻した。そんな気がした。

綺羅星に届かない

僕は、星アキラは、芸歴8年のスターズ所属の俳優だ。スターズは輝ける主役に成るに足るものだけが所属出来る。でも僕にその才能は無かった。最初、売れたのは僕に才能と努力があつたからだと思つた。でもネットや週刊誌には母さんのお陰だと書いてあつた。

その通りだと思う。僕には才能が無い。だから母さんが手を回していたかもしれない。でも僕は母さんの職業に、“役者”に憧れてしまったんだ。みつともなくしがみついた。演技の指南書を見た、台本は渡されてすぐしつかり読み込んだ、踊れるようにダンススクールにも行つた、歌えるようにボイストレーニングもした、馬鹿だと侮られないように勉強もした、筋肉トレーニングをして身体の引き締めやかっこいいと思われる努力をした。

でも、足りない。自分には絶望的に才能が足りなかつた。ここで辞めれば楽になれる。そう思つた時もあった。だからそういう時は毎回繰り返した。

「皆さんに認められるような芝居をします」

逃げない為の決意、自分を繋ぎ止める楔。弱い僕を無理矢理立ち上がらせるための言葉。

僕はいつも虚しさを覚える。笑顔の女性ファン、それに手を振る僕。それは本当に僕の演技を見て応援してくれているのか。僕の容姿が好きだから応援してくれているのか。多分、後者なんだろう。僕に才能が無いのは分かりきっているから。

僕は夜風景を見ると辛くなる。彼女の演技は僕に無いものを全て持っているから。彼女は僕をどんどん追い抜いて行ってしまうから。僕の努力が無駄だつたと言われているようで。

僕は百城千世子にどんな感情を持ってばいいのだろう。母さんが育てた俳優。母さんが認めた俳優。嫉妬か、羨望か、ああなんにせよ、彼女に勝てないんだ。彼女は僕なんかより多くのモノを背負っている。僕には到底出来ない所業だ。自分のことすら出来ないのに、他に回せるわけが無いんだから。

僕は頭鬼恋歌に救われた。僕とは比べ物にならない演技力を持つた彼女は僕の望みを見抜いた。そして僕に「本物の役者」にしてあげると囁いてきた。それは悪魔の囁きだ。きっと僕は地獄に落とされる。だけど、それでもいい。母さんの七光りなんてもう言わせない。スターズのゴリ押し俳優なんて、もう絶対に言わせない。

僕が立つ舞台は「星の王子さま」。飛行士である「ぼく」役に抜擢された。何度も台本を読んで、「ぼく」の気持ちを理解していく。何度も恋歌君と読み合わせた。今までに無いくらい「ぼく」と同期していくのがわかる。役にハマるとはこういう感触なのかと理解していく。

陽の光で目が覚める。「ぼく」はいつも通り：いつも通りってなんだっけ。「ぼく」は辺りを見回す。ここは夜凧家か。そう言えば恋歌君に公演まで家でも稽古すると言われて、真夜中まで稽古していたんだっけか。朝食の手伝いくらいはしなければ、と思い布団を仕舞うと、立ち上がり台所に向かう。

：アキラ君と恋歌ちゃんが一緒に出勤してきた。2人とも「星の王子さま」の主演だ。もしかしたら稽古をして関係が発展して、なんてこともあるかもしれない。

出来るだけにこやかに殺気を抑えて、アキラ君に話しかける。

「随分、仲が良くなったんだね。私に内緒で「星の王子さま」の共演をアリサさんに叩きつけたり、一緒に出勤してきたり。記者じゃないけど疑われても仕方が無いと思うよ?」

「：ああ、千世子君か。おはよう」

「大丈夫? 会話通じてる? アキラ君」

「ごめん、真夜中まで(稽古を)していたから少し眠くてね。もう一回言って貰えるかな」

これは殺害しても怒られないんじゃないかな。私の前でそういう

発言をしたってことは殺られたいってことだよね、アキラ君？

でもここで殺るのはリスクが高過ぎる。後にしよう。

「寝不足なんだ。私が殺…起こしてあげようか？」

「今なんて？」

「おはよ！千世子ちゃん!!」

恋歌ちゃんに急に抱き着かれる。唐突な事で頭が真っ白になる。いつも撫でていたいさらさらな黒髪から香る柑橘系のシャンプーのいい匂いと、脱がしたいシャツから柔軟剤のいい匂いがする。硬直していると笑顔でまた挨拶をされる。

「おはよう、千世子ちゃん」

「…おはよう、恋歌ちゃん」

なんとかその言葉だけを絞り出す。いつの間にかアキラ君への殺意が霧散していた。命拾いしたね、アキラ君。彼女が離れていき、その温もりを惜しむ。

「今日は制汗剤のCMなんだね、恋歌ちゃん」

「うん…え、なんで知ってるの？」

「一応、スターズの俳優のスケジュールは頭に入れてるから」

「凄いね…！私なんて明日か明後日くらいまでしか覚えてないよ。今日のスケジュールも怪しいくらい！」

「いや、恋歌君。1週間くらいのスケジュールは頭に入れとこう。と
うか手帳とかあると便利だよ」

元々スターズのスケジュールはほぼ頭に入れていた。撮影を巻きで行って次の現場に行くために。恋歌ちゃんのスケジュールは念入りにチェックしているが、それも彼女が忘れやすいからだ。他意は無い。あとアキラ君、彼女に手帳なんて要らないよ。私が教えてあげるから。

「大丈夫、私が連絡するよ」

「本当に？千世子ちゃんマジ天使だあ。大好き！」

「甘やかし過ぎだろう…」

…大好きとかそんなに気軽に言っちゃダメだよ、恋歌ちゃん。ここにアキラ君が居たから抑えられたけど。居なかつたら…どうなるか

分からないんだから。

それに恋歌ちゃんのスケジュールを把握しておけばデートの日程も合わせやすいから好都合だ。あ、他意は無いよ。

「撮影、そろそろじやない？」

時計をちらつと見て、教えてあげる。彼女はありがとう！と言うと走って行ってしまふ。教えなければずっと居れたかな、という気持ちと彼女の邪魔をしたくない、という気持ちがある。

本当に手に入れたいものを手に入れるのはとても難しい。何せ彼女は人誑しだ。今も何処かで誰かを魅了して居るかもしれない。夜凧さんという強力なライバルも居る。同棲を超えるには同棲しかない。恋歌ちゃんの初めては根こそぎ私が貰う。先ずは彼女の目線を私に釘付けにしてあげよう。天使になった私に。

大好きだよ、恋歌ちゃん。

夏なのに急に悪寒を感じた実況プレイ始めていこうと思います。

前回話した通り、アキラくん魔改造してます。さつき千世子ちゃんに出会ったんで、再評価もされてる…筈です！

今日は舞台は一旦置いて、CM撮影ですね。制汗剤のCMです。制服を着て撮影するみたいですね。お、堂上くん居るじゃないですか。こんにちは！堂上くん、誰？って方は景ちゃんをゲロ女呼び男です。目つき悪いイケメンですね。殺してやろうか？

> 貴女は堂上竜吾に話しかけると、相手は嫌そうな顔をする。

なんで真咲くんといい、黒山墨字といい、恋歌ちゃんを嫌うんですかね。こんなに可愛らしいのに。あ、景ちゃんと千世子ちゃん達と比べるのはちよつと…流石にね。

「お前かよ、共演者」

どうやら今回のCMの共演者みたいですね、竜吾くん。元気な子アピールで好感度上げましょうか。

> よろしくね、と貴女は快活そうな声で堂上竜吾に笑いかける。

「まあ、仕事だしやるにはやるけど…」

　　といつても竜吾くんはすぐ仲良くなれます。寂しがり屋なんので話しかけてあげると好感度が上がっていきますよ。ちよろい！

　　> 貴女は撮影が始まるまで堂上竜吾と喋った。

「お前、意外と色んな趣味持ってたな…飽きっぽいからすぐやめんだよなあ俺」

　　> 何にでも興味を持てるのはいい事だと話す。

「それもそうか…またなんかやってみるか」

「堂上さん、頭鬼さん、スタンバイよろしくお願いします」

　　それじゃあ頑張って行きましょうかね。

咲き誇る花、散り行く花

終わりましたね。制汗剤のCMって青春系のばっかなんで嫌になりますよ。部活とか屋上とかでイチヤイチャしやがってよオ…

そんなことは置いといて、竜吾くんと的好感度上げが成功しましたね。スターズ内であまり目立つと仕事来なくなったりしますからね。出る杭は打たれるって奴です。気をつけましょう。その分、大黒天では才能さえあれば伸ばしてくれるので、そういう柵しがらみを気にしないでプレイするなら自分で事務所を立ち上げるか、大黒天に入りましょう。あまりやったことないんで分らないですけど、wikiを見る限りではスターズよりはやり易いです。仕事が来るかどうかは別として。

CM撮影が終わり次第、舞台稽古…と言いたるところですが、敵情視察です。景ちゃんと阿良也くんの現状を確認しに行きましよう。ちなみに原作での彼らの銀河鉄道の夜の評価はSーですね。高えよ：何故マイナス判定があるのかと言うのは後で言いますが、これに勝つにはSかS+を叩き出さなければいけません。ですが、今のところB+がいい所でしょうね。Aにも届かないということです。理由はアキラくんや共演者だけのせいでは無く、恋歌ちゃんが死という概念を理解し切れていないこと、舞台という初めての経験に対応出来ないことが挙げられます。

つまり、今回の敵情視察では彼らの現状確認と舞台に必要な経験値獲得をしに行くわけですね。ちょうど良く死の概念が理解しやすい人も居るので、行きます。

> 貴女は劇団天球の稽古場に足を踏み入れた、誰にも見つからないように少し離れた場所から夜風景と明神阿良也を観察する。

あ、ずっと言い忘れていましたが『洞察力』を持っていないキャラが芝居を見ても何かを掴むことは稀です。なのでお芝居した方が掴むのは早いですね。あとはお助けキャラじゃないですが黒山墨字、星アリサなどの洞察力高めの人にアドバイスを貰った方が早いです。

> 夜風景は以前より表現する力が高くなっているように感じる。明神阿良也もそれに合わせ、成長しているようだ。

ちなみに彼らは洞察力も高ければ、芝居しても成長するので化け物です。俳優ビルドでガチガチに固めてやつと追いつくか越えられるかなので暗殺者ビルドも組み込んで恋歌ちゃんを越えられるわけがないんだよなあ。銀河鉄道の夜終了時には景ちゃんと阿良也くんは演技ステータスがめちゃくちゃ評価高くなります。特に景ちゃん。伸びしろがあるってレベルじゃねーぞ!? ってキレ散らかすくらい伸びます。簡単に言えば、感情を伝播させられるんですね、何それ怖い…

＞貴女の近くに誰かがやってくる。『気配察知Lv3』の習熟度が少し上がった。

「おい」

＞巖裕次郎が貴女に話し掛けてくる、

お、彼から来てくれるとは都合が良いですね。彼とお話しましょうか。では次回は彼とお話する所から始めます。ご視聴ありがとうございますございました。

夏の陽射しを腕で遮る。それでも涼しくなることは無くて、少しげんなりする。

「暑っっっ…」

暑さから逃れるように木陰のベンチに座る。空を見上げて、制汗剤を首に付ける。

「あ、竜吾くん！」

「よう、恋歌」

「夏休み、会えなくて寂しいなあって思ってたから会えて嬉しい！」

「いや、この間も会っただろうが」

ワンピースを来たあいつが笑顔で近付いてきて、当たり前のように同じベンチに座る。俺の手にある制汗剤を見るとまた嬉しそうする。

「同じの使ってるね。お揃いだあ。もしかして私と一緒にしたのかな？」

悪戯っぽく笑って話してくる。：確かに、部活で見たからお揃いにしたけど、それを認めるのは癪だから。

「偶然だろ。揶揄うなよ」

「偶然でも私は嬉しいけどなあ。君と一緒に」

今日一番の笑顔で俺の顔を覗き込む。俺は夏の暑さじやない別の熱さを顔に感じ、つい顔を逸らした。

「はいカットー！」

カチンコの音で強制的に現実に戻らされる。隣に座る頭鬼恋歌はもう立ち上がり、去っていく。また引き込まれた。普通に演技をしようとしたのに、あいつのせいで変な感情を持たされた。

思えば初めて会った時から嫌いだった。ゲロおん：夜風景と似た演技をすると和歌月から聞いた時から気に食わなかった。役者は輝くのが仕事だ。必要の無いことをして芝居に影響を与えるのは馬鹿だ。だからあの夜風景みたいな奴なら絶対に関わりたくなかった。

デスアイランド撮影18日目、あいつの演技を見に行った。シーンの内容はあいつが友人を殺そうとして、アキラが止める。だけどナイフを持ったあいつはアキラもターゲットにして逆に殺される。裏切り者役にはよくあるシーンだ。それをスターズの俳優がやるなんてな…

「何してるんだ！やめろ！」

アキラが止めに入る。相変わらず正確だ。声の出し方も身体の動きも良い。現場慣れしているから緊張も無い。：つまらねえ演技だがNGが出ない演技だ。

そしてあいつは、一気に現場の雰囲気を読み込んだ。

「何って…殺すんだよ。見ちゃったから君も殺さなきゃいけないんだ。なんでさあ、協力し合おうとするの？殺しあつてよ。私、困るんだよ」

瞳孔を大きく開いて、ナイフをアキラに突き付ける。アキラはスレスレで避ける。その後、色々もつれあつて、ナイフがあいつの腹に刺さる。

「…あは、刺さっちゃった。ねえ、今どんな気持ちかなあ？人を殺すつてさあ、どんな気持ち？」

血が大量に出ているにも関わらず、不気味な笑顔で問う。アキラは自分の赤く染まった手を見て、顔を青ざめさせる。その演技は迫真の演技に見える。本当に殺してしまった様な顔をしているのだ。シーンが終わって、アキラの近くに行く。

「おい、大丈夫か？お前、体調でも悪いのか」

「…ああ、大丈夫だよ竜吾君。体調が悪い訳じゃないんだ」

「でも顔、真っ青だぞ」

「…君は、人を殺したことがあるかい？僕は無い。ドラマとか映画では見たことあるけどね。なのに、あのシーンで僕は確実に人を殺したんだ」

何を言っているかわからなかった。まるで夜凧と喋ってるみたいだった。いや、殺されかかった友人役の奴も震えていた。本当に殺されかけたかのように。

理解出来ない。共演者にリアルな感情を与える演技なんて有り得るのか。それが出来るのは人間なのか。

自分がその演技に取り込まれたらどうなってしまうのか。

…だからなるべくあいつと共演しないようにしていたのに、制汗剤のCMで共演してしまった。久しぶりに会ったあいつは舞台の影響か髪を短くしていた。俺を見掛けると笑顔で話し掛けてくる。案外、多趣味らしく俺がやったことは大体知っていた。また何かやってみるか…なんて思っていたら冒頭に戻る。

恋愛感情をあいつに持つことは無い。だからあのシーンで無理矢理その感情を持たされたことだけが不愉快だ。髪を掻き毟る。別に仕返しをしたりはしないが二度と共演したくないリストにあいつが刻まれたのだけは確かだ。

夜凧がウチの劇団に来た。思わず飲んでいた水を吹き出した。そ

して巖さんが口を開く。

「主演ジョバンニに明神阿良也、その友人カムパネルラに夜風景…主演の1人だ」

…納得がいかなかった。別に主演を俺が取れなかったことじゃない。いやそれも不満だが、力不足は分かっている。けど、他の人じゃなくて急に来た外部の奴が主演をやるのはどうなんだ。夜風はリアリティのある演技をする。だけどそれは映画での話だ。舞台ではまた勝手が違う。

「ちよつとちよつとちよつと巖さん!?嘘でしょ!?この子がカムパネルラ!?!」

亀太郎が慌てて巖さんに話しかける。

「無理だつて!ちんちんついてないじゃん!!」

「そこかよ…」

「分かんねーだろうが」

「!なるほど」

「なわけねえだろうが!馬鹿!」

「うるせーな」

こいつ馬鹿なんじゃないか?思わず亀太郎に突っ込んでしまう。その後は七生さんと巖さんの話し合いになる。役者は何を持ってプロと素人を区別するか…か。なんだろうな…と俺が考えていると阿良也さんが口を開く。

「役者を名乗る覚悟があるかどうかだよ。言葉つてのは重く強いものだよ。だから俺は言葉を軽く扱う奴が嫌いだ。もう一度きくよ、夜風」

「君、役者?」

役者を名乗る覚悟。俺にそれは有るのだろうか。才能も努力も足りてない俺がそれを名乗る資格が覚悟があるのか。…いや、無いんだろうな。あるなら、事務所を辞めずに必死にしがみついた筈だ。簡単に諦めて辞めてしまう奴がそれを名乗る資格なんて無い。

黙っていると即興劇エチュードが始まった。七生さんと夜風の即興劇。七生さんの気が立っている理由はわかる。巖さんの最後の作品を成功さ

せたいからだ。巖さんはこの作品を持って終わりにするらしい。彼の作品を楽しみにしている人達は沢山いる筈だ。それに劇団天球は彼に舞台俳優としての人生を与えてもらった者たちだ。だから必死になっている。彼をもう一度やる気にさせる為に。

即興劇のお題は汽車か。椅子に座った夜風の身体が微かに揺れているのに気づく。皆はただ座っているように見えているようだが、何度もあいつの演技を見てきたお陰か気づく。逆に言えば皆のように夜風の芝居を見た事ない奴らは気づかない程の揺れだ。相変わらず繊細過ぎる演技をする。

七生さんが髪を下ろし、眼鏡を取る。そうすると元々綺麗だけど全く別人のように更に綺麗になる。夜風は驚いた様だ。

「どうかした?」

「…うん。他にも席が空いていたから驚いてしまった」

今度は七生さんが驚く番だった。切り返しが上手いな。その後は夜風を使う方に七生さんは立場を変え、亀太郎は罵倒されていた。

話し合いも終わって帰ろうとすると夜風に話し掛けられた。

「真咲くん、こんにちは」

「…よう」

複雑な気持ちだ。こいつの才能は知っている。だからと言ってぽつと出の奴に主演を取られて嫉妬してないわけじゃない。役者を名乗る覚悟も無いのに、みつともなく嫉妬してしまう。

「真咲くんって茜ちゃんと同じ事務所じゃなかったかしら」

「あー…諸事情でな。辞めたんだよ。巖さんに拾って貰った…というカラ致られた」

天才に俺の心は分からない。こうやって俺の心を抉ってくる。俺に関わるな。天才の癖に凡人に歩み寄るな。お前らはいつも笑顔で俺らを踏みにじる。恋歌もお前も阿良也さんも千世子も。皆、凡人なんかにも目もくれない。

「ら、拉致られた?怖いわ…」

「なあ、夜風」

「?」

俺に関わるな、と言おうとして口を閉ざす。傷つけたい訳じゃないから。一息ついて、窓を指す。

「今日はもう暗いし早く帰った方がいいぞ」

「そうね、そうするわ。またね、真咲くん」

走っていくあいつを見送る。すると巖さんと阿良也さんが喋っているのが聞こえてくる。

「…『星の王子さま』?」

「ああ、スターズの俳優の頭鬼恋歌と星アキラによる舞台だ。俺らの『銀河鉄道の夜』と同時開演する」

「…俺らが負けるって?」

「ねえよ、そこは心配してない。だが頭鬼恋歌には気をつけておけよ。死臭がする奴なんて大抵やべえやつだからな」

「わかった」

あいつも舞台を?しかもアキラもか。恋歌は何を考えているんだ。星アキラの演技は確実にあいつの足を引っ張るのに。

そんな事を考えながら帰路に着いた。

死に逝く者と生きて行く者

俺は、巖裕次郎は、ろくでなしだ。

演劇をやるために生きてきた。芝居に熱中して、家族に愛想を尽かされた。俺を恐れて辞めていった奴らは数え切れない。俺の舞台を最後に役者を辞めた女優も居た。

それでも尚、俺は演劇を続けた。それしか道が無いから。それが俺の生きる意味だから。

半年前に臍臓に悪性の腫瘍が見つかった。まだまだあいつらに教えていないことがある。まだまだあいつらには人生みらいがある。だから俺の死を使つてでもあいつらに、星アリサに遺さなければいけない。

死ぬのは怖くなかった。演劇の道を志した時から、ろくな死に方はしないと思っていた。だけど心残りなのはあいつらの事とアリサのことだ。俺が集めた俺を慕ってくれる馬鹿野郎やくしゃたち共。俺のせいで女優を辞めてしまった女星アリサ。

だから最期の作品は「銀河鉄道の夜」にした。俺の伝えたいこと全てが込められた、宮沢賢治の傑作であり遺作。

その為に必要な奴は揃えた。

源真咲。今にも死にそうな臭いがした馬鹿野郎。手前を殺す演技を何処からか学んでしまった馬鹿。でも、演技に真摯に必死にしがみついてた。だから教えてやった。役つてのは自分を殺すことじゃなくて新しい自分を知ることなんだってことを。格好いいだけが演技じゃねえってことを。センスがねえから何度も怒鳴った。でもあいつはへこたれないで付いてきた。

亀と同じダサイからこそ、他人を輝かせる「脇役」って奴だ。他人を慮る才能はあった、でも自分を大切にしたいことに気付いてねえ馬鹿。だから拾ってきた。

夜風景。阿良也と似た演技をする馬鹿野郎。そしてあいつらを導く為の役者。あいつらに銀河鉄道に乗せるための切符。あいつなら俺の言いたい事を全部あいつらに伝えてくれる筈だ。俺の死を喰らって、もっとあいつは飛べる。黒山の思惑に乗るのは癪だから利用

させて貰う。

芝居は独りじゃ出来ない。スタッフだとかそういう演劇関係だけじゃなくて友人、恋人、家族、他人が居るから、いいこともいやなこともあるから出来るんだ。

死人に口なし。まさにその通りだ。俺が死んだら、あいつらに何も言ってやれない。つまらない老人のくだらない言葉も、クソみてえな芝居を怒鳴ることも、「ありがとう」すらも。

だから生きてる奴らが気づくしかないんだ。俺が言葉で伝えるんじゃないで、あいつらが「本当の幸い」に気づかないとダメなんだ。

「おい、何見に来てんだ。商売敵だろお前」

何処から入り込んだのか、稽古場を少し離れた所から見つめる、黒山に見せられた映像より髪の手短くなった背の小さなガキ。阿良也と張る、いや阿良也以上の演技をする怪物。『銀河鉄道の夜』に合わせて『星の王子さま』を公演させた張本人。

「初めまして、頭鬼恋歌です。今日は敵情視察つてやつですかね」

夜凧と阿良也の稽古から目を離さないまま、返してくる。どちらかがいい演技をしたら、それを逃さずに観察する。俺は杖を鳴らし、俺の話聞かせる。

「許可してねえぞ。帰れ」

「…ケチ」

「誰がケチだ。お前の稽古はどうなってんだよ」

「私なら成功させられるので抜け出して来ました」

「随分な余裕だな？足掬われても知らねえぞ。夜凧はお前を軽く超える。」

こいつが何ヶ月かけて稽古したのか知らないが、素晴らしい演技をしようが演劇は独りじゃ回らない。それを知らない奴の言葉だと思っただ。

「大丈夫ですよ、今私の役者こまを頑張つて育成してるので。絶対、成功させられます。それに進化するのが天才の特権だど？」

薄く笑う。そしてこちらを向いて言い放つ。

「ところで、死ぬってどんな気持ちですか」

心臓の鼓動が跳ねた気がした。黒山か？夜風か？いやあいつらは他人に告げ口するようなタマじやない。なら誰だ。誰がこいつにあの話をした？

「脅したりしませんよ。安心してください。ただ聞きたかっただけです」

「…手前、何処でそれを」

「天知心一ですよ。私と彼はビジネスパートナーなので」

「…ろくでもねえやつと関わってんな」

「そうですね。でも私自身ろくでなしですし、お似合いでしょ？それで、死に対する感情を教えてくださいませんか」

「それを教えて何になる」

こいつの意図が掴めない。俺の死をネタに週刊誌に売り出すでもなく、揺するでもなく、感情を聞きに来たのは何故だ。

「私、景ちゃんに会うまで、死ぬって虚無だと思ってました。でも違うんですよ。死ぬって他人に影響を与えるんです。凄いですよね？人って他人に死なれたら悲しかったり、嬉しかったり、怒ったりするんですよ。だから知りたいんです。死ぬ側の心を。それはまだ知らないから」

頭鬼恋歌は淡々と言葉を並べていく。頭のおかしい戯言だ。だが、俺は返答する。こいつは俺で何かを掴もうとしている。偶には敵に塩を送るのも悪くは無い。

「死ぬのは怖くねえな。痛みはこいつらで紛れた…つても、心残りだけはあったかもな。だからこの公演でその心残りも無くすつもりだ」

「…ああ、なるほど」

俺をじつと見て、何かが腑に落ちた顔をする。その姿を黙って見ていると急に頭を下げる。

「不躰な質問をすみませんでした。でも私が知りたいことは知れました。ありがとうございます」

「ふん…だったらもう帰れ。他の奴らにバレたら不味いからな」

「はい。本当にありがとうございます」

頭を上げて満面の笑顔で去っていく。それを見送って溜息を吐く。きつとあいつはいつか大きな壁にぶち当たる。今回は俺という死に近い人間が居たから乗り越えられた。そしてあいつ自身が理解出来るものだったから掴めたのだろう。だからもし、あいつに理解出来ないものが現れたらその時は…あいつが気づくしか無い。自分の「本当の幸い」に。

星の王子さま

飛ばし過ぎてもう本番とかマジ？な実況プレイです。『銀河鉄道の夜』と同時公演ですが、天知さんの集客やアキラくんのルックスで女性ファンや家族連れが多いですね。勿論、演劇界の有識者もいらつしやいますが、大体は銀河鉄道の夜に流れましたね。客の層にバラツキがあるのは仕方ありません。しかも相手は巖裕次郎。同じ客層で争おうとするのが間違いなんですよね。

勝算はありません。アキラくんのチューニングも完璧ですし、和歌月ちゃんたち他の役者も成長しました。あと巖さんの話をリークして観客混乱も考えましたが、誰かに邪魔されたんですよね。一体この^星ラスボスなんだ…そういう訳で、巖さんの話はもうカードとして切れませんね。これ以上妨害しているとアリサさんにバレて解雇されま^す。それは非常に面倒くさいので止めておきましょう。

始まる前に皆様に『星の王子さま』のあらすじを簡単に説明しておきましょう。星アキラ演じる飛行士である『ぼく』がサハラ砂漠に不時着してしまいます。そこで頭鬼恋歌演じる小さな星からやってきたと言う王子さまと出会います。星の王子さまは色んな星を旅して、最後に地球にやって来ました。『ぼく』は初めて自分を理解してくれる人に出会うんですね。ですが、王子さまが地球に来て1年、彼はあることを決意する…って言うのがあらすじですね。

走者は『星の王子さま』に参加してから内容を調べたので、ガバガバですが何とかなるでしょ。取り敢えず、今は他の役者の心を落ち着かせておきましょうかね。

>貴女は他の役者に声を掛けていく。信頼する貴女からの言葉で他の役者は良い緊張状態になる。

良いですね、恋式演技技術って言う未知の技能が効いています。偶に稽古サボってましたけど、信頼度はそこそこ有るみたいです。サボってたのも必要なことなんで…

では舞台を始めましょうか。最初は『ぼく』の小さい頃のお話ですね。その後、成長して飛行士になった『ぼく』がサハラ砂漠に不時

着して王子さまに出会います。

＞砂漠の上では「ぼく」が寝ている。貴方はそんな彼に話しかける。

「ねえ、ヒツジの絵をかいて！」

「え？」

「ヒツジの絵をかいて」

＞「ぼく」は貴方に驚いている。貴方はじつとそんな彼を見る。

初邂逅ですね。この後に「ぼく」と王子さまは話をしてヒツジの絵を描いてもらい知り合いになります。その後、時間をかけて仲良くなっていくきます。男同士の友情良いですねえ。

仲良くなるにつれて、王子様が住んでる星が家くらいの大きさしかなくて、バオバブの種を悪いものと見なし、バラの花を大切にしていることを知ります。

＞トゲがなんの役に立つのかを知りたくて貴方は「ぼく」に聞いたが、飛行機を直すのに夢中で出鱈目な返事をした「ぼく」に腹を立てた。貴方は腹を立てながらこう言う。

「だけれが、何百万もの星のどれかに咲いている、たった一輪の花が好きだったら、その人は、そのたくさんの星を眺めるだけで、幸せになれるんだ。そして、僕の好きな花が、どこかにあると思っっているんだ。それで、ヒツジが花を食うのは、その人の星という星が、突然消えてなくなるようなものだけど、それも君は、大したことじゃないっていうんだ」

＞貴方はそれ以上何も言わず、泣き始める。外はもう夜で、貴方は「ぼく」に慰められる。

この後、王子さまの回想が始まります。バラの花と会ったこと、彼女と居ることに嫌気が差して別の星に行ったこと、その後、6個の星々を通して王子さまはバラの花のことをまた考え始めます。そうして6番目の星に住む地理学者によって地球を目指しました。

今のところ順調ですね。アキラくんも「ぼく」になり切れている気がします。これは勝ったな。地球で王子さまは色んなものに出会って地球の人間やモノがオウム返ししかしないことに違和感を持

ちます。そうしてキツネ役の和歌月ちゃんと出会い、大切なことを彼から教えられます。

もうここまで来れば終盤ですね。

＞石垣の上から貴方は下に居るへびを帰らせると、《ぼく》に受け止めてもらう。貴方と彼は話し始める。

＞貴方は彼に内緒で、出かける。すぐに気付いた彼が追いかけてくる。貴方は彼の手を取ると心配そうに話す。

「来ない方が良かったのに。それじゃあつらい思いをするよ。ぼく、もう死んだようになるんだけどね。それ、ほんとじゃないんだ」

＞貴方はこの体が重すぎて自分の星に持って帰れないと話す。そして泣きながら独りで行かせてくれと言う。

はあーやつと終わりますよ。長かったですね。後はアキラくんが腰を下ろせば終わりに向かいます。

「…いかないでくれ」

へ？アキラくん？なんで恋歌ちゃんの手を掴んで？

「《ぼく》を置いていかないでくれ」

失踪して良いですかね？もうなんなんだよオ!?どうした、アキラくん!?

《ぼく》は絵を描いた。《ぼく》が母さんと同じ俳優として輝く絵を。それを鼻高々に大人達に見せた。《ぼく》はお母さんみたいな立派な俳優になりますと彼らに話した。

「君に才能はないよ」

「理想ばかり語ってないで現実を見なさい」

「勉強した方がいいよ。役者なんて売れなきやゴミだ」

《ぼく》は努力した。才能は無いけど、努力した。理想を現実にしようと頑張った。勉強だっけしたけど、それも全て役者になる為だった。《ぼく》は大人達に合わせて話をするようにした。彼らは自分の興味のある、分かりやすい話に食いついたからそればかりしてあげた。皆が《ぼく》のことを物分りの良い人間だと褒めるようになった。

た。

でも、結局本当の「ぼく」を見てくれる人なんて居なくて、努力が認められることも無くて、「ぼく」はスターズのお荷物になっていった。

そんな「ぼく」を引き上げてくれたのが、恋歌君だった。悪魔の囁きと言ったけど、本当は凄く感謝している。初めて「ぼく」を見て話してくれた人だから。

彼女は自由奔放で、何を考えているか分からなかった。けど、彼女が常に誰かの為に生きているのだけは分かった。自分勝手に動いてるように見えて、誰かの望みを叶えようとしているのだ。

「ぼく」を何度も叱咤して、立ち上がらせてくれた。だから「ぼく」は完璧に「ぼく」を演じなきゃ行けない。

別れが近づく。王子さまはこの後、死ぬように倒れ込む。彼は星に帰ってしまう。嫌だ、帰らないで。「ぼく」をまた一人にしないでくれ。理解者が必要なんだ。「ぼく」には君が必要なんだ。君が居れば他なんてどうだっていい。

「いけないで」

彼の手を掴む。涙が流れてくる。心のどこかで戻ってこいという声が聞こえる。でも何処に？「ぼく」の居場所は彼の隣なのに。

「「ぼく」を置いていかないでくれ」

君が居なくなると言うなら連れて行ってくれ。この世に未練なんて無いんだ。だから。そんな事を思っていると彼が「ぼく」を抱き寄せてくる。

「…君はさ、1人じゃないよ。君も言っていたけど目で見えるものだけが全てじゃないんだ。人間にとって肝心なことは見えないんだよ。君が、僕のことを大切に思ってくれるのは僕の為に暇つぶししたからなんだ」

「君の居場所はこの地球なんだよ。君を待ってる友人が居る。君を愛してくれる人が居る。それなのに君は傲慢にもそれらを捨てるというのかい？随分だなあ」

ぎゅつと抱き締められる。温かい体温と心臓の鼓動で、意識が引き戻される。『ぼく』は、いや僕には千世子ちゃんが、夜風君が、竜吾君や和歌月君たちスターズが居て、母さんだつて僕を愛してくれていた。僕は一人じゃなかった。本当は誰かに愛されていたのだ。

「さあ、もう行かなきゃ。それに遠くに行つても僕は君の事を忘れないし、君も僕のことを覚えていてくれるだろう？それでいいんだよ。たまーに空を見上げて僕のことを見つけてくれ」

彼女は笑つて僕を離す。そして星を見上げて身動きをしなくなる。声1つ立てないで静かに倒れ込む。

舞台が暗転し、照明が点いたら『ぼく』のそのあとの事を語り、舞台の幕が下がる。

舞台の終わりは挨拶だ。皆で手を繋いで挨拶する。初日なのに台本に無いセリフを読んだし、泣いてしまった。しかも年下の女の子に抱き締められるという恥ずかしいことまでした。

だけど僕の心は晴れやかだった。隣に居る恋歌君の横顔を見る。彼女に何か返せばいいな、と思いつながら前を向いて大勢の観客に告げる。

「ありがとうございます」

「おかえり」を貴方に

前はアキラくんが恋歌ちゃんの手を握るというセクハラで終わりましたが、何とか切り抜けましたね…なんだったんでしょうか。涙流してたんで優しくすることを心掛けてました。マジで謎ですね。

＞貴女は楽屋に戻ると、ネットニュースを確認する。そこには巖裕次郎の訃報が掲載されている。

これ見て毎回思うんですけど、巖裕次郎生存ルートとかあるんですかね。舞台俳優だと有るのかな？やる気は全く有りませんが。取り敢えず、銀河鉄道の夜組も無事終わったみたいです。それじゃ評価タイムですね。舞台はこの後何日も続きますが、初日が一番肝心なので、これが成功していればその後は安定しています。

S 来い、S 来い、S！S！

S…

S+!?来たアアアアア!!勝ちましたねえ!景ちゃんに勝ちました!いやあ、ちよろかったですよ。恋歌ちゃんの演技ステータスなら行けると思ってました(大嘘)

でもぶっちゃけ、他の役者も和歌月ちゃんも異様な程成長してたんですよ。アキラくんが1番成長してました。というか成長より変質というか…いつの間にか脇役としての才能を失って、主役としての才能へと変質してるんですよ。おかしいなあ…

まあ、難しいことは考察班に任せて、今は勝利の余韻に浸りましょうかね!!

次回からは「普通の女子高校生」編ですね。ああ…やっと舞台編終わったあ…

「銀河鉄道の夜」にはアリサさんが行った。私は恋歌ちゃんの「星の王子さま」を見に行けと言われたので、快く了承した。

劇場には子供連れや女性が多かった。演劇に関する有識者は少な

かった。まあ、大体はスターズという看板やアキラ君目当てだろう。
“星の王子さま”を見に来ている人は少ない。

照明が暗くなる。舞台の幕が開いて、アキラ君が立っている。彼は鼻高々に、色鉛筆で書かれた絵を大人達に見せる。その姿はまるで18歳には見えない。本当に子供のようだ。

アキラ君とは付き合いが長いから分かる。彼はあんな演技をする人では無かった。まるで別人のように、夜風さんのような演技をする。

他の役者もそうだ。舞台である程度有名な人も居たが、あそこまでレベルが高かったかと聞かれれば否だ。全員が感情の籠った表現力の高い演技をする。そして観客も舞台での感情に合わせて涙を流したり、笑を零したりする。

その中心に居るのは、彼女だ。この舞台を発案してアリスさんに絶対成功させると叩きつけた少女。私が振り向かせたい少女。頭鬼恋歌。

アキラ君が羨ましい。彼女は他の役者を伸ばす演技をする。それは私を天使として更なる高みに登らせてくれる筈だから。見るのも勉強になるけど、1番は一緒に共演することだから。

舞台は終幕に近づく。原作では王子さまが星へと帰り、“ぼく”はそれを見送るシーンだ。だけど、アキラ君は引き止めた。

“星の王子さま”を知る人達は困惑する。あれはアドリブか。でも今までの完璧な流れを崩すアドリブは作品の評価を悪くする。

：本当にあれは演技か。アキラ君から流れているのは嘘の涙か。いかないではもしかして本心なんじゃないか。

アリスさんが言っていた、夜風さんのようなメソッド演技をしているせいで、現実に戻って来れないのでは無いか。

そんなことを考えていると恋歌ちゃんがアキラ君を抱き寄せた。そして諭すように語る。離れていても一緒だと。また会えると。そして離れて、王子さまは笑顔で自分の星へと帰っていく。

最後に“ぼく”のその後の話で幕が閉じ、カーテンコールに拍手が鳴り響く。アキラ君は戻ってこれた。これから彼は忙しくなるだろう。

う。何せ本当に主役としての才能が開花したのだから。でも他の役者たちはどうだろうか。この舞台で成功してしまった彼らは、恋歌ちゃんに戻されることなく終わってしまった彼らは…果たしてこれ以上の演技をすることが出来るのだろうか。

舞台が終わって、夕暮れになる。私は巖裕次郎の訃報を報じるネットニュースを見ながら彼を待つ。

「…千世子君、来てたのか」

「うん、来てたよ」

「恥ずかしい所を見られてしまったね」

恥ずかしいどころか、あの行為は私にとっては万死に値するのだけど、彼が戻ってきたことに免じて殺すのだけはやめてあげる。後で美味しい焼肉を奢らせるのは確定しているけど。恋歌ちゃんも誘おうか。でも、取り敢えず彼に言わなきゃ行けない事がある。

「アキラ君」

「ん？なんだい」

「おかえり」

「…？」

彼は首を傾げる。だけどそれでいいんだ。帰って来ないよりはずっとマシだから。

【幕間】 十六夜／悪魔の集会

公演から3日後、巖さんが乗った霊柩車を見送る。

見送ったあと、葬式場の中で皆とお話をしていると恋歌の所属するスターズの社長がやってきて、私に忠告していく。そして、彼がやってきた。

「はじめまして。私は色々な才能を導くという…ふわふわしたことを生業にしている者です。プロデューサーの天知心一と言います。良い話を持ってきました、夜風景さん」

スターズの社長に先程忠告されたばかりの良い話を持ってきた男はにこつと笑う。それに何故か鳥肌が立つ。

「本当に良い見世物…失礼…良い舞台でした。私これでも、〃星の王子さま〃の方もプロデューズさせて頂いたんですがそれと同等の利益が出ていた。さて、次は私の見世物になりませんか、夜風景」

恋歌も出ている〃星の王子さま〃をプロデューズしたのがこの人？それよりその手にあるのは、雑誌か？雑誌にはつらつらと、私が不幸だと言うことが書かれていた。

「どうして…」

私は彼に問う。彼はにこやかな笑みを崩さないまま、語る。

「私の仕掛けた記事です。これを皮切りに君をスターにしたいと思っています。一緒に頑張りましょう。夜風景さんしょうばいどうぐん」

七生ちゃんが怒り、それを真咲君が止める。でも真咲君も天知心一のことを睨んでいる。私が悲劇のヒロイン、か。彼は私のことを知らないのだろうか。私が今、どれだけ満たされているのかを。

「これは来週発売予定の文秋ですが、心中お察しします。売れ始める芸能人はまずそこで苦しむ。自分の売れ方に。でもね、夜風景さん」
彼は大量のお金を私にばら撒く。私はその札の多さに震える。こんな大金を彼は何処から出したのだろうか。

「悲劇のヒロインは金になる。それでいいじゃないか。芸能もビジネスであることを忘れてはいけません」

まだまだお金が出てくる。私は腰を抜かして、倒れてしまった。

「こんな額は貴女ならすぐに小銭になる。私が君を輝かせよう。この芸能界の誰よりも、君の不幸を武器にして」

……私は不幸じゃない。劇団天球の皆、茜ちゃん、武光君、黒山さん、雪ちゃん、レイとルイ。そして恋歌。おまけだけど千世子ちゃんとかキラ君だつて居る。恋歌とレイとルイが居れば満足だけど。でも皆大切な人達で、私はとても恵まれていると思う。

「他人の人生を手前の物差しで測ってんじゃないぞ。守銭奴天知君」

黒山さんが歩いてくる。天知さんも立ち上がったって2人で睨み合う。

「黒山、君はどうせ夜風の心を尊重しろなどとその悪人面に似合わぬ善人のような言葉を言うのだろう。だけど、私も何より心を最も大切だと考えている」

彼は脳を指さして、言い放つ。黒山は嘲笑するも彼はまた語る。

「ビジネスは人の心の売買だ。彼女がそれを証明した。人の心は買える。簡単に上書き出来ると」

「お前のキャラ設定なんざ、毛ほども興味ねえよ。何が目的だ？」

「野蛮な話し方をするな、黒山。私は夜風さんを引き抜きに来ただけだ」

「質問を変える。お前にしてはやり方がみみっちいんだよ」

「…なんの事ですか？」

私は起き上がる。彼に言わなきゃならないことがあるから。

「ペンあるかしら」

「ええ、勿論。ビジネスマンですからね」

ペンを渡される。雑誌を手に持ち、皆に聞く。

「私と皆って友達よね」

「え？妹みたいに思ってたんだけど」

「ペットだろ。チワワみたいな」

「……こういうのは時間が大切って言うからね」

「阿良也さん、何言ってるんですか…？」

私は嬉しくて雑誌に書き込む。孤独に線を引いて修正する。私には恋歌が居る、ルイとレイが居て、皆が、友達が、いっぱい居るのだから。

「真咲君、私ってオシヤレよね?」

「え?…ユニークではあるけどあれはオシヤレというか」

「オシヤレよね?」

「…おう」

恋歌も大絶賛の私のファッションセンス。もしかしたら私はモデルなんかにも向いてるかもしれない。役者の方が好きだからやらないけど。

「黒山さん、ルイとレイ…恋歌はもちろん可愛いけど。うん、可愛いわよね?」

「頭鬼は全然可愛くねえよ。いや見た目は可愛いかもしれないけど。…まあ、あいつらは寝てりや可愛いんじゃないやねえの」

恋歌は毎日可愛いのに何を言ってるのだろうかこのヒゲ男は。見る目が無いわ。弟妹のためという部分を消す。恋歌やルイ、レイの為ではある。特に恋歌の目を私だけに向けていたいから。私が彼女の隣に立っていたいから。だけど今はお客さんの為にも演じている。

「黒山さん、私って不幸かしら」

答えは当然N。だって恋歌と居れる今が不幸な訳無いもの。

「知るか。それはお前が決める」

黒山さんがそう言ってくれる。だから私は大きくとても幸せと雑誌に書き込む。そして天知さんに見せつける。

「私は幸せ。貴方なんか私に私が不幸かを決められたくないわ。私は、私の好きな役を演じるの。だから貴方とは手を組めないわ」

「…なるほど」

彼は頷くと、手を開く。そこにはドッキリ大成功と書かれている。私は呆然としてしまう。

「…は?」

「だからドッキリですよ。別に企画でも無いですが。お金は本物なので回収します。手伝っていただけませんか。ドッキリですから記事は偽物ですし、彼女が推す女優をからかいに来ただけです」

皆が困惑するのを余所に、天知さんは帰っていく。その後彼に会うことは無く……

「恋歌お姉ちゃん、帰って来ないねえ」

「アメリカに帰っちゃったんだって。前もあつたけど今回は長いね」

『銀河鉄道の夜』と『星の王子さま』は大成功を収めた、金額的には負けてしまったが、それ以上に得られるものが多かったし、私の認知度は大きく向上して行つた。だけど、公演が終わると、恋歌は毎年のこの時期と同じようにアメリカに一時的に帰国してしまつた。以前から理由を聞いても秘密だとはぐらかされてしまう。私も付いていくと言つても断られてしまうのだ。千世子ちゃんと一緒だったら絶対に許せない。

会いたい。彼女が居ないと寂しい。心に穴がぽっかり空いたようだ。■してるのに、■してるからこそ彼女とずっと居たいのにな。

それだけでは無く、私も最近おかしいのだ。精神に違和感を覚える。ルイとレイが写真のように、まるで過去の出来事かのように感じてしまう。スターズの社長から忠告されたようなことが起きているのか。銀河鉄道の夜で死の体験をし過ぎたが故に、おかしくなっているのか。

でも、それでもいい。恋歌が私を見てくれるなら。それで私の演技が進化するなら。早く仕事が欲しい。芝居をしていないと私は駄目なんだ。彼女の隣に居るには女優でなければいけないから。

立ち上がって、ルイとレイを連れて事務所に向かう。仕事を貰いに行く為に。恋歌に私を■して貰えるように。

へりに乗り込む。向かいの席には、制服姿の彼女が座っている。私の大切な商売道具ビジネスパートナーの頭鬼恋歌が。

「ねえ、景ちゃんに余計なちよっかい出したよね」

「これは耳が早い。もしかして見ていたんですか？」

「景ちゃんを輝かせてとは頼んだけど、あのやり方は気に食わないな」
相変わらず闇の深い目だ。それで覗き込まれると引き込まれそう

だ。相手は人を殺す術を持っている。というか殺さなくても人心を掌握する怪物だ。私は大袈裟に肩を竦めて許しを乞う。

「勿論、記事の差し替えと回収はしますよ。こちらも酷い出費だ。へりに印刷、彼女の過去を調べるまで至る所に金を使った」

「当たり前だよ。罰金だと思つて反省してよ。それに私が『星の王子さま』で成功したからプライマイゼロ所かプラスでしょ?」

「お陰様で。星アキラにも主役のオフアアの準備、和歌月千にも仕事を用意しています。まあ、もうあの劇団は使い物になりませんが」

スターズの俳優以外の劇団から収集した者たちは皆演技に取り憑かれ始めた。現実と芝居の境界を失い始めた。全て彼女が行つたことだ。彼女は大切では無いものを容赦無く使い捨てる。だが星アリスとの約束を守るために星アキラを引き戻した。悪魔のように契約は律儀に守るのだ。

「ところで何故彼を使い捨てにしなかったんですか?まさか情が湧いたとか?才能至上主義の貴女が、才能の無い星アキラを元に戻すとは思いませんでした」

「…」

彼女は黙つて、私を見る。否定しないのを面白がつて私は言葉を重ねる。

「そのまさかでしたか?いや驚きましたね。貴女が夜風景や百城千世子以外の人間を大切にしようとするなんて。熱愛でしたら任せてください。お金になりそうであれば売り出します」

「そんな訳無いでしょ。アリスさんにスターズの看板を汚さないつて約束したのと、いつか彼でも役に立つかもしれないから残しただけ」
「そうですか。残念だ。炎上商法は意外と売れる」

その分飽きられるのも早く、嫌われるだけというリスクもあるが。

「…そう言えば、私、公演が終わったらアメリカに少し戻るから、飛行機の手配よろしくね」

「おや、生まれ故郷に?なにか?」

「そろそろ命日なの。でも多分その日に行けないからちよつと早く行くかと思つて」

彼女の家族は誰もまだ死んでいない。彼女の親類も夜凧家以外存在せず、命日が近い者もない。疑問を口に出してみる。

「誰のですか？」

「分からない」

「…？」

分からないとはどういうことなのだろうか。顔を覚えていない親類か？いや、だとすれば彼女は容赦無くそれを切り捨てるだろう。そんな情を彼女は持っていない。それに覚えていないのでは無く、分からないと彼女は言った。

「取り敢えず学校に休みを取る根回しよろしくね。心一さん」

飛び立つ前にへりから降りて、去っていく。後で彼女のマネージャーをアメリカに追わせておこうと心にメモし、新しい事業を考え始める。彼女の演技は非常に金になるし、今回の件で認知度を高めた。

「楽しみだ」

飛び立つへりで笑みを浮かべる。

【幕間】 星に昇る／咲いた花の名は

千世子君の様子がおかしい。正確には「星の王子さま」の公演が終わってからだ。何か出来事があったかと問われれば、恋歌君がアメリカに一時帰国した事くらいか。でもそれが彼女の様子がおかしいことに結びつかない。

「もしかして千世子君は…」

「私がどうしたって？」

事務所のソファに座っていると、後ろから千世子君の声が聞こえる。体をビクツと震わせて、後ろを向くと笑顔の千世子君が居た。

「い、いや…」

「アキラ君、私に隠し事出来ると思ってる？」

「…様子がおかしいな、と。仕事に支障は無いようだけど、仕事以外では心ここに在らずだなと」

「そう見える？」

「ああ…特に恋歌君がアメリカに行ったあたりから」

今度は彼女がピクつと身体を震わせた。満面の笑みから、僕だけに見えるように少しだけ拗ねた顔を見せる。ソファに腰を掛けて彼女は少し不機嫌そうに言う。

「恋歌ちゃん、私にアメリカ行ってくるねとしか言わずに行っただよ。酷いよね」

「恋歌君がアメリカに行くのに、なんで千世子君が同伴するんだ？」

「……」

逆鱗に触れた気がする。慌てて話を変えようとする、そう言えばと千世子君が手を鳴らす。

「アキラ君、恋歌ちゃんに何かプレゼントあげたでしょ」

「え？あ、ああ…彼女、腕時計を持っていなかったようだからね。遅刻しないようにって意味と公演でお世話になったから」

「異性への時計プレゼントの意味って知ってる？」

「…？知らないが」

「同じ時を過ごしたい、だよ」

……冷や汗が止まらない。胃痛がする。千世子君は激怒している。それはそうか、同僚で友人とは言えスキャンダルの種を撒いた僕に彼女が怒るのも無理は無い。

「随分お洒落なプレゼントだね」

「これは皮肉だ。これは謝罪すべきだろう。」

「そ、その……」

「まあ、私もプレゼントあげたけど」

「そうなのか。でも千世子君は何故？」

「アキラ君を連れ戻してくれてありがとうってプレゼント」

「…その節はすまなかった」

「星の王子さま」初日に僕は役に吞まれかけた。二度と現実に戻って来れないところを、恋歌君に救われた。そのお礼も兼ねて、時計をプレゼントしたのだ。異性へのプレゼントは気を使うんだな。覚えておこう。」

「千世子君は何をあげたんだ？」

「チョーカー。首に巻くやつだよ」

「流石に分かるよ…チョーカーのプレゼントにも意味があるのかい？」

「あるよ。貴女と繋がりたいって意味」

「成程、仲良くなりたいたいということか」

「…そういうことだよ」

タメになるな。プレゼントの中身にも意味はあるらしい。今度調べてみようか。母さんへのプレゼントとかで変な物を渡さないように。」

時計を見るとそろそろ仕事の時間だ。僕は立ち上がる。

「もう仕事かな？」

「ああ、星の王子さま」のお陰か。僕を起用してくれるオファーが増えてね。君ほどじゃないけど仕事には困ってないよ」

「そっか。気を付けてね」

「ありがとう。それじゃ、また」

僕は千世子君と別れて、駐車場の僕の車に乗り込み、現場へと向か

う。

お世辞にも良いと呼べる演技じゃなかった。声は震えていたし、感情のままに言葉を吐いていた。いつもの俺なら完璧を求めていた。『自分』なんて要らないと殺していた。だけど夜風は俺の言葉を求めていた。…後悔はしてない。反省はめちゃくちゃしてる。

「やるじゃねえか、真咲。最高にダセエ芝居だった」

楽屋に戻ると、亀太郎に背中を叩かれる。俺は憎まれ口を叩く。

「痛てえよ、亀。ダセエ芝居なんざ、本当はしたくなかったっての」

「カッコつけてるお前より全然良かったけどな。素っ裸だったわ、確実に」

「は？何言ってるんだお前」

「確かに素っ裸かも」

「うんうん、あれは童貞」

「待て、お前ら好き勝手に言い過ぎだろ!？」

亀太郎の馬鹿な発言に冷たい目を向けていたら、七生さんや他の団員にも好き放題言われる。なんなんだこいつら、褒めたいのか貶す…とは違うけどおちよくりたいのかどっちかにしろよ！多分言ったらおちよくられるだろうけど。

「…源真咲」

メイクをしている阿良也さんに初めてフルネームで正しい名前を呼ばれる。俺の名前を一切覚えていなかったあの人が。

「君が最初、巖さんに連れられてきた時はどうしてか分からなかった。大した匂いもしないと思っていた。そう決めつけてしまっていた。悪い癖だ。君の芝居は本当に素晴らしかった」

こんなに嬉しいことがあるか。自分よりはるかに優れた役者に自分の演技を褒められるのがこんなに嬉しいのか。

その後、色んなトラブルがあっただけど乗り越えられた。そして、舞

台は幕を閉じ、巖裕次郎の生も幕を閉じた。

稽古が一段落着いたので、武光と茜さん、夜凧のグループにメールを返しておく。そうしたら亀太郎が俺の肩に手を回して、面白そうにからかってくる。

「おいおい、真咲い。暇だからってスマホで出会い系か？」

「な訳ねえだろ。ちよつとメールだよ」

「女か？男か？」

「どっちも」

「え、そういう…？」

「お前、まじでその口縫ってやろうか」

こいつ、本当に面倒臭いな！俺は近くに居た七生さんに押し付けようとする。

「七生さん！こいつどうにかしてくださいよ」

「七生は俺の味方だぜ」

「少なくともお前の味方ではねーよ」

それだけ言うとストレッツチに戻ってしまう。阿良也さんに押し付けるか、と思いい周囲を見渡すが見当たらない。

「あれ、阿良也さんは？」

「帰ったけど」

「は？」

「だから帰ったけど」

相変わらず自由が過ぎるだろ、あの人。いや、この劇団の奴らはみんな自由に楽しそうだ。俺は前までそういうのが嫌いだった。けど今は、まあ、そういうのも悪くは無いかなど思った。勝手に帰られるのは困るけどな！

【幕間】愛の天使

収録が終わった後、私はマネージャーの車に乗って、足早に帰宅する。今日は恋歌ちゃんがアメリカから帰って来る日だから。彼女を私の家に呼んだのだ。夜風さんの家に帰る前に寄るように言い含めた。

「…まあ、少しの抜け駆けくらい許されるよね」

気分が高揚しているのが感じられる。マンシヨンの前に彼女を見つけて、私の気分は最高潮に達する。

「恋歌ちゃん」

浮かれた気持ちのまま、話しかける。彼女と今日は何しようか、なんて浮かれる。彼女は私の呼び掛けに気付くと顔を向ける。その顔を見た途端に私は浮かれていた気持ちが急速に沈んでいくのが分かる。どうして、泣いているのか。沈んだ気持ちが怒りへと変わる。彼女を泣かせた奴がいる?…私の恋歌ちゃんを?

奥歯を噛み締めて、ギリツと音が鳴る。そんな不埒者が居るなら始末しなきゃね。

取り敢えず、ハンカチで彼女の涙を拭いてあげつつ、理由を問う。

「どうしたの?その顔」

「…千世子ちゃん」

唐突に抱きつかれる。今までの親愛からのハグでは無く、纏るようなハグ。まるで自分の存在を確かめるかのようにぎゅつと強く抱き締められる。

…こんな状況なのに頼られて嬉しい自分が居て、最悪だと思う。泣いている彼女を見た時に怒りだけじゃなくて可愛いと思った私は最低だと思う。

優しく抱き締め返す。頭を撫でて、部屋に行こうと促すと彼女は頷いて手を握ってくる。可愛い、襲いたい、この気持ちにつけ込めば私を見てくれるんじゃないか。

彼女は玄関でまた抱き着いてくる。私も抱き返しながら鍵とチェーンを掛けておく。この後の展開を予想し、私の理性と本能が争

い始める。私の理性がこう言う。

『襲うのです、千世子。彼女の心につけ込むのです。彼女が夜風景の家に帰ってしまえば、このようなチャンスは二度とありません。さつさとキスして押し倒すのです。玄関でやりなさい』

：却下。可愛い彼女を私の部屋でめちやくちやにしたいのは同意できるけど、玄関は恥ずかしい。というか、心につけ込めるのかどうかも分からない。私の本能に聞いてみる。

『…恋歌ちゃん凄くいい匂いするねこれ最近新発売した香水の匂いだよねいつもは子供っぽい彼女が香水っていう少し大人なアイテムを使ってるのに胸が高鳴るって言うかこの香水を付ければ彼女とお揃いじゃない？泣いてる恋歌ちゃん凄く可愛いいつも笑顔で私を幸せにしてくれるけど泣いてる彼女は新鮮味があるし性癖だよね好き大好き襲いたいこの体勢ならいけるキスしてベッドに連れ込もう彼女の傷を癒しながら愛してあげようよ』

駄目だ、私の本能は使い物にならない。オタク特有の早口になってる。句読点が無いだけで本当に文章って読み辛い。

まずは話を聞こう。もし彼女を泣かした奴がいるならお仕置が必要だ。まさかとは思うけどアキラ君とかだったらどうしようか。もしそうだったら、どんな殺り方でお仕置しようかな。

「恋歌ちゃん、落ち着いた？」

「…ん」

彼女が離れるのが名残惜しい。彼女の顔を見ると、まだ少し涙が出ているみたいだ。：おかしいな、胸が高鳴ってしまう。好きな子の笑顔が好きなのは勿論だけど、泣いてる好きな子は：凄く可愛い。守りたくなるし、虐めたくもなる。愛が抑えられなくなりそう。私の理性も本能もGOサインを出し始める。

『行くのです、千世子。ほら押し倒すのです。この部屋の防音対策は完璧です。玄関ですから少し音が漏れるかも知れませんがそれもまたオツと言うもの…』

『可愛い虐めたい夜風景に渡したくないこんな状態で帰したらあの女に食われちゃう私が先に彼女の初めてを貰うんだからダメ早くしよ

うよこれはマーキングだよ恋歌ちゃんに私の匂いを擦り付けてあげよう』

「うーん…：我ながら酷いなあ」

「…？千世子ちゃん？」

ずっと黙っていたからか、不安そうに手を握ってくる。…え、可愛い。あざと過ぎるくらいに可愛い。

私は高鳴る鼓動を抑えつつ、笑顔で部屋に連れていく。これももしかして誘われてるのかな、据え膳食わぬは男の恥ってやつなのかな。

ソファに座らせて、彼女に聞いてみる。

「それで、どうしたの？泣いてたみたいだけど」

「…あのね。分からなくなっちゃったの」

「…？」

「私の中にあつた望みが消えたの。景ちゃんと同じ舞台に立つのが望みだった筈なのに、彼処に行ったら無くなっちゃった。王賀美陸に会ったら、『私』が保てなくなったの」

辛そうに、吐露する。夜風景と同じ舞台に立つのは聞き捨てならないが、それより今は彼女だ。彼女はこんなに幼い顔立ちだったか？確かに元気で自由に振る舞う姿は幼い子にも見えなくはなかったけど、今の彼女は本当に小学生の様だ。

「千世子ちゃん、どうしよう。私どうすればいいの？このままじゃ、愛されない。千世子ちゃんにも景ちゃんにも愛されないよ…：わかんない、私ってどうやって笑ってた？私じゃ、愛されない。早く『私』にならなきゃ行けないのに思い出せないの」

私の手を握って青褪めた顔で聞いてくる。私は何も答えられない。ああ、やっぱり彼女も仮面を被ってたんだ。私とは違う。強くある為のものじゃない、弱いのを誤魔化す為の仮面。これは似ているようで違う。だって彼女は自分の弱さから目を背けた。弱さを背負うのではなく、目を逸らしてしまったのだ。

「アメリカで王賀美陸にまた出会って、分かったの。『私』じゃ敵わないって。だってね、私偽物だから。今までそれでいいと思ってきたのに、思い知らされたの。あれが星^{スター}なんだって。ひと握りの選ばれた

人なんだって。景ちゃんも千世子ちゃんもきつとそういう人たちなんだ。私はいつも…出来損ない」

彼女は苦しそうに胸を押さえる。悲痛な表情を浮かべる。これが本当の彼女、か。私は黙って彼女の言葉を聞く。

「私は今まで人の望みを聞いていれば良かった。産まれた時からずっと、ずーっと。だって都合のいい存在なら皆に好かれるから。なのに急に望みが分からなくなったの。これからどうやって生きていけばいいの？どうすれば愛されるのかな……」

…私は何も答えられない。だって私は彼女じゃないから。痛みを和らげることは出来るかもしれないけど、根本的に治すことは出来ない。

「…もう、演じられないの。だから役者を辞めるね。私なんか居なくても、さほど変わらないから。景ちゃんと千世子ちゃんはきつと愛され続ける。でも私はもう愛されな??」

「巫山戯んな」

「…え？」

腹が立つ。私にも彼女にも。もつと早く彼女に出会っていれば良かった。もつと早く彼女のこころを理解していれば良かった。

私から突然飛び出た言葉に惚けた彼女に告白する。

「私は貴女が好きだよ」

「それは『私』でしょ？私じゃないよ」

違うんだよ、恋歌ちゃん。貴女の言う『私』も含めて貴女が好きなの。だって人間は誰しもが仮面を被ってる。醜い心を見られたくないから、綺麗な自分を見て欲しいから。社交性仮面だったかな。そんなことはどうでもいいけれど。

「知ってたよ。貴女が仮面を被っていることくらい。でもね、そんなの本当にどうでもいい。元気な貴女も好き、悲しむ貴女も好き、演技している時の貴女も全部ひっくるめて愛してる」

「え…知ってたの…？ていうか…その、あ、愛してるとかそういうの…恥ずかしいからダメ……」

凄く顔を赤らめて、あたふたし始める。

それに私はまだあの時の借りを返せていない。初めて激しい怒りを感じ、愛した貴女に。

「役者を辞める？本気で言ってるの？こんな道半ばで？」

「そう…だよ。私の中にもう望みが無いから。誰にも必要とされてないから」

「じゃあ、私が必要とする。夜風さんと同じ舞台？それもまだ叶えないでしょ。だからそれに追加して。私とも同じ舞台に立つ」

「千世子ちゃんと同じ舞台に…」

「そう。だから辞めないでよ。私、まだ貴女の視線を釘付けに出来ないの。この愛も貴女に伝え切れてない」

まだ愛があるの…？と彼女は赤面する。そういう所が凄く好き。無自覚で私達に愛を与えてくる癖に、与えられると弱い所とか、なんでも好きって言いながらも、野菜を食べる時は顔を顰めていたり、チョコを食べる時は幸せそうにするとか…本当に大好き。

「恋歌ちゃん」

「は、はい…？」

恋歌ちゃんを押し倒す。今日は夜風さんも居ないし、誰の邪魔も入らない。たっぷり彼女に私の愛を伝えてあげよう。二度と役者を辞めるとか、愛されてないなんて言わないようにその身体に刻みつけてあげる。

「ち、千世子ちゃん。これはどういう状態でしょうか…!？」

「んー…教育？」

「何の!？」

「さあ…？これから身を以て体験させてあげるね」

首筋にキスをして、彼女の服に手を掛けようとするとインターホンが鳴る。…配達は頼んでいない。無視して彼女の服を脱がそうとする。

「誰か来てるよ!?!ふあ…!?!そ、そこダメ」

「ふーん…ここ弱いんだ」

ピクっとして可愛い。首筋、本当に弱いんだなあ…力が抜けているから、服は殆ど脱がすことが出来た。インターホンが何度も鳴らされ

る。ドアをガチャガチャする音が聞こえる。煩い人も居るものだ。

「う…あ、だ、ダメだってば！」

「あ」

顔を真つ赤にさせた彼女が服を掴むと走って玄関に逃げていく。鍵とチェーン掛けてるし、逃げるのに手間取る。それに上は裸同然だから逃げるに逃げられない。逃げたお仕置しなきや。

そんな楽観をしていたが、あまりにも動揺していたのだろう。上の服も着ないで外に出ようとする。持ち前の器用さで鍵とチェーンを驚きの早さで開けていく。

「…恋歌？」

「…け、景ちゃん？」

「…夜風さん？」

ドアの前には夜風さんが立っていた。彼女は恋歌ちゃんのあられもない姿を見て、すぐこちらを向く。

「どういうことかしら？」

戦争の火蓋が切られた…気がした。

く、顔を真っ赤にした上着がはだけた恋歌が居た。

…凄く可愛い。耳まで真っ赤になって恥ずかしがってるのを見て、何故かときめいてしまった。上着のシャツが乱れてるのも背徳さが感じられる。

…千世子ちゃんナイスだわ。私ではこんな恋歌を引き出せなかった。これは認めざるを得ない。ちよつとエツチな恋歌を見て私は満たされる。

でも、それとこれは話が別。恋歌に手を出そうとしたのはよく分かったわ。これは処断されるべき重罪。

「千世子ちゃん、恋歌に手を出したのね」

「そうだね。でも夜風さんが臆病だから同棲っていうアドバンテージを一切活かさなかったのが悪いんじゃないかな？」

「っ…！」

その通りだ。何も言い返せず言葉に詰まる。恋歌を大切に想うあまり、手を出せなかった。

「えつと…その、べ、別にあの、そういうことはしてないよ？景ちゃん」
きちんと服を着た恋歌が私の手を握って、そう言う。やっぱり普通の恋歌が一番可愛いわ。取り敢えず、千世子ちゃんへの殺意を抑えて恋歌に笑顔を見せる。

「恋歌、一緒に帰りましょう」

「う、うん」

「…恋歌ちゃん、今日泊まって行かない？何もしないから」

「千世子ちゃん、残念だけど恋歌は私の家が恋しいの」

「夜風さん、勝手に代弁しないでよ。私、恋歌ちゃんに話し掛けるんだけど」

「…恋歌（ちゃん）、どっちの家が良い？」

私も千世子ちゃんも一斉に恋歌を見る。恋歌は目をきよろきよろして、やがて苦しそうに言葉を放つ。

「……ち、千世子ちゃんの家に私と景ちゃんが泊まるのはどうかなあ？」

成程、私も千世子ちゃんも氣遣った答えだ。そういう所が本当に■

おいしい。そうだ、千世子ちゃんの家ならルイもレイも居ないのだから、千世子ちゃんの前で恋歌と■し合おう。

私は満面の笑みを浮かべて賛同する。千世子ちゃんも同じように笑顔で賛同する。

恋歌の■を受け取るのは…私。千世子ちゃんは悔しがっていいわ。いいわ。

普通の幸せ編

普通の高校生の平凡な日常

目が覚めたら、美女2人と寝てた実況プレイ。始めていきます。

取り敢えず、状況を整理しましょうか。恋歌ちゃんが、朝に目が覚めると、夜風景と百城千世子が隣で寝ていました。

…なんで？

しかも2人ががちり腕をホールドされているので身動き出来ません。動けよおおお!?

>貴女は目が覚めると、2人に腕を掴まれており起き上がることが出来ない。昨日は2人のどちらと寝るかで揉めたのを思い出す。

なんでそんなことで揉めてるんですかねえ？（呆れ）女性の心情って摩訶不思議ですね。2人を起こしましょうか。

>貴女は2人に声を掛ける。2人とも眠そうに目を覚まし、貴女の顔を見ると微笑む。

「おはよう…恋歌」

「おはよ、恋歌ちゃん」

…ツスウ…：かわいいいつすね…。勿論、スクショ撮りました。美女2人に微笑まれたら堕ちない訳無いよなあ!?!あ、でも恋歌ちゃんはノケなんで関係無いですけど。

>貴女もおはようと返し、微笑む。

朝食を食べている間に、今回の『普通の女子高校生』編の目的について話しましょう。簡単に言えば、景ちゃんのメソッド演技を安定させる上で必要な居場所作りですね。恋歌ちゃん出来ないのか、というご質問がされるのを見越して先に回答させて頂きます。

恋歌ちゃんでは無理です。そもそも役者という職業である以上、景ちゃんと同じ目線で立つてしまうキャラでは、彼女に『普通』という概念を教えることが出来ません。この編では、ただ居場所を作るのではなく、役作りの為の定義を増やすのも兼ねられているので…

つまり今回、恋歌ちゃんはサポートですね。景ちゃんの『普通』と

いう定義作りを手伝います。その為に映像研究部の朝陽ひなちゃんともパイプを繋げていたんですね。我ながら完璧な流れでは？

＞朝食を食べ終わって、学校に行く時間になる。制服に着替えて、夜風景と共に登校しようとする。夜風景は百城千世子に対して自慢げに話す。

「千世子ちゃんは恋歌と登校が出来なくて可哀想だわ。私は出来るけど…しかも毎日」

「…へえ？夜風さん、煽るね。恋歌ちゃんとキス、1度もしたことない癖に」

「…それとこれは関係無いわ」

「別に？ただ可哀想なのはどっちなのかなあって」

何やってんだこの人たち…話の内容が全然掴めませんね。恋歌ちゃんがモテモテって話ですか？H A H A H A、まさかそんな訳。景ちゃん、早く学校行きますよー？

＞貴女は夜風景に早く行こうと急かす。すると百城千世子が貴女の手を引く。

もう、何なんですか？千世子ちゃん、これから勉強なんですよ。恋歌ちゃん、頭悪いんで授業は寝るか理解出来ないかのどっちかですけど。

＞貴女が百城千世子の方を向くと、キスされる。

「行ってらっしゃいのキス、ってやつかな」

「千世子ちゃん、それは流石に変態過ぎるわ!？」

「夜風さんもすればいいじゃん」

「…っ」

……は？なにこれ、マジでどうなってんだ??いつから百合ゲーやってたっけ…？

昔から何をやっても普通だった。可もなく不可もなく、そんな人生を送ってきた。

そんな人生に彩りを与えてくれたのが、映画だった。始まりが何時だったかはよく覚えていないけど、映画を詳しく調べてから毎日が楽しくなったんだ。特に好きな映画監督は岩井俊二。彼のようにカメラのフレームに現実を映し、美しく魅せたかった。その為に頑張ってバイトをして、カメラまで買った。

だけど結局、そういう理想を叶えられるのは一握りの人間だけなんだ。凡人は夢を見てばかりでは生きていけない。カメラを買っても、結局それで映画を作ったりしないで、のうのうと平穩を享受する。変化が怖いから安定を求める。

進路希望の欄に映画監督と書いては消す。ペンを握る手に力が入り、涙が溢れる。僕だって本当は映画監督になりたい。胸を張って、僕は映画監督になりますって言いたいんだ。でも現実には厳しい。迷った末に公務員と書く。映画監督は売れなきや意味が無い。才能の無いやつが生きていける世界じゃないんだ。

そうやって自分に言い聞かせる。

そうやって自分を正当化する。

そんな時に学祭の準備期間に突入した。先生からは学祭に出なければ最悪廃部もあると言われた。僕も笑って、残念だなあなんて……言えれば良かったのに。

「ま、待ってください。絶対に学祭で作品を提出するので」

僕は馬鹿だ。撮る人も撮られる人も居ないのに何を撮るんだ。僕は必死に考え、そして思い出した。映像研究部の新しい部員でスターズの俳優でもある頭鬼恋歌さんが居るじゃないか。早速、彼女の元へと足を進めていた。今までにない行動力に自分でも驚きを隠せない。2組に辿り着くと、頭鬼さんと呼ぶ。彼女はクラスメイトと話すのを切り上げて来てくれる。

「吉岡君、どうかした？」

「あ、あのさ……ウチの部活、学祭で出し物しなきや行けなくてさ。それで君に出て貰えないかなって。カメラは僕ので撮るよ！」

彼女は少し考えてから口を開いた。

「難しい、かな。お仕事も有るし……」

「そ、そっか。そうだよね…ごめん、お話中に」

スターズの俳優とも為れば、色んなCMに引つ張りだこだろう。それに彼女が出演した作品は軒並み売れていたり、舞台も成功を収めたと言う。そんな彼女が低レベルな素人の映画に出演したりしないか。このまま、映像研究部は廃部だろう。

そう思つて、踵を返そうとすると手を掴まれる。

「私は難しいけど適役が居るんだ。付いてきて!」

「え?あ、うん」

彼女に引つ張られる。着いたのは…ウチのクラス?まさか…

「景ちやーん」

「!恋歌、どうかしたかしら」

「あのね、吉岡君が映画を撮りたいって言うんだけどさ。手伝ってくれないかな」

「恋歌の為なら私、頑張るわ。…えっと初めまして、夜風景です」

…初めまして、じゃないよ。夜風さん。僕は君のクラスメイトだから。でもきつと彼女からしたら、僕は路傍の石なんだろうな。頭鬼さんと喋っている時は本当に楽しそうだ。

「…うん。初めましてじゃないんだ。僕はクラスメイトの吉岡新太。宜しくね」

「あ、ご、ごめんなさい」

「気にしなくていいよ」

謝る彼女に、苦笑しながら頬を搔く。彼女を主演に映画を撮るのは、一番最初の構想にあったことだ。千載一遇の機会を見逃す訳には行かない。…これは天からの巡り合わせだと思おう。

そうして僕の映画作りは始まったのであった。

日が昇る

最悪だ。今日はどこんツイてない。夜風に話しかけられたのも
そうだけど、何よりは。

「へえ…どっちも可愛いじゃん」

リョーマが入ってきた女子、二人を見て笑う。開かれたドアの所に
いるのは吉岡と夜風、そして頭鬼恋歌。私にトラウマを植え付けた2
人が目の前に居る。

「し、新入部員の夜風景です！」

ガチガチに緊張した夜風が自己紹介する。どうやら彼女たちは映
画を撮るらしい。そうだった、忘れていた。私達は映像研究部だっ
た。

…まあ、やらないけど。私が映研に入ったのはリョーマが居るか
ら。別に映画なんて特に興味があるわけじゃないし、勝手にやって欲
しい。

「あつそ…頑張って」

「え、あ、いや」

吉岡が何か言おうとする。でも口を閉じる。吉岡は強く言えない。
それを尻目に私は帰り支度をする。早く家に帰りたい。そうしたら
頭鬼が首を傾げて聞いてくる。

「手伝ってはくれないの？」

「…私、別に興味ないから。映画とか」

少し手が震える。またあの殺気をぶつけられたらどうしよう。で
も、夜風と映画なんて作りたくない。

「…そっか」

案外、彼女は素直に引き下がる。私はホツとして足早に家へ帰る。

次の日、学校の渡り廊下で夜風と吉岡が撮影しているのを見掛け
る。頭鬼あいつは居ない、か。あの二人に絡まれる前にリョーマに話しかけ
る。

「Uターンしよ。関わりたくないから」

「…ん」

少し時間が経って戻ってくると、まだ撮っている。そんなに映画と
いうのは価値があるものか。見てる分にはいいけど作るのとかダル
そう。

2人の様子を見てみると、夜風の顔が真っ青になって震え始める。
汗もかいているようだ。彼女が嫌いな私ですら心配する程。
腰を抜かしたように倒れ込むと誰も居ない場所を指さす。

「に…逃げて」

迫真の顔で私達に訴える。周囲の奴らは何が起きたかも分からず、
彼女の言葉に従って逃げ惑う。

私も、少し距離を取って夜風たちの方を振り向くと彼女は汗ひとつ
かいておらず、フツフに立っていた。

「…おかしいよ」

異常だ。仕草と言葉だけで私達は居ないはずの何かから逃げた。
…怖い。たったそれだけで私達を動かした夜風が怖い。

次の日、クラスの話題は夜風で持ち切りだった。『デスアイランド』
という映画で、百城千世子や星アキラと共演したらしい。元々、美人
なのもあって彼女と親しくなりたかった奴らが話しかけ始めた。
馬鹿にされてるのも知らないで、話しかける。芸能人なんて皆そう
だ。…特に頭鬼恋歌とか。

放課後、雑誌を見ていた私に吉岡が協力して欲しいなんて言い始め
る。私は勿論、断る。

「前も言ったけど私、興味無いし」

「で、でも廃部するんだよ」

「だから？あんただけだよ。この部室に拘ってんの」

たかが映画に何をそんなに熱心になっているんだらうか。

「朝陽さん、私達本当に困っているの。少しでもいいから手伝って
くれないかしら」

「…はあ」

都合がいい女だ。私の事なんか覚えてなかった癖に、どうせ吉岡のことも覚えてなかったのだろう。私のことなんてひとつも気にしてないのに、手伝ってそれ、おかしくない？

「吉岡さ、あんたおかしいよ。芸能人が付いたから調子乗ってるの？」
「い、いやそんなこと」

「あんた、バカにされてんだよ。だってそいつ、私もあんたも道端の雑草程度の認識だよ」

夜風の動きが止まる。凶星だったのだろう。私達をバカにしてる。

「そういうのフツーに分かるから。どうせ、私たちのこと背景とでも思ってたんでしょ？…そんな奴がさ、部活だ、友達だって？…そんなのおかしいじゃん」

「…これからは朝陽さんのこと知りた——」

「アンタら芸能人つてさ。皆美男美女、人生楽しいでしょ。だから簡単に私たちのこと見下す。アンタも、百城千世子も…頭鬼恋歌もさ」

私は帰ろうと、夜風の横を通り過ぎる。だけどドアに辿り着く前に手を掴まれる。私は夜風の顔を睨みつける。

「…何？」

「先ずは、ごめんなさい。そんなつもりは無かったけどお芝居に出会うまでは私は自分のことで精一杯で…自分でも虫のいい話だと思う」

「だから何」

「…本当にごめんなさい。だけど、私の大切な人達の悪口は違うと思うの。恋歌も千世子ちゃんも見下してなんか無いわ」

「…」

少しだけ語気を荒らげて夜風が怒る。

「…そう見えるのがフツーじゃん」

そう返すと彼女は何処かに行ってしまった、吉岡はそれを追いかけて行く。

「…あいつ、フツーにキレルんだ」

またドアが開く。夜風か吉岡が忘れ物でもしたのかと思って、見るとあいつが立っていた。

「こんにちは、ひなちゃん。ちよつとき、お話しない？」

頭鬼恋歌はいつも笑顔だ。その笑顔の下ではバカにしてる筈だ。私はトラウマを抑えて、頷いてソファに座る。彼女も私の隣に座る。

「…あんだ、いつから居たの?」

「んー、ひなちゃんか吉岡君のことをおかしいって言ったあたりから? 入るに入れなくてさ」

「あんたも、バカにしてるんでしょ。私たちのこと。風景かなにかに見えてるんだ」

「…そうだね。あ、バカにはしてないよ? でも本当に皆が演じているようにしか感じられないの。…嫌になるくらいに」

「は…?」

意味のわからないことを言い始める。演じているようにしか感じられない? 彼女は何を言っているのだろうか。

「…まあ、そんなことは置いといてさ。ひなちゃんは景ちゃんのこと嫌い?」

「当たり前でしょ。あいつもあんたも私たちのことバカにしてんだから」

「そっか。でもさ、本当にそうなのかな」

「そうに決まってる」

芸能人は皆、そうなのだ。私達フツの人間には興味が無いんだ。

「これ、余計なお節介なんだけどね。もう少し、景ちゃんに向き合ってくれないかな。もしかしたら変わっていて、今の景ちゃんは貴女と同じフツの女子高生かもしれないよ?…ううん、本当に普通の女子高生なんだよ、景ちゃんは」

嬉しそうにも見えるし、悲しそうにも見える顔で彼女は語る。

「…私と違って景ちゃんは良い子だからさ。きっと仲良くなれるよ」

彼女は立ち上がると、いつも通りの笑顔でバイバイと手を振って帰っていく。

夜風が、フツの女子高生。…向き合う、か。先程の怒りは前の夜風に無いものだった。人の為に怒るのはフツのことだ。少しだけ彼女への考えは変わった気がする。

家に帰って、リョーマと電話する。ベッドの上で他愛の無い話をする。

「あ、切れた」

ナンパがどうこう言っただけで切られた。それと同時にLINEの着信が鳴る。どうやら吉岡から来たみたいだ。訝しがりながら送られてきた動画を見てみる。

そこに映るのは、夏服の夜凧。盗撮動画…？通報するか否かを悩んでいると、夜凧の目が視界に入る。

「…この目が嫌いなんだよ」

夜凧の性格とか、そういうのは分からない。だってまともに会話したことが無いから。でも確かにこの時の夜凧は私を、私達を背景のように見ていた。私も、美人だから先に仲良くなりたいたいなんて邪な気持ちだったのは、よくないと思う。でも…あの冷たい目をされて、私は傷ついてしまった。そこから芸能人は、選ばれた人達は私たちのことを石ころのように思っていると思ひ込んだ。そうやって彼女を悪者にした。

「…木が、枯れてる？」

夏なら葉がついている筈なのに。でも夜凧は夏服で…？

「この頃の私は??」

喋った。じゃあ、これはあいつらが撮ってた映画…!?

「夕飯の献立に、今月の光熱費、妹や弟の学費…恋歌のこととかをずっと考えてた。私のことばかり考えて、学校の皆を見ようとしなかった」

「でも、今は違うの」

「私が恋歌に助けられたみたいなのに、笑顔を思い出させて貰ったみたい…皆は繋がって助け合ってるんだって知ったから」

…ああ、頭鬼の言う通り、彼女は変わったのだろう。目が違う。私を人として見てくれている。

「今度は私からカラオケに誘いたいし、一緒に映画も撮りたいけれど…怒らせてしまうと思うから言いません。…おわり」

あざといしウザイはずなのに、頭鬼の言葉が頭から離れない。

フツの女子高生、か。…本当にそうなのかもしれない。私が見て見ぬふりをしていただけかもしれない。

イライラしていたのは夜風に対してじゃなくて、私にかもしれない。人が頑張っている姿を笑っていたのは芸能人じゃなくて私だったんだ。

「…明日、謝らなきゃ」

吉岡と夜風に言ったことは全て私に当てはまっていた。酷いブーメランだ。

でも不思議と心が軽くなった気がする。認めたら、素直に謝れる。明日が早く来ることを少しだけ願った。

パイプ作りパーペキかと思ったら、ガチトーンで断られた実況です。これ、失踪可能ですか？あ、駄目ですか…

ああああああ!?!どうしてなんだよおお!?!ここは「うん！恋歌ちゃんの為なら！」ってなる所だろ!?!うわああああ!!

はあ、死にてえ…もう、友達とか要らねえよ……

鬱モードはここら辺にしておいて、進めて行きます。景ちゃんたちの撮影を遠目で見ながらやることをやります。まずは、教師に手を回しておきます。

> 貴女は教師に写真を見せる。教師は青ざめた顔で貴女に縋る。

「こ、この写真だけは…！頼む、何でもするから」

え？何の写真か？猿が盛りあつてる画像ですけど。取り敢えずさあ、お前、映研に協力してくださいよ。

「わ、分かった。これ、屋上の鍵と許可証も発行しておくから」

> 貴女は笑って、教師に写真を渡してあげる。彼は逃げるように戻っていく。

脅迫罪？知らない子ですね。脅迫されるネタがある方が悪いと思いませんか？僕はそう思います。写真が1枚なんて言っていないんだよなあ…一生、恋歌ちゃんの為に働いて貰いましょうか。

あ、景ちゃんが部室から出てきましたね。ひなちゃんと喧嘩した後ですね。取り敢えず、ひなちゃんのやる気を少しでも稼いでおきましょうか。

＞貴女はドアを開けて、朝陽ひなどと会話する。少しずつ、彼女の心を惹き付けるように調整する。

？なんですかね、このログ。最近、訳分からんログが増えて、投稿者は困ってます。バグかな？

今日はめちやくちや短いですが、次回はCM撮ってからまた日常に戻ります！久々の撮影ですね。共演者は誰なんでしょうか。

踏み躪られた花

今回は前回でも言った通りCM撮影から入ります。さて、共演者は誰かなあ？

＞貴女が現場に足を踏み入れると、後ろから気配を察知する。百城千世子の気配だ。『気配察知』Lv3の習熟度が上昇した。

あつ……（察し）。今回は千世子ちゃんですか。CMの内容とか共演者とかスキップしがちなので全然分からないですよね…

「恋歌ちゃん、こんにちは」

＞貴女が振り向くと、笑顔の百城千世子が立っている。貴女もこんにちは、とにこやかに返す。百城千世子は自然に手を繋ぎ、指を絡ませてくる。貴女は心拍数が上がるのを感じる。

うえ!?!ちちちちち千世子ちゃん!?!そ、そんな破廉恥なこと誰に教わったんです!?!星アキラか!?!あのむつつりスケベめ!!良くやった!!でも『暗殺の天使』ルートでは全く必要の無いくらいの好感度です!!やめてね!!

＞貴女が百城千世子と話していると、星アキラが現場に入ってくる。

「すまない、少し遅れた」

「大丈夫だよ。もつと遅れても良かったくらい」

「いやそういう訳にはいかないだろ…」

＞貴女はこんにちは、堀先輩と挨拶すると星アキラは苦笑して、こんにちはと返してくる

どうやら千世子ちゃんとアキラくんが共演者の様ですね…

…え、なんかめちやくちや豪華じゃないですか?確かこれさつき確認した感じだと、チョコレートCMですよ?

＞貴女は何故こんなに豪華な面子なのかを2人に聞いてみる。

「ああ、確か今年のCMはストーリー展開にするらしくてね。僕と恋歌君が兄妹、千世子君が僕の彼女っていう設定だったかな?」

「うん。そうだね。あつ、安心してね恋歌ちゃん。私、アキラ君に一切興味無いから」

「それは僕が傷付くんだが!？」

いや、いくらなんでも豪華すぎるといっつか何かの意志を感じるとうか：誰かキャスティング弄ってません？

「そう言えば最初は恋歌君と僕が恋人関係だったらしいね」

ふうん：流石に恋歌ちゃんとアキラくんでは釣り合わないと思っただ監督が千世子ちゃんを入れたんですかね？成程、魅力値が足りないと交代とかあるんですね。メモしておきましょう。

取り敢えずCM撮影は順調過ぎるくらいに進んでいます。千世子ちゃんに恋歌ちゃんが居たら、撮影に殆ど失敗することは有りませんね。しかもアキラくんも中々演技力が高くなっています。

＞貴女は星アキラにお兄い、と呼びかける。星アキラが振り向くと貴女は少し無愛想に包装されたチョコを、彼に突き出す。

「ああ、ありがとう」

＞笑顔で星アキラが受け取ると、貴女はじゃ、じゃあねと言って立ち去る。最後に渡せて嬉しそうな貴女の顔が映る。

はい、これで終了です。一応キャラ設定としては恋歌ちゃんが血の繋がりの無い義理の妹で、兄であるアキラくんには好意を持っているけど、血が繋がっていると思っっている恋歌ちゃんは好意を隠している感じですよ。ちなみに兄の彼女である千世子ちゃんとは親友です。：うん、これチョコレートのCMだね？ドロドロの昼ドラじゃないよね？

なんかとてつもないCMを撮ることになってしまいましたけど、評価はSでした。千世子ちゃんの演技も見れたので経験値を多く稼げました。

では撮影も終わりましたし、日常パートに行きます…

＞貴女は百城千世子に呼び止められる。

：日常パートに行きます。

＞百城千世子が少し息抜きにバナナジュースでも飲みに行かないかと誘ってくる。

日常パートに！行きたい！です！

＞貴女は考える。今から学校に行っても、勉強する時間はあまりない。ならバナナジュースを飲みに行っても良いのでは？

お前、勉強しろよお!! 『知力』Lv1だぞ。小学生レベルの癖に何サボろうとしてんだ。いやもっと低いか？？兎も角、学校に行きませんか!?

＞貴女は満面の笑みで行く、と答える。

…えっとこれもまた日常パートになりませんか？ほら、女子高生の日常ってことで…

取り敢えず、恋歌ちゃんが勝手に行くを選択してしまったので、バナナジュースを飲みに行きます。

＞スタジオから近い場所のバナナジュース専門店に百城千世子と行くと、夜風景と朝陽ひなにばったり出会う。何故か寒気を覚える。

あ、景ちゃんですね。ひなちゃんと仲良くなれたみたいで良かったです。これで居場所作りは殆ど完了しましたね！後は天知さんの仕掛けとりヨーマくんのお手伝いだけすれば、このパートは暇になります。

ただ恋歌ちゃんが謎の寒気を覚えていますね。風邪かな？知力底辺の癖に風邪を引いたのか？

「…恋歌、学校をサボって千世子ちゃんとデートかしら」

「夜風さん、それは誤解だよ？撮影が終わってから、私とバナナジュースを飲みに行こうって話になっただけ」

「そう。じゃあ恋歌、ひなと私と一緒にカラオケに行きましょう？」

「え、え？もしかして、百城千世子…？」

「あれ？私の名前が無かったけど、もしかして夜風さん、私の事省いた？」

「省いた訳じゃないわ。でも千世子ちゃんは忙しいでしょ？」

「今日はもう暇だから。私もカラオケに行きたいなあ？ねえ、いいかな」

「わ、私!?!…べ、別にいいけど」

「ひな!?!」

＞貴女は人数分のバナナジュースを注文し、全員に渡すが夜風景と

百城千世子はカラオケに行くまでずっと喋り続けている。

仲がいいですね。百合SSとか作られるくらいに千世子ちゃんは景ちゃんに執着してますし、景ちゃんも千世子ちゃんのこと意識しますからね。恋歌ちゃんハブられてて可哀想…

「…あの頭鬼、さ。この間のことなんだけど」

>カラオケのドリンクバーを取りに行っていると、唐突に朝陽ひなに話しかけられる。貴女は首を傾げながら、彼女の言葉を待つ。

「あんた達のこと勘違いしてた。ごめん」

ひなちゃんから謝罪頂きましたね。ということはそのそこの関係値になりますねこれは。

「恋歌って、呼んでもいいかな？そつちは今のひな呼びでいいからさ」

>貴女は勿論、と返し2人で笑い合う。

「…恋歌ちゃん、楽しそうだね。私たちがこんなに言い争ってるのも忘れて」

「…複雑だわ。恋歌に友達が出来たことを喜ぶべきなのかひなと仲良く喋っていることに嫉妬するべきなのか…」

『努力は報われる』。そんな言葉が生まれたのはいつなのか。そんな戯言を吐いたのは誰なのか。実際は、『努力は報われることもある』の間違いだ。努力したら必ず報われる訳でもなく、裏切らない訳じゃない。

「おい、リョーマー！大丈夫か?!」

そうじゃなきや、オレがこんな目に遭うのはおかしいだろ。幼少期から野球に打ち込んできたオレが、野球に愛されていると思っていたオレが、肩を壊すなんておかしいじゃないか。

「ねえ、知ってる？野球部の花井君がさ…」

「あー知ってる。肩やったんでしょ？可哀想だよね…」

他人に同情されることが辛かった。何にも知らない奴らから哀れ

まれているが嫌だった。仲間たちに励まされるのが悔しかった。オレの今までの努力は無駄だつて言われてるようで…

気が付いたらタバコとかに手を出して、努力つて奴から逃げていた。部活をやっていた時に気をつけていた体調とかも考えないようにした。

家族も仲間も教師も期待してたのは野球部のエースであつて、オレじゃなかった。野球部のエースに成れるなら、誰にでも期待してたんだ。オレという個人には一切興味が無かつた訳だ。

そう考えると馬鹿らしくなつて、野球なんて…と考えて拳を強く握り締める。本当は諦めたくなかつた。本当は仲間と共に甲子園だつて行きたかつた。

「…なんでオレだつたんだろうな」

才能に胡座をかいてたなら納得出来る。なのに、頑張つていたはずのオレが選ばれて、突然に普通の高校生になつてしまった。憧れにすら手が届かなくなつた。どう頑張つても届かない所まで落ちてしまった。

オレが報われなかつた理由なんて見つからなくて、自棄になつて居た時に…あいつを見かけた。

「おい、お前部員探してんだろ？コーラ買つてこいよ。部室で待つてるからウインウインだろ？」

映像研究部を立ち上げようにも部員が居なくて、困つていた吉岡に話しかけたのは気紛れだ。丁度、コーラが飲みたかつただけだ。他に理由なんて無かつた。

あいつは本当に映画が好きみたいで、オレは部室のソファに寝転びながら適当に聞き流していたが、構わずにずっと喋つていた。その顔は野球をやっていた時のオレに似ていた。好きな物の為に頑張ろうとする奴の顔だつた。

この世には3種類の人間が居て、オレはその中でもクズな人間だ。努力することを諦めた人間。たつた一つの挫折をズルズルと引き摺る愚か者。

なら、他の2種類の人間の邪魔をしてはいけない。…出来ることなら後押ししてやらなきゃいけない。

「で？手助けしてくれんのかよ、頭鬼」

「勿論だよ、リョーマ君」

文化祭で映研は上映を禁じられた。だからオレが何とかしようと思った。撮影には一切参加してないからこそ、ここで何かしなきゃ行けないと思った。

機材のことはよく分からねえ上に屋上の許可も取っておらず必死に考えていたオレに話しかけてきたのが頭鬼恋歌だった。許可証と屋上の鍵をオレに渡し、機材の準備を進める。そんな彼女に準備の手伝いをしながら聞いてみる。

「なあ、頭鬼は…想像出来るか？ある日突然、普通の高校生になっちゃった自分が」

「…」

頭鬼は手を止めて、こちらを見る。多分、こいつや夜風には想像出来ないだろう。今も尚走り続けている奴には分からない世界だから。

「想像出来ねえよな」

「…うん、私には想像出来ないな。私はどんなことが起きても必ず女優になるから。たとえ死んでも私は女優になるよ。だって、千世子ちゃんと約束したからね。一緒の舞台に立つって」

「へえ…？スターズの天使と？」

「うん」

頭鬼は嬉しそうに頷く。機材の用意を終えると立ち上がり、リモコンをオレに渡す。

「これで再生ボタンを押せば、投影されるから」

「ん、サンキュー」

「それじゃあ、私、もう行くね」

そのまま屋上から出ようとした頭鬼が立ち止まる。忘れ物か？と思ったが、そこから動かないので違うようだった。彼女は少し考えてから口を開く。

「リョーマ君、ありがとう」

「…オレは何もやってねえけどな」

「景ちゃん達のために立ち上がってくれたじゃん」

違う、オレはオレの為に動いたんだ。頑張れない奴は頑張ってる奴と頑張ろうとしている奴を応援することしか出来ない。オレは自己満足の為に動いたんだ。

「リョーマ君が景ちゃん達のためにやった事じゃなくても結果的にそうなったんだ。だから、ありがとう」

「…ならお前にも感謝しないとな」

「どういたしまして。後はよろしくね、リョーマ君」

元気に手を振って帰っていく。さて、後は人が集まったタイミングで流すだけだ。

…頑張れない奴でも役に立てることがあるんだな。

だれかにとっての普通

たまに私は神様のような視点を観ることがある。その時は色んな人の事が手に取るようによく分かる。いつもより頭が冴えている気がする。その代わりに他人が他人モブキャラのように感じられる。この世界が舞台ゲームのように感じられる。

つまり、私の視点と「私」の視点には乖離が起きる。多分、それが私の感情がおかしい理由。私と「私」の感情が一致してないから、自分に基づいた感情を上手く出せない。

原因は分かっている。

でも、私はそれでもいい。治さなくていい。だって演じるのに支障はない所か、この視点を中学生の時に得てから演技力が高まっている気さえする。視点が自分から乖離すればするほど、私は女優としての階段を昇る。

それに景ちゃんと千世子ちゃん達と同じ舞台に立てるなら、私の感情なんて些末なものだから。

だから…私なんて要らないんだ。

文化祭当日ですね。それでは実況をしていきたいと思います。

> 貴女は教室の窓から校門を見下ろす。校門の前には大勢の人集りが出来ている。

景ちゃんと恋歌ちゃんの名を天知さん経由で宣伝したからか、原作より沢山の人が来ましたね。これのせいで景ちゃん達は上映不可能になります、そこはもう既に手を打ってあります。

という訳で文化祭を楽しみましょう。恋歌ちゃんのクラスはメイド喫茶です。恋歌ちゃんは文字通り看板娘なので、満面の笑みで入口に立っておきましょう。

> 貴女が入口に立つと長蛇の列が出来る。あまりにも人が多いので整理券を配ったり、列を切らなければならなくなった。

やっぱりメイド喫茶は集客率高いですね。この高校が顔面偏差値高いのも有るでしょうが：

＞貴女が入口で対応していると、百城千世子と星アキラが変装した状態で並んでいることに気付く。

：無視です。なんで居るんですかね？2人とも暇なんですか？？

＞貴女は顔を逸らすも、あと数名で2人は貴女の近くに来るだろう。貴女は自分の姿を見て、笑われることを恐れる。

そこじゃないんだよなあ？恋歌ちゃん。和風チックなメイド服は好きですよ個人的に。でも、そこじゃない。原作だと千世子ちゃんとアキラくんがこの文化祭に来ていませんでした。アキラくんの方は、景ちゃんの撮影を見に来ていましたが千世子ちゃんが来るのはおかしいです。一体何が彼女をそこまで…？

「こんにちは、恋歌ちゃん。その服、可愛いね。でもちよつと、生地薄くない？」

＞百城千世子が貴女に話しかけてくる。貴女は服装を可愛いと言われ、気分が上がる。

「ここってお触りOKなお店だと思う？アキラくん」

「いや、普通にセクハラだと思うんだが…」

＞貴女はお触りOKの意味が分からず、首を傾げる。中に誘導しようとして、星アキラと一緒に回りたいたいと言われる。貴女は星アキラに冷やかしながら帰ってくれ、と返し、百城千世子には後で一緒に見回ろうね、と話す。

「僕に対しての扱いが雑じゃないか!？」

「恋歌ちゃん、今一緒に回りたいたいんだけど…ダメかな？」

アキラくんに優しい扱いとか天地がひっくり返っても有り得ません。イケメンは氏ね。…ふむ、千世子ちゃんに誘われましたね。でも別に、後で良いですかね。上目遣いとかされてもダメですよ。ちよつとぐらつきましたが、金を稼ぐ方が重要です。

＞貴女が首を横に振ると、百城千世子は少し拗ねたような目をして、星アキラと中に入っていく。

それにしても驚きましたね。良い関係値にあると文化祭に来ると

かあるんですね…

「れ、恋歌ちゃん…あのさ」

＞貴女はどこか怯えたクラスメイトに話しかけられる。どうやらシフトを代わって欲しいらしい。

ん？1時間くらい延長でしょうか。あと20分くらい恋歌ちゃんのシフトがある筈ですけど。

「えっと誘導係は私に任せて、回ってきて？うん、もうずっと回ってきていいから！あと、メイド服は脱がないでいいから！」

＞貴女は必死な顔をしたクラスメイトに、店内に居る百城千世子と星アキラの方に押される。貴女は、よく分ならず百城千世子の隣に座らせられる。

「し、失礼します」

あ、クラスメイトさんが行ってしまったね。というかこれどういうこと…？取り敢えず切り替えて、千世子ちゃん達と回りますか。その後は天知さんと合流して、最後に景ちゃんと合流します。

＞一通り見終わり、一般公開が終了する。貴女は百城千世子と星アキラを見送る。見送ると、校門近くに止まっている車の後部座席の窓をノックする。窓が開くと、天知心一が相変わらず胡散臭い笑みを浮かべて座っている。

「百城千世子が来るとは思っていませんでしたね。この情報を流せばもっと観客が来たのでは？」

いや、走者も全然把握して無かったです。というかあれ以上の観客は流石に学校側も中止する可能性があります。それだと今まで用意してきた景ちゃん専用イベントがパアになります。天知さんの金儲けは諦めてもらいましょう。

＞貴女は今日の朝より観客が来てはパニックになりかねないと天知心一に伝える。

「…貴女がそう言うのであれば。ところであの情報は役に立ちましたか？」

猿が盛ってる写真ですね。まあ、あれ天知さんが手配した女に引つ

かかった教師を激写したので自演みたいなものなんですけど。

＞貴女が頷くと、天知心一も満足そうに頷く。

「夜風景はいい商売道具だ。彼女は私の宣伝以上にファンを離さない魅力を持っている。…それに勝つのは貴女でも難しいのでは？ 貴女のは魅了では無くて洗脳に近い。洗脳は解けてしまえば、一気に落ちる」

何言ってるんだこいつ…（呆れ）。恋歌ちゃんに洗脳なんて出来るわけないだろ、いい加減にしろ!! 景ちゃんに演技力と魅力値で負けているのは自覚してますが、技術力で何とかカバー出来ます。羅刹女編までは、ですが。その前に仕留めなければなりませんね。

＞貴女は分かっている、と答える。天知心一は分かっていたらいいのですが、と言うと窓を閉める。

さて、天知さんと喋っているといい感じに時間が潰れますね。後夜祭は景ちゃん達のところに向かいましょう。

＞貴女は後夜祭でフォークダンスしている者達を通り過ぎて、校舎の夜風景達のところに向かう。

「…恋歌」

景ちゃんがだいぶ落ち込んでいますね。友達と撮った自分の映画を見せたかったのに、自分のせいで上映出来なかったと思っているからでしょう。あと少しで元気になりますが…少しだけあれですね。なんて言えばいいのでしょうか。

…ごめんね、景ちゃん。

＞外がざわめく音が聞こえる。花井遼馬が映写を始めたのだろう。吉岡新太が気付き、夜風景が見てくる、と言って走っていく。

さて、リョーマちゃんと景ちゃんが普通の高校生についての話をしてる間は暇ですね。

＞貴女は校舎に映写された映画を見る。最初はきちんとしたカメラで撮られた映画だ。だが暗転するとスマホ動画に転換する。夜風景と朝陽ひな、貴女がご飯を食べている所が映っている。

…ああ。良いですね。うん。青春って感じで。

＞貴女は想起する。もし自分が普通の女子高生だったら、自分はど
うなっていたのか。夜風景や朝陽ひなど一緒に登校したり、お昼を食
べたり色んなことをしていたかもしれない。

＞もしそうだったら、きつと幸せなんだろうなと貴女は思う。と
言っても、今も幸せだ。役を演じるのは楽しいし、夜風景や百城千世
子、星アキラと過ごす日々も好きだ。

＞だけど、私ガもし普通だったなら。心の底から笑って、友達と喧
嘩して、誰かと恋に落ちる。そんな幸せもあったかもしれない。もし
もは有り得ないけど、有り得ないからこそ尊くて、私は少しだけ泣い
てしまう。こんな感情は知らない。人間が泣くのは悲しいときだけ
じゃないのか。

＞朝陽ひなも吉岡新太もエンドクレジットを見て、涙ぐんでいる。
：ああ、人は嬉しくても泣くんた。知らなかった。こんなにも綺麗な
涙があるなんて、私は知らなかった。

：映画、終わりましたね。ちよつとしか出ていないのに新太くんは
エンドクレジットに出してくれたみたいです。彼がこの映画を作ろ
うと言わなければこの章は始まりませんでしたから、後でお礼を言っ
ておきましょう。

これにて『普通の女子高生』編、終了です！お疲れ様でした。

私にとっての普通

■には限りがある、らしい。私はそんな事無いと思うけれど、恋歌にとつてはどうか分からない。だからこそハッキリさせないといけないのだ。私が恋歌を■しているかどうか。

文化祭も終わり帰宅する道の途中で、私は立ち止まる。隣で歩いていた恋歌が、立ち止まった私を不思議そうに見ながらも私を待つてくれている。

そんな彼女を見て、私は幸せな気持ちになる。私は…恋歌を、愛、している。ずっと前から自覚はしていた。けれど言葉にすることを恐れていた。父あいつのような軽い言葉になってしまうんじゃないかと怖かった。

でもいつまでも逃げていたら、千世子ちゃんに奪われてしまう。その方が怖い。私の傍から恋歌が居なくなるなんて想像出来ない。それだけは嫌だ。

「景ちゃん？」

今、心配そうに私を見てくれる貴女が好き。あの時、私を怒りから救ってくれた貴女が愛おしい。演じる時、普段と違う冷たい雰囲気、貴女も大好き。

色んな恋歌が居て、その中でも私を見てくれる貴女を一番愛している。

千世子ちゃんじゃなくて、私をずっと見ていて欲しい。

「恋歌、私は…貴女のことか」

思わず、恋歌のことを抱きしめる。私の心臓の音が煩い。言わなきゃ、ダメだ。逃げてはいけない。私は貴女に伝えなきゃいけない。

「私は恋歌のことを愛しているわ」

言ってしまった。体が熱くなって、心臓の鼓動も先程より煩い。もしかしたら嫌いと言われるかもしれない。けど、それでもいいから私の本心を知って欲しい。

私の全てを貴女に知って欲しいの。

「…あ、愛しているって…あの愛、ですか…？景ちゃん」

抱きしめているから、恋歌の横顔しか見えないけど顔が真っ赤だ。耳まで赤く染めあげて、動揺している。そんな姿が愛おしくて仕方が無い。

「ええ、恋歌。愛してるわ」

愛を抑えられない。愛していると言うだけで、理性のタガが外れそうになる。恋歌に知って欲しい。私がどれだけ貴女のことを見ているか。愛しているかを。

「け、景ちゃん、嬉しいけどね!?その…本当に…なんで、みんな…恥ずかしくないの…?」

愛してるという言葉に弱いのか、口をパクパクさせては恥ずかしそうに私の腕の中で、もじもじと動く。その様子が可愛らしくて、彼女の顔を両手で包み、私の顔を近づける。

「あれ、凄い偶然だね。何してるの?」

恋歌にキスをしようとした瞬間、背後から聞こえる可愛らしくも憎らしい声に邪魔される。ゆっくり後ろを振り向くと、笑顔の千世子ちゃんと困った顔のアキラ君が立っていた。

「その…邪魔するつもりは無かったんだが」

「告白して、私より優位に立ったと思っただけ…残念。私はもう告白を済ませてるし、今日だってメイド服デートを済ませたよ」

メイド服デート!?恋歌には恥ずかしいから来ないでね、と言われ、私は私で映画を上映出来ずに落ち込んでいたのに抜け駆けされて居たなんて。

私は拗ねて、頬を膨らませながら恋歌に問う。

「恋歌、本当なの…?酷いわ、私も誘ってくれれば良かったのに」

「告白の件はスルーなのか…!」

「う、うん…でも本当にメイド服、恥ずかしかったし、景ちゃんに会うなら、もっと可愛い格好したいから……」

「でも恋歌ちゃん、私がメイド服褒めたら喜んでたよね?」

「あ、あれは千世子ちゃんが褒めてくれたからで…堀先輩に褒められてたら即着替えてたもん」

「……なんで僕はスルーされた挙句、罵られてるんだ?」

恋歌のメイド服が見たい。見たすぎるわ。きつと安易な萌えとか言うものではない。写真とか無いのかしら。部屋に飾りたいし、恋歌秘蔵ファイルにも入りたいのだけど。

そう考えた私は、千世子ちゃんにとある取引を持ちかける。

「千世子ちゃん…もしかして、恋歌のメイド服の写真って持っていたりするのかしら？」

「勿論。でもあげないけど」

「…恋歌の中学生時代の写真」

「っ!？」

「体育祭での恋歌は可愛かったわ…私たちの中学校は今どき珍しい、ブルマだったの。こんなレアな恋歌。なかなか見れないと思うけれど」

あまりこのカードを切りたくなかったけれど、メイド服を手に入れる為なら致し方ないわ。更にダメ押しでもう1枚、カードを切る。秘蔵中の秘蔵。

「恋歌の競泳水着姿。撮るのに苦労したけど、恋歌を水泳部の助っ人にする事で達成したの。勿論、水に濡れた恋歌の写真付きだわ…まあ、千世子ちゃんが必要無いと言うならそこまでだけけれど？」

「…」

千世子ちゃんがすつと手を出してくる。私も彼女の手を握り、笑顔を浮かべる。取引が成立した瞬間だった。

「…いいのか？恋歌君」

「うう…恥ずかしいに決まってるじゃないですか…デリカシーの欠けからも無い男は嫌われますよ…?」

「僕からすれば、デリカシーの欠けからも無いのは彼女たちだと思うんだけどな」

愛らしく羞恥で顔を覆い隠した恋歌とアキラ君が仲良く喋っている。その遠慮が無い姿を見て、嫉妬してしまう。いくらアキラ君だからと言って、恋歌がひよんなことで恋してしまうかもしれない。…そうしたら殺すけど。

「恋歌、帰りましょう?千世子ちゃんとアキラ君は置いて」

「…恋歌ちゃん、今日、私の家どうかな？優しくするよ？」

「え!?ほ、星先輩、助けてください」

「ここで僕に振るのは間違ってると思うんだ…千世子君は明日仕事だろ？それに今日はもう遅いんだ。帰るよ」

アキラ君、ナイスだわ！恋歌に手を出したらすぐさま仕留めるけれど、今はナイスだわ！

私があキラ君に称賛を送っていると、千世子ちゃんはこちらをちらっと見て溜息を吐く。

「分かったよ。けど、恋歌ちゃん達を家まで見送るのはありでしょ？

あキラ君が送り届けてよ」

「そうだな。僕の手で3人とも送るよ」

「堀先輩、送り狼ですか？」

「やめてくれ…その話題は危険だから」

家に帰ったら、何しようかしら。恋歌に愛を伝えた事だし、今日はいっぱい愛し合ったり出来るのかしら…？

「あ、夜風さん。分かっていると思うけど、告白したからって急に襲うと嫌われるからね？」

「千世子ちゃんに言われたくないわ…」

明日が楽しみで仕方が無い。あキラ君や阿良也君、真咲君に茜ちゃん、武光君達のような役者仲間に、ひな、リョーマや新太という友達に、恋歌という愛する人が出来た。…おまけに恋敵ライバルの千世子ちゃんも。

こんなにも夜が明けることが待ち遠しいなんて思いもよらなかった。

こんなにも恋が身を焦がすほどの熱量だなんて知らなかった。

…だから、ずっと私を見ていて欲しいの。恋歌。貴女にも私を愛して欲しいの。それが私の望みだから。

【幕間】 人は巡り愛（あ）う 起

「今日も可愛いわ、恋歌」

朝起きたら、恋歌を抱きしめる。これはもう日課だ。恋歌は相変わらず慣れないのか照れている。

「け、景ちゃんの方が可愛いよ」

声の上擦っているのも可愛いわ。なんでこんなにも愛らしいのかしら。

朝食を作る前に、この行為をすることで料理が美味しくなったように感じる。本当はもっと愛を伝えたいけど、ルイとレイに見られるのは恥ずかしいから2人きりの時だけにしようと思っている。

朝食を食べ終わった後、服を着替える。今日は黒山さんに入ってきた依頼とあるバンドのミュージックビデオの撮影をするのだ。久しぶりのお仕事で気分がいい。

「景ちゃん、お仕事？」

「うん、久しぶりのお仕事だわ。ルイとレイも連れていくのだけど…恋歌も来てくれるかしら」

「うん、行くー！景ちゃんの演技、楽しみだなあ」

私が誘うと、玩具を貰った子供のように嬉しそうに頷く。

…やっぱり、貴女が笑うと私も笑顔になる。これが好きだということなんだろう。

事務所には行かずに、駅のホームで待ち合わせする。雪ちゃんと黒山さんが連れ立って来る。黒山さんは恋歌のことを見ると顔を一瞬顰める。黒山さんは恋歌のことが苦手らしい。こんなに可愛い子の何処に苦手になる要素があると言うのだろうか？

「おい、お前が来るなんて聞いてねえんだが」

「墨字さんって私のこと嫌いすぎじゃないですか？」

「そりゃ、危険だって分かっているとところに突撃するのはアホだろ？」

「2人とも、話は中でして下さい。入りますよ」

呆れた顔の雪ちゃんが、睨み合う黒山さんと恋歌を電車に押し込む。私達もそれに続いて、座席に座る。レイが黒山さんに疑うように聞く。

「クロちゃんが仕事するの？本当に？」

「本当に決まってんだろ。ほら、カメラもある」

「盗撮カメラですか？」

「おい、頭鬼。電車の中で盗撮とか危ねえ単語出すなよ」

もしかして、ミュージックビデオは建前で恋歌や私を盗撮する気では…？このヒゲならやりかねないわ。

私は少し身構えると黒山さんは溜息を吐く。

少し電車に揺られていると黒山さんが口を開く。

「なあ、夜風」

「なによ、変態ヒゲ」

「なんだそのあだ名。じゃなくて、お前と、頭鬼、千世子だったら誰が一番芝居が上だと思う？」

「…私と恋歌、千世子ちゃんの中で…」

千世子ちゃんは私より芸歴が長くて、技術にも長けていて、努力だって常に行っている。

恋歌は神に愛されていると思ってしまいうくらい、演技力と技術力に長けている。

隣に座る恋歌の横顔を見る。彼女は何も喋らない。

私は…

「…芝居の上手さを決めるのは私たちじゃないと思う」

負けない。どれだけ劣る点があるとも、私は必ず彼女達に追いついてみせる。恋歌の横に立ってみせる。

「ところで、変態ヒゲはなんで私を撮りたいなんて言い始めたのかしら。やっぱり盗撮…？」

「違えよ…お前を撮りてえと思ったからだ」

「ふーん」

まあ、それなら撮られてあげてもいいわ。別に嬉しくなんてないけど。

本当は少しだけ嬉しいけれど、絶対に黒山さんには言わないわ。絶対馬鹿にするもの。

駅のアナウンスが新宿に着いたことを報せる。それは本番の合図だ。私と黒山さんは席から立ち上がった、用意をする。

「準備はいいな？」

「勿論」

「お前の芝居を世界に届けるのは天知メデイアじゃねえ、この俺だ」

カメラを持った黒山さんが、いつもより怖い顔で笑う。でも私は知っている。こんな顔をしているけど本当は優しい人だということ。

私も微笑んで、ヘッドホンを耳に当てる。

「よろしく、黒山さん」

雪ちゃんがカチンコを鳴らすと共に走る。風が心地いい、音に乗って私の気持ちを自由に表現する。悲しくなったら泣いて、楽しかったら笑う。ありのままの私を皆に見てほしい。本当の私を貴女に見て欲しい。

撮り終わると電車のホームで待っていたルイとレイ、雪ちゃんが褒めてくれる。でも、恋歌が俯いたまま、ずっと無言で不安になる。好き勝手にやり過ぎたのかしら。

「恋歌…その、どうだったかしら？」

恐る恐る恋歌に聞いてみる。恋歌は優しいから酷いことを言わないと分かっているけど怖いものは怖いのだ。

「…綺麗、だった。なんて言えばいいのかな…頭悪くて言葉が出てこないや…無邪気に笑って、踊ってるみたいでさ。ああ、なんでこんな語彙力が無いんだろ。でも、本当に綺麗だったよ、景ちゃん」

やっと顔を上げてくれた恋歌は泣いていた。普段見ない恋歌に動揺する。恋歌が泣いたところなんて演技以外で見た事がないから。

「景ちゃんは凄いなあ…凄いや」

恋歌から抱きついてきて、思わず嬉しくなってしまうけど、泣いている恋歌に疚しい気持ちなんて考えられなくてルイやレイを宥める

ときみたいに頭を撫でてあげる。

数分後には落ち着いて、いつもの恋歌になっていた。

「電車のホームで泣くなんて恥ずかしいなあ」

「恋歌お姉ちゃん大丈夫？」

「大丈夫だよ、心配かけてごめんね」

ルイもレイも心配そうに恋歌を見る。だけど私はそれどころじゃなくて。

「その、恋歌。この手は…」

「…嫌だった？」

「い、嫌じゃないわ」

「良かった、まだ握ってていい？」

「うん…」

恋歌が私の手をぎゅっと握って離さないのだ。恋歌は気にしてないようにルイ達と話をしているが、私はもう茹だつてしまいうくらいの顔が熱かった。

結局、家に帰るまでずっと手を握ったままだった。嬉しいけれど、恥ずかしくて、その後までも恋歌の顔を伺うことが出来なかった。

私は貴女が嫌いだった。私の心を暴く悪魔だと思っていた。

けど貴女を知っていく内に、好きになってしまった。

切っ掛けは水族館でのデート。貴女の笑顔に見惚れてしまった。本当に楽しそうに笑う貴女を忘れられなくて、もう一度見たいと思っってしまった。私の演技で貴女を笑顔にしたいと思ったの。

“天使”として祀り上げられていた私じゃ駄目だと教えてくれた夜風さんには感謝している。仮面を被っているだけじゃ、恋歌ちゃんに追いつけない。恋歌ちゃんを振り向かせられない。

天使になることを目指すようになってから、演技力が異常なほど成長していくのを感じる。でも、足りない。私はこのままだと失墜する。恋歌ちゃんを振り向かせる前に芸能界から消えてしまう。大衆

に飽きられて、私は墮ちる。

なら悪魔と契約してでも私は生き残ろう。貴女の笑顔を私が独り占めしたいから。夜風さんにも、アリサさんにも負けたくないから、超えなきやいけないから。この悔しさと愛を満たすにはこれしかないから。

「だから力を貸してよ」

私の対面で、彼は正直にも胡散臭くも感じる笑みを浮かべている。

「ええ、私にお任せ下さい」

「へえ、随分と自信満々だね？頼んでおいてなんだけど、怖いくらいに自信があるね」

「そうですね、予想していたので」

彼は、紙を私に渡してくる。それは本当に私が来ることを知っていたかのような資料だ。

「…トリプルキャスト？」

「ダブルキャストで夜風景と貴女を戦わせるのも面白そうだが…頭鬼恋歌という役者コウを使わないのは勿体ないので最大限使わせていただきます」

トリプルキャスト。ダブルキャストならば舞台でよく見られるシステムだ。だが、名が売れている俳優なら、普通の俳優なら避ける。何故か。比べられるからだ。少しでも劣るところがあれば必ず言われる。比較対象が近くにあるのはリスクしかない。

「スターズが捨てた女とスターズの天使、そしてスターズの新星の三つ巴…これは売れそうだと、思いましたね」

彼が何を考えているかは明白だ。「金儲けする」。それが彼の理念なら私も似たようなものだ。「売れる作品を生み出す」。なら私が彼の手を拒む理由はどこにも無い。

「よろしく、天知さん」

アリサさんにも報告を終えた翌日の夜、夜風さんと恋歌ちゃんのグループに今から会えないかと連絡する。

公園で立っていると、恋歌ちゃんと夜風さんが来てくれる。彼女達

は知っているのだろうか、あの話を。

「こんばんは、恋歌ちゃん」

「待って、私も居るのだわ!」

「こんばんはあ、千世子ちゃん」

恋歌ちゃんを見て、顔が緩みそうになるけど気合いで引き締める。恋歌ちゃんは嬉しそうに抱きついてきてくれる。まるで犬みたいで可愛い。…首輪とつけてみたら喜んでくれるかな?

頬を膨らませた夜風さんを無視しつつ、ベンチに座る。

少しだけ3人で他愛の無い話をする。恋歌ちゃんとも夜風さんとも。こんな風に笑って話せるのはこれが最後かもしれないから。噛み締めるように。

「…2人はまだ聞いていない?」

「何の話かしら?」

「?」

ふたりとも首を傾げる。天知さん経由で恋歌ちゃんは知っていると思っただけで…

「私たちの次の仕事の話」

「もしかして、共演の話?」

恋歌ちゃんが目を輝かせて聞いてくる。私は可愛すぎて抱きしめなくなる気持ちを抑えて、首を横に振る。

「ううん、共演じゃなくて…トリプルキャスト。私と恋歌ちゃん、夜風さんが同じ役を演じてみんなに見比べてもらう舞台。そして、私が主人公だって証明するための舞台だよ」

私は不敵な笑みを浮かべる。これは宣戦布告だ。夜風さんと恋歌ちゃんの演技を完全に超えた上で、恋歌ちゃんを私のモノにする。

「2人は、興味無いか? 私と貴女たち、誰の芝居が上か」

「…うん、私も知りたい」

夜風さんは真っ先に乗ってくる。恋歌ちゃんは少し戸惑っているようだった。そんなんじや、私に勝てないよ恋歌ちゃん。私は貴女の知る天使じゃ無くなったから。もう綺麗なだけの天使じゃない。

「演目は『羅刹女』。西遊記に孫悟空の敵として登場する風の神のお

話。新しい私を魅せてあげる…覚悟してね、恋歌ちゃん、夜風さん」
天才である2人に私は勝つ。そして、証明する。私は貴女の横に居
るのに足る女だって。

だから、貴女も本気で来てよ。恋歌ちゃん。

【幕間】 人は巡り愛（あ）う 承

俺には気に入らない女が2人居る。

1人は臭いの隠し方が異常な程巧妙な女、百城千世子。スターズの中でも特に技術に優れ、日本において知らぬ者は居ない女優。

臭いが無いんじゃないの、隠していることが気に入らない。あるはずのものを出さないのは、役者として到底理解出来ないから。

もう1人は死臭のような嫌悪感を抱かせる臭いの他にも色んな臭いが混ざった女、頭鬼恋歌。こいつもスターズの女優だが、俺や夜凧と似た演技をする異端。そして百城千世子の技術を兼ね備えた怪物。

最初出会った時は、好印象だった。才能もある、臭いも強烈だ。けれど嗅いでいるうちに吐き気を催し始める。彼女が放つのは死臭のような、では無く死臭そのものだ。

俺の役作りは、自分の世界観を壊して、他人に生まれ変わるというモノだが、彼女は、自分の世界観を作らないことで他人の世界観をこれでもかと詰め込んでいる。自分だけの価値観が生まれた瞬間にそれを殺し、他人として生きている。

彼女の演技は生まれ変わるのではなく、人格の交代に過ぎないのだ。

…マトモじゃない。確かに、俺たち俳優は演劇の為なら命を投げ出す覚悟はある。でも彼女に覚悟なんて無い。機械のように演技を熟す。自分の死を電池が切れる程度にしか思っていないわけだ。

…で、答え合わせをしに来ただけだ」

俺の考えを目の前で座っている頭鬼恋歌に伝える。カフェなんて久しく行ってなかったけど、モンブラン美味しいな。

「…阿良也くんって、頭おかしいよね」

「それ、君が言う？」

モンブランを口に運びながら、頭鬼恋歌の顔を見る。相変わらず笑顔崩さない。頭鬼は、珈琲に砂糖を何個も入れながら話す。

「その答え合わせをして、何になるの？」

「砂糖入れ過ぎじゃない？」

「…このくらいの甘さが好きなの」

「ふーん：答え合わせの意味は特に無い。けど、もしそうなら、あなたはいつか取り返しがつかなくなるよって忠告」

『銀河鉄道の夜』で俺は俺を見失いかけた。あの時は巖さんや夜風、劇団天球が居たから戻って来れたけど。

「私が阿良也くんの言う通り機械だとして、感情が無いんだから君みたいにはならないよ」

そう。感情が無いなら、俺や夜風みたいに戻って来れないなんて事にはならない。だが『星の王子さま』以降の彼女は何処か臭いが消えつつある。死臭は相変わらずだけど、前よりは落ち着いている。だからこそ、危険だ。

「気づいてるんだろ。前みたいに演技出来てないって」

「それは…」

「あんたはもう機械じゃない」

「違う。『私』は、出来てる。『私』は何も変わってない」

ああ、もうブレブレだ。それでももう分かっってしまう。頭鬼恋歌は今更になって自己を獲得し始めている。何が切っ掛けなのかは分からないけど、確実に感情が芽生えている。

そのせいで彼女は演技をする度に苦しくなっている。夜風のような精神力も、俺のような居場所も満足に無い状態でメソッド演技をすれば、当然精神は磨り減っていく。

「誤魔化すなよ。『羅刹女』は降りた方がいい」

憤慨と嫉妬に囚われた羅刹女なんて、今の彼女が演じたら二度と戻って来れない。別に彼女の心配している訳では無い。俺たちの舞台を壊されるのが嫌だからだ。

「…嫌だ。だって、約束したから。千世子ちゃんと同じ舞台に立つって。だって、望まれたから。景ちゃんと同じ舞台に立ちたいって。ならやらなきゃ。そうじゃないと…そうじゃないと…私には」

「じゃあ、俺とも約束してくれよ」

彼女の目を見て、分かってしまった。彼女は絶対に折れない。彼女の生きる意味がそれである以上、俺に何かすることは出来ない。

彼女は俺の言葉を聞いて、首を傾げる。

「約束…？阿良也くんと？」

「ああ」

「結婚の約束以外なら良いよ」

「あんたはタイプじゃないから安心してよ。夜風みたいな方がタイプ」

「景ちゃんに手を出したら、迷わず消すね。死に方も選ばせない」

本気の口調で釘を刺された。まあ、そんなことはどうでもいい。夜風との関係は後からでもどうにでもなる。

「役に吞まれるな」

「…それだけ？」

「それだけ。でも大切なことだ。特にあんたには」

「…：分かった」

きつとこの約束は無意味だ。だけど、やらないよりはマシだろうと思う。少しだけ息を吐き、背もたれに寄り掛かる。

「そう言えば、今日は阿良也くんが奢ってくれるの？」

「俺、金ないけど」

「…堀先輩呼ぶね」

彼女がスマホを弄るのを尻目に、外を見ると雨が降り始めていた。

「それで、なんで僕が2人の分を奢ったんだ？しかも、2人ともさつさと外に出ていくし」

「美少女の好感度が上がりましたよ、堀先輩」

「うん、自分で美少女とか言わないでくれ」

車の中で恋歌君と話す。相変わらず、僕の事を先輩だと思っていない態度だが、少しは気を許してくれているのかなとも思う。公共の場では、普通に対応してくれるし。

いや、待て。それが普通なんじゃないか？僕は毒されてないか？

「明神さんと居るなんてね。何を話してたんだい？」

「あ、それセクハラですよ。パワハラかも」

「え、これでも!？」

「堀先輩って結構デリケートな話、聞いてきますよね。どうするんですか？阿良也くんと熱愛してたら」

「いや、熱愛とか言いながら、嫌悪している顔を見せるのは絶対好きじゃないだろ」

彼女は自分で言って、顔を顰める。それで好きだったら愛が歪んでるとしか思えない。…まあ、愛はそれぞれだし、一概に判断するのは良くないけど。

「つまらない話ですよ。話すまでもないことです」

「そうか。ところで夜凧君の家に送り届ければいいのか？」

「堀先輩の家で」

「ああ、わかっ…」

ん？今なんて言ったんだ？

「すまない。雨の音で聞こえなかった。もう一度お願い出来るかな」

「そんな雨降ってます？じゃあ、もう一度言いますね。堀先輩の家に送り届けてください」

「…」

幻聴か？僕は頭が良いほうでは無いけど、耳も悪くなったのだろうか。最寄りの耳鼻科は何処だったか。

「なんか現実逃避してませんか？別に、堀先輩の事が好きだから家に行くわけじゃないですよ？」

「それはそれで傷付くんだが…じゃあなんで僕の家へ？」

「んー：何となく？あ、ゲームとかしません？」

「僕の家ゲームなんてないんだが」

「じゃあ、映画鑑賞会で」

本当に突拍子も無いな、この子は。取り敢えず夜凧君と千世子君に連絡しておこう。なにか嫌な予感がする。最近よく分からないけど、恋歌君と居ると爆弾を抱えているような気分になるのは何故なのか。

家に着くと、走ってきたのかずぶ濡れの夜凧君と傘を差し笑顔で浮

かべた千世子君が立っていた。雨のせいか、凄く空気が冷えているよ
うな…

「えつとなんで2人はここに？」

「寒いわ、アキラ君。早く中に入れてくれるかしら」

「こんにちは、恋歌ちゃん」

「こんにちは、千世子ちゃん。景ちゃん、これハンカチ。タオルじゃな
いから顔くらいしか拭けないけど」

「ありがとう、恋歌」

「…恋歌ちゃん、実は私も濡れてるんだ」

「ホント？でもハンカチ濡れちゃったし…どうしよう」

「千世子ちゃんは全く濡れていないわ。私の方がびしょ濡れで風邪を
引いてしまう。私を優先して拭いてくれると嬉しいわ」

風邪を引くのは不味いな。取り敢えず、3人を中に入れて、夜風君
と千世子君に新品のタオルを渡す。

「2人ともこれを使ってくれ。新しいモノだから安心してくれ」
「…」

2人とも押し黙って、タオルをずっと見つめる。早く拭かないと風
邪を引くと思うんだが…特に夜風君は濡れているから。

「恋歌(ちゃん)、私を拭いてくれる(かしら)？」

2人同時に恋歌君にタオルを差し出す。恋歌君は困惑して、僕の方
を見るが知らないふりをする。というか、君が頼まれているんだから
僕に振らないでくれ。頼む、君が僕の方に助けを求める度に何故か寒
気を感じるんだ。

「じゃ、じゃあ景ちゃんから拭くね…？千世子ちゃんより濡れている
し」

「ありがとう、恋歌。私、今ずぶ濡れなの。服の中まで。だから…その
…隅々まで拭いて欲しいの」

「うん、任せて。景ちゃん！」

夜風君の隣に居る千世子君がこの世の終わりみたいな顔をしてい
る。というか何かイケナイモノを見ているような気がして、拭き終
わったら呼んでくれと恋歌君と達に残し、外に出る。

あれ？僕の家なのに、なんで僕が外に出ているんだ？

ただ、今戻ったら、確実に服を脱いだ満足気な夜風君とそれを拭く恋歌君、殺意に満ちた千世子君に殺される。

外の雨は強さを増して、僕の身体を震わせた。

【幕間】 人は巡り愛（あ）う 転

俺はいつも一歩、遅い。そして後悔するんだ。もっと早く足を踏み出せば良かったって。

例えば、デスアイランドで百城の技術、夜風の演技力、頭鬼の才能を目にした時。

例えば、夜風が巖裕次郎の遺作『銀河鉄道の夜』に出演した時。

例えば、頭鬼が『星の王子さま』で俳優として名を上げた時。

俺は足を踏み出せなかった。怖かったからでは無い。本当に間が悪かったのだ。偶然別の仕事があったから、偶然他に用事があったから。

そう、誰が悪い訳でもなく。ただ間が悪かった。

「だからこそ、俺は後悔しているんだけどな」

「ふうん、武光でも後悔するんだな」

「む？真咲、それは俺の事をバカにして無いか？」

「いや、そういう訳じゃねえよ。最初のイメージ的には真正面しか見ない奴だったってだけだよ」

「…ん？結局それって」

「…本当にバカにはしてないぜ。良い奴だよお前は」

真正面しか見ない。それが出来たらどれだけ楽か。人である以上、真正面だけを見るのは不可能に近い。どれだけ熱中しようとも、努力しようとも周囲に目を配らなければ人は生きていけない。独りで闇雲に突っ込むだけでは、駄目なんだ。それが出来るのは…一部の人を辞めた天才だけだ。

「そう言えば、真咲の『銀河鉄道の夜』良かったぞ。巖さんの作品に出れて羨ましい限りだ」

「お前、さっきの話の流れから、よくそれ言えたな…まあ、うん。ありがとう」

「はは、俺は俺に後悔しているだけで真咲は関係無いからな！…ところで、夜風はどうだった？演技が研ぎ澄まされていたのは分かるが…裏でどんなことをすれば、あんな演技になる？」

「相変わらず、成長速度が桁違いだよ。スポンジみたいに吸収しやがる。あの演技は、巖さんに俺らより先に癌について話されてたらしいからな」

「成程な…」

死について話されていたからと言って、彼処まで表現出来るかどうかは置いておいて、素晴らしい演技だった。繊細さやリアリティはそのままに、表現力を得た夜風に感嘆半分、嫉妬半分という気持ちだ。「武光って頭鬼の方も見に行っただろう？どうだった」

「…俺は怖いと感じたよ。恐らく、頭鬼を知っているからだろうけど」「怖い？」

「ああ。元々、頭鬼の表現力がずば抜けていたのは真咲も知っていると思う」

「そうだな…多分、俺は特に知ってると思うよ。何せ、演技であいつの影響を一番受けたのは俺だからな。それで？表現力が高まったから怖いってか？」

「いや、表現力も高まっていたがそこじゃないんだ」

言い淀む俺に真咲が首を傾げる。表現というのは、あくまで気持ち、何かを伝える為にある手段だ。だからこそ、否が応でも相手の主観が入ってくる。しかし頭鬼の演技からは、それを一切感じなかった。それにも関わらず感動した。いや、感動させられた。

勿論、「星の王子さま」自体が感動する物語だったのもある。だが、それ以上に郷愁や悲哀を引きずり出され、泣いてしまった。

感情を強制的に引き出す演技…それが恐ろしくない奴なんて居るだろうか。

「…よく分かんねえけど、取り敢えず演技が上手かったってことか？」
「それは間違いないな。星アキラもデスアイランドの時とは比べ物にならないほど、演技が上手くなっていた。1日目では少しアクシデントもあつたらしいが…」

「それは聞いたな。今、CMとかドラマで、主役として引っ張りだこなんだって？羨ましい限りだぜ、本当に」

真咲は、けつ、と言いながらパイプ椅子に深く座り込み、俺は苦笑

して窘める。

「そろそろオーデイションが始まるんだ。流石にきちんとしておけ」

「…それもそうだな」

真咲が座り直した途端に、俺の番号が呼ばれる。真咲は頑張れよ、と言って背中を押ししてくれる。それに対して、俺は笑顔で任せろ、と返す。

俺はいつも間が悪かった。足を踏み出せず、遠い所から見ているだけだった。

だから、今回はそうならない。

足を踏み出す。今回のオーデイションは1対1の形式だ。仲間は今は居ない。

「烏山武光です！宜しくお願ひします!!」

さあ、今こそ羽ばたく時だろ。このチャンスは俺は、絶対に逃してはならない。もう二度と後悔しないように俺は今日、足を踏み出した。

武光とオーデイション会場で別れた後、電車じゃなくて歩いて帰る。最近、ろくに運動してなかったからそれも兼ねて歩いてみる。

「色々変わってんなあ」

東京は目まぐるしく、色んな店が変わる。流行りの中心だからこそ、栄える店もあれば廃れる店もある。例えば、タピオカとかもそうだろう。あれの次はバナナジュースだ。俺にはそれらの良さはよく分からないけど、流れていうのは確実に存在する。

それは俳優も一緒だ。歳を経るごとに需要は失われる。勿論、逆もある。歳を取るごとに需要が増す人も居る。けどどちらにも共通するのは結局、流行なんだ。

若くて爽やかな奴が流行る、渋くて落ち着いた奴が流行る。そうやって俳優はニーズに合わせて行かなきゃ行けない。

それは俳優にとって苦痛だ。死よりキツイ。流行に乗れなきゃ、

待っているのは社会に忘れられるというある意味での死な訳で。皆が必死に流行を追いかける。自分を偽って、流行りの飲み物を飲み、流行りの服を着て、流行りの曲を聞きながら、笑顔を作る。

馬鹿げてる。俳優なら、演技で勝負しろよって心底思う。けど、それが出来ない奴は落ちぶれるわけだ。客のニーズに答えられない店が飽きられるように、俳優も飽きられる。

「…何してんだお前」

歩いていると、公園で鳩と悪戦苦闘している恋歌を見掛ける。いや、一方的にやられているな。数分するとパンを無事死守して、肩で息している恋歌に話しかける。

「真咲くんじゃん。どしたの?」

「こつちが聞いてんだよ」

「撮影終わって、遊んでただけだね…そしたら鳩が私のパンを奪おうとしてきてさ…」

こいつ、鳩に馬鹿にされてんのか? 恋歌は戦利品を口に啜え咀嚼する。その間、ずっと無言で気まずい。俺が喋ろうとすると、ふんふんしか言わないし…

「ご馳走様でした。で、真咲くんは何してるの?」

「…散歩だよ。運動不足だからな」

「そつかあ。じゃあお腹減ったんじゃない?」

「確かに、減ったけど」

久しぶりに歩いたのもあるし、いつも夕食を摂っている時間だったからお腹は空いている。というか、こいつまだ食うのか。その割には色々小さいな。小学生とか中学生以降、成長してないんじゃないか? 「…ねえ、今その割には胸も身長も小さいな、なんて思わなかった?」 「いや、別に」

こいつ、俺の心を読んでいるのか? 少し怖気付いて嘘を吐く。恋歌はそつか、ならいいやと胸を気にしながら眩くと、手を叩いて何かを思い付いたように喋る。

「良かったら、一緒にご飯食べない? 今日、私の家に戻るんだけど夕食、独りだと寂しいからさ」

「良いけど…夜風は？」

「いつも景ちゃんのご飯食べてるし、たまには他の人とも食べたいなあって」

こいつ、夜風の好意にまだ気付いてないのか？いや、そんな訳ないよな。夜風が恋歌とこういうことしたって自慢げに話してくるし… てつきりもう付き合ってるのかと思ってたけど。

まさか、全部夜風の妄想だったりしないよな…？

「そうと決まれば行こっか！焼肉屋さんに！」

「奢らねえぞ」

「牛丼屋に！」

俺が奢らないという意味を出した瞬間に華麗に手のひらを返す。こいつ、奢らせる気だったな…

恋歌は早く早く、と言いながら俺の背中を押し牛丼屋へ向かわせる。

俺は溜息をつきながらも、久しぶりに会った恋歌が何処か人間味が在って少しだけ安心した。

なんで、私はここに居るんだろう。

隣に座る恋歌さんを見て、バレないくらいに小さな溜息を吐く。

「えっと…デスアイランド以来か？」

「そうですね、お久しぶりです。源さん」

「千ちゃん、千ちゃん。おすすめはチーズ牛丼だよ。3種のチーズが濃厚に絡み合ってるね、とっても美味しいよ！あ、でもね、普通の牛丼も美味しいからね！」

「は、はあ…」

「うるせえよ、恋歌」

「そう？あ、真咲くんは決まった？」

「…チーズ牛丼」

オーデイションが終わって、マネージャーさんに無理言って、カラ

オケで発声練習をした帰りに恋歌さんに捕まった。

恋歌さんとは「星の王子さま」以来、会っていないかった。メールのやり取りはしていたけれど、何故か身体が会うことを拒絶していた。あの舞台以来、色んなものが色褪せて見える。彼女に出会ってから私の何かが壊れそうになる。

「千ちゃんは？」

笑顔で私に話しかけてくれる。私とは違って、良い感じに身長が低くて愛嬌のある人だ。きつと大衆が好むのはこういう娘なのだろう。

でも、私には何処か恐ろしく見える。あの舞台から、演技をする度に違和感が積もり、拭えない。出演していた他の役者達も上の空になっていたり、演技に違和感を覚えているらしい。

彼女から演技を教わった者はよく伸びた。だけど、その代わりに何かを失った。例えば、時間、家族、感情。演技に熱中するあまり、彼らは帰って来れなくなった。

…私も彼らと同じなんだろう。狐の役を演じてから、何処か孤独を感じる。傍にいた大切なものが無くなったような気持ちがふとした拍子に溢れる。

「私は…普通の牛井で」

「じゃあ、頼むよー」

彼女には才能がある。千世子さんのような魅せる技術が、夜風さんのような目を惹く演技力が。

天は二物を与えずという言葉がある。ひとつも貰っていない私とふたつを持つ彼女。もし、この言葉通りが真実ならこうはならない。神様という存在は本当に不平等だと思う。彼女にばかり鼻負しているんだ。

この感情は嫉妬、なのだろうか。いや、そんなものじゃない。それ以上の…憎悪と呼ぶべきものだ。憎くて仕方が無い。貴女のように輝けない私は、貴女と同期でありながら後を追ってばかりの私は、貴女が憎くてたまらない。

貴女が居なくなれば、私は輝けるだろうか。

貴女が居なくなれば、私は…元に戻るだろうか。

【幕間】人は巡り愛（あ）う 結

商業において、最も大切なのは心理だ。これが好きだから、これが嫌いだから、これは皆がやっているから。そんな理由で、大衆は物事を判断する。人というのは理性的に生きているようで、実に愚かな生き様を晒している。

特に芸術家アーティストはそういう傾向が多い。彼らは愚かだと自覚し、その上で芸術という商品に命を賭ける。そして好悪で全てを判断する。

「全く馬鹿げている、そうは思いませんか？」

「…心一さんって俳優嫌いななの？」

「金になる内は好ましく思いますよ」

頭鬼恋歌は金になる。CM、ドラマ、映画、舞台などマルチに展開出来、演技力と技術力に申し分無し。だが、知名度がまだ少し足りない。だからこそ、『羅刹女』の公演を決めた。夜風景と頭鬼恋歌、百城千世子という話題になる商品じやゆうを使わない手は無い。

「ところで。心一さんは、『羅刹女』で誰が勝つと思う？」

「勿論、貴女が勝つと思いますよ。夜風景より技術に優れ、百城千世子より演技に優れる貴女なら」

これは嘘では無い。個々で批評するなら頭鬼恋歌の勝ちだ。だが、舞台は独りで行うモノでは無い。彼女以外の役者が足を引っ張ればどうなるかは分からず、私の考えたスタッフ表の通りになるならば、彼女は確実に負ける。

「そんな訳ないよ…私が景ちゃんと千世子ちゃんに勝てるわけない。私には才能が無いもの」

「でも勝たなければいけない、でしよう？」

「うん。勝てないと私に生きてる価値なんて無いから」

自己嫌悪が行き過ぎた結果、才能の有る者に歪んだ執着を見せる。愛が行き過ぎた結果、殺意を抱き、愛する者を殺める術を求める。

仮面を被りすぎた結果、自分を見失い、精神の成長が止まる。

本当に芸術家というのは厄介だ。特に頭鬼恋歌という芸術家は非常に厄介だ。笑顔で善悪や倫理観を簡単に越えてくる。こちらの思

惑など知らん顔をして、荒らしてくる。そのような好悪だけで世界を見ている化け物を飼い慣らす方法は一つだけだ。好きな物で釣ればいい。

「夜風景が勝てば、これを機に更なる名声を手に入れるでしょうね。勿論、百城千世子が勝てば現在の名声を維持する事が出来る。勝たなくとも注目を浴びることが出来る」

「うん。最初の契約通りだね」

「ええ、夜風景を女優として輝かせる。そのひとつが叶えられますね。では、もうひとつの方は如何でしょうか？」

水を飲もうと、コップに手を伸ばした頭鬼恋歌の動きが止まる。そして、私を見据える。私は笑顔を崩さずに言葉を続ける。

「人気絶頂の夜風景を殺す。最初聞いた時は驚きました。何せ、自分にとって大切だと思う人を殺すなんて私には到底理解出来ない事です。復讐かと私は疑いましたが…」

「…」

「貴女は笑顔でその言葉を口にした。あの時の笑顔は嘘では無いですよね？」

「…そう、だよ。私は心の底から景ちゃんを殺したいと思ってる。だって、景ちゃんを綺麗な顔で死なせてあげたいじゃん。人気絶頂のまま死ぬってことは、人気のまま死ぬるんだよ？女優としてさ、それって幸せな事じゃない！人の記憶に残る限り、彼女は美しく居られるんだよ。それに…私が殺せば、彼女の初めてになれるって思ったの。私が、彼女の初めてになりたかった。お風呂も、ご飯も、キスも、全部！全部!!ほら、初めが欲しくなったら終わりも欲しくなるでしょ？だから、彼女の死も欲しくなっちゃったの」

いつもの作られた笑顔では無い。もつと醜い歪んだ笑みだ。彼女は愛という曖昧なモノに囚われ、囚われていることに気づいてない。「だけど…今は違う。なんか、おかしいんだよ。景ちゃんの顔を見ると心臓が痛い。千世子ちゃんと出会うと顔が熱くなって恥ずかしくなるの。殺したく無いんだ。なんでかな？なんで、こんなにも変な気持ち溢れるの…？」

…成程。歪んだまま成長しているかと思っただら存外、まともな部分もあつたらしい。いや、まともにならされたのか。マネージャーに扱えば、百城千世子と夜凧景から熱烈なアプローチを掛けられているらしい。そのせいで矯正されたか。明確な愛情を受けて、歪んだ愛情をおかしいと気づき始めている。

「私には貴女の気持ちの方が分かりかねますが、その気持ちはしまつておいた方が良いでしょう。それは貴女の演技を鈍らせるもののように思われる」

「…うん」

だが愛情を彼女に自覚させるのは、宜しくない。彼女の演技はまともな愛情が無いからこそ、客観的かつ精巧な演技を可能にしているのだから。

だからこそ、彼女の気持ちを抑制する。彼女が未永く私の商売道具であるように。

たまたま付けたテレビに頭鬼恋歌が映っていた。相変わらず、化粧物染みた才能だと思つて見ていると、何処か違和感を感じる。

違和感を感じた瞬間には、消えているほどの違和感だ。少し水面が揺れた程度。だが完璧な演技をしているからこそ、その揺れは目立つ。

「夜凧」

「ん？何かしら、黒山さん」

「最近、頭鬼の調子はどうか？」

「相変わらず、可愛いけれど」

「…」

だめだ、こいつ。全然使えねえ…

俺は夜凧との会話を打ち切つて、また頭鬼の出演したCMや映画を見る。そして最近のCMを見て、違和感の正体に辿り着く。

「…メソッド演技、か」

メソッド演技は自分の感情に基づいて演じる演技法だ。だが、頭鬼はメソッド演技を使うのでは無く、他の役者に使わせたり、観客に感情を思い出させるのに使っていた筈だ。

それが何らかのきっかけで、変わった。あの日、俺が忠告しても変わらなかった奴の演技に変化を与えた者がいる。

それは十中八九、夜風と千世子だろう。頭鬼は学習の見本として、夜風と千世子を選択していた。その過程で演技に限らず、あいつらの頭鬼に向ける愛情すら取り込んで学習したのだろう。その結果、見るこつちが恥ずかしくらいのイチャつきにまで発展したわけだ。

そうすると、少し懸念が出てくる。『羅刹女』でのテーマである怒りと嫉妬。どちらも負の感情であり、人間である以上抑制することが難しい感情だ。それらを頭鬼が2人から学習した場合、どうなるのか。あいつは素直に、全てを学習してしまう癖がある。その素直さが今まではプラスに生きてきたが…

「今回はそれが仇になる可能性があるな」
「…」

思わず口に出してしまい、いつの間にか隣に座っていた夜風に首を傾げられる。俺はなんでもねえ、と言うと少し溜息を吐く。

夜風の怒りと嫉妬、千世子の怒りと嫉妬を学習して頭鬼はまともで居られるのか。大切な人からの敵意に、あいつは打ち勝てるのか。

敵にも関わらず、不安になる。だが無理に止めようとするのは無意味だ。俺もあいつもこの世界に踏み入れた以上、やりたいことをやる時に他者の制止なんてクソ喰らえだからな。逆に俺が殺られかねん。

では、どうするのか。簡単だ。頭鬼を正しく成長させてやればいい。と言っても直接、成長させるのではなく周囲に成長を促させる。

その為に、千世子に協力して貰う。千世子の演技で、頭鬼に怒りと嫉妬の制御をどうにかこうにか教えてやる。

夜風に頼むことも考えたが夜風は俺にとっても敵だし、協力を頼むことは出来ない。だが、あいつは勝手に自分なりの正解を見つけるだろう。そういう神に愛された女だからな…夜風は。

本当なら頭鬼を無視してもいい。だが、1度忠告した身として、少

しだけ力を貸す。

それに今の頭鬼なら少し撮りたくなつた。機械的な正確無比の演技では無く、今のような感情を込めた演技をする頭鬼恋歌なら撮ってみたいと思つたから。俺は身勝手にも、救いの手を差し伸べる。それを手に取るかどうかは、頭鬼次第だが。

「ねえ、黒山さん。なんで、ずっと恋歌のシーンを見てるのかしら？もしかして…好きになつたのかしら？もしそうなら私にも考えがあるのだけど」

「安心しろ。俺はあんな貧相なのに興味ねえ」

「恋歌が貧相ですって!?!撤回して、ヒゲ男!!」

「お前、めんどくせえな!?!」

こつちが真面目に考えてるにも関わらず、夜風に邪魔される。

その後、適当にぎやあぎやあ騒ぐ夜風をあしらっていた俺は小一時間、頭鬼の良いところを聞かされることになる。

羅刹女編

賽は投げられた

私はいつも怯えている。

景ちゃんに嫌われたくない。

千世子ちゃんに嫌われたくない。

最初から感情なんて無ければ良かったのに。

こんなに苦しいなら、■なんて知らなくて良かった。

でも、私は頑張らなきゃいけない。弱くて醜くてどうしようもない私だけど、景ちゃんと千世子ちゃんの隣に居なきゃいけないから。私と2人では釣り合っていないけど、傍に居たいんだ。

だから、私はもう少しだけ頑張る。少しでも傍に居れたらその後は死んでもいいから。私なんて居なくなってもいいから。

お願いします、神様。私を勝たせてください。彼女達に勝つことだけが、唯一の資格に成りうるから。

皆さん、お久しぶりです。今日は私の顔も三度までな「羅刹女」編をプレイしていきたいと思います。

今回の舞台、「羅刹女」に於いては、恋歌ちゃんは景ちゃんサイドを狙おうと思います。理由は「星の王子さま」編で喋ったと思います。なので「星の王子さま」編を見直してください（露骨なマーケティング）。

「羅刹女」編で、1番気をつけて欲しいのは感情値ですね。怒りと嫉妬を取り扱う作品ですので、メソッド演技持ちの景ちゃん、恋歌ちゃんは呑み込まれ易いです。感情値はこまめに確認しましょう。見落としがあるといけませんからね！

感情値は冷静がベストです。対策としてステータスの『精神』を優先的に上げたり、アビリティで『無我の境地』等を取るのも有りです

ね。

ただ学生時代に『無我の境地』を獲得すると、テニス部やサッカー部に誘われます。その場合はゲームが唐突に超次元へと変貌するので気を付けてください。私は1回だけ、そのルートに突入しました。テニス部のエースとして活躍するのは楽しかったです。これって演劇のゲームですよね…？

そんなことはさておき、早速「羅刹女」のオフアーが来ましたね。…うん？オーディション結果じゃなくてオフアー？なんか、おかしいぞ？まるで恋歌ちゃんの主役として出るみたいじゃないですか。

＞貴女は天知心一に呼ばれたビルの一室に入る。そこには貴女を呼んだ天知心一の他に、夜風景、百城千世子、明神阿良也、星アキラが座っている。全員が貴女に視線を注ぐ中、貴女は元気に挨拶し空いている席に座る。

アイエエエ!? シュエン!? シュエンナンデ!?

「遅刻しなくて何よりです」

＞天知心一は笑みを浮かべると、説明を始める。

「今回の舞台は『羅刹女』。3つのグループからなるトリプルキャスト公演です。サイド「甲」、羅刹女役に夜風景さん、孫悟空役に王賀美陸さん」

＞貴女は王賀美陸の姿を探すが、何処にも居ない。少し息を吐いて、自分の逸る気持ちを抑える。

「サイド「乙」、羅刹女役に百城千世子さん、孫悟空役に明神阿良也さん。そして、サイド「丙」、羅刹女役に頭鬼恋歌さん、孫悟空役に星アキラさん」

だからなんで毎回、恋歌ちゃんとアキラくんの組み合わせなんだよ!! あーもうめちゃくちやだよ…

本来ならここで景ちゃんと千世子ちゃんの成長を見届けて、新しい編が始まる前に殺る予定だったんですが、恋歌ちゃんが主役で忙しすぎて、殺れるかどうか微妙です。

「主演は今をときめく者ばかりだ。スターズの内紛にも見えなくはないですが、それすら話題になる。これは売れそうですね」

「そうだね。私が主演だもの。絶対、売れるよ」

「売る売らないじゃない。結果なんて後からどうにでもなる。それより誰をどう演じるかの方が重要だ」

「…舞台の結果って興行収入とかだよな？つまり重要なのは数字だよ」

「…」

「…」

＞貴女の隣で明神阿良也と百城千世子がひりつく。星アキラは苦笑して頬を搔く。貴女は天知心一に台本はまだか、と問う。

「台本はただいま執筆中でして…」

「ちよつと！」

＞天知心一が答えていると、夜風景が天知心一に何故ここにいるかを問い質す。そして夜風景は天知心一に嫌いと言うと、天知心一は涙を流す。

「貴女が喜んでくれると思っていたのですが…」

「あーあ…」

「え?!私のせい!?!」

「俺はあんたに感謝してるよ、天知さん。夜風と共演じゃないのは残念だけど、それも有りだ。俺は夜風の芝居を霞ませる。頭鬼の芝居もね」

「…面白いこと言うね、阿良也さん。私が2人の芝居を越えて霞ませるんだよ?」

＞百城千世子は寧猛な笑みを浮かべて、明神阿良也を見据える。

「なんか、恋歌ちゃん標的にされてませんか?こちとら無害なんですけど。」

「そ、それで私の共演者はいつ来るの?」

「ああ、遅刻していましたが、今来ました」

＞薔薇の花束を持った美丈夫が夜風景を抱き抱える。貴女は思わず、席を立ってしまう。彼は、私の原点だ。^{オリジナル}私がどうやっても敵わない存在だ。

「会えて光栄だ、新宿ガール。君のための薔薇だ。君に良く似合う」

「ば、薔薇…?」

「お近づきの印に」

「>貴女はダメ、と大きな声を出してしまう。何故か嫌な気持ちになる。彼と景ちゃん…夜風景がそんなことをするのを私は見たくない。」

「ん?なんだ?」

「>声に気づいた彼はこちらに目を向けると笑う。」

「おお、あん時のガキじゃねーか。屋上で月を見てた」

「…恋歌を知ってるの?」

「あ?名前なんて覚えてねーよ。ただ、ちよつと面白い演技をするから喋った程度だ」

「>貴女は王賀美陸に名前を覚えられていないことに悔しさを覚えながらも、自分のこと自体は忘れていなかったことに嬉しさを覚える。」

「ていうか、新宿ガールもガキだな。まあ、安心しろ。この俺がお前を女にしてやる」

「あ、そういうのは間に合っているわ」

「…ウルフギヤングでTボーンステークってのはどうだ?」

「す、ステーク!?恋歌も連れて行っていいかしら!」

「ああ、いいぞ。お前も来るだろ?満月ガール」

「良くねーよ!!王賀美陸とかとつるんでられるか!俺は家に帰らせて貰う!!」

「いや、本当に。冗談抜きで王賀美陸と恋歌ちゃんは相性が悪いです。小手先で勝負するのが恋歌ちゃんなので、存在そのものが武器な王賀美陸は相性最悪なんですよね…」

「>貴女はステークの魅力につられ、王賀美陸の誘いに頷く。」

「馬鹿か!?勝手に選択するのどうにかありませんかね!?このゲーム!!皆さん気をつけてください、このゲームはクソゲーですよ!!」

「因みに勝手に選択するのは仕様です。『知力』が低いと、一定の確率でコマンドを受け付けてくれません。ポケ○ンで例えるとバツジが足りてないのにレベルが高くて言うことを聞いてくれない状態ですね。」

なので、投稿者が悪いです。ですから、この実況のBANだけはどうか見逃してください。お願いします。

「はあ…確かに共演者を知るのに…：…おい、百城千世子、聞いてる?」
「…夜風さんと王賀美陸が恋歌ちゃんとステーキ?ふうん…：…恋歌ちゃんもそんな簡単に誘いに乗るんだ…へえ、別にいいけど…：…」

「…これ、僕、空気じゃないか?」

「>天知心一が手を鳴らし、全員の視線を集める。

「さて、皆さん。話も弾んできたところでしょうが今日はお開きです。公演は数十のカメラで撮影、それらを全国シネコン、動画配信サイトでも公開予定。演劇であり、映像にもなる。現状、国内最大規模の舞台でしょう。他のキャストもオーディションを終え、審査中。来週には、稽古に入れる状態です。では皆さん、いい舞台にしましょう」
切りがいいので今回はここで終了します。また次回、よろしくお願
いいたします。

…：…はあ、しんどいなあ。

ステーキが美味しい。久しぶりにこんな凄いお肉を食べたわ。

隣の席にいる恋歌が幸せそうに肉を頬張るのを見て、私も幸せになる。このままお肉ごとお持ち帰りしたいわ。

「すみません、僕も誘って頂いて」

「ん?お前は自分で払えよ」

「あ、そうですね…」

「冗談だ。奢ってやるよ、星アリサの息子だろうとな」

「…知ってたんですか」

「顔も名前も覚えて無いがな」

王賀美さんとアキラ君が会話している。2人とも真剣な顔をしているから、邪魔しないように恋歌の食べている姿をずっと見ている。口にソースが付いているから、舌で舐めと…：…じゃないわ、流石に公衆の面前だもの。ティッシュで拭き取る。…でもちよつとくらいなら

舐めても怒られないと思うの。

「景ちゃん、このお肉美味しいね！私、毎日通おうかなあ」

「そうね。でも毎日通ったら、恋歌のお小遣いだと半月も持たないわ」

「そっか…残念」

肉でテンションが上がる姿も可愛いし、しょんぼりするのも可愛い。ここがお店じゃなかったら、確実にキスしていた。

日に日に愛が増していくのを感じる。理性が飛びそうなくらい、恋歌を愛している。

一緒に寝る時も偶然を装って服を脱がそうとしてしまうし、一緒にお風呂に入ってる時も胸を揉もうとしてまう。

…冷静に考えると、これって変態的な行動なのでは？

そんなわけ無いわ。愛し合う人は皆やってること。た、多分、皆やっていることだわ？そうじゃないと私が変態認定される。ちよつとくらいえつちなことは合法なの。

ちなみに、恋歌の胸は柔らかかったわ。

私は、王賀美陸の偽物だ。そして、恋歌ちゃんも私と同じ王賀美陸の偽物。

きっと私と恋歌ちゃんのゴールは同じだった。ただ過程が違っただけだ。

彼女は王賀美陸になる為に自分を作り変えた。仮面を被るだけの私と違って、彼女はさらに深い所に目を向けた。

普通の手段で、王賀美陸そのものに成れないなら、自分の意思を限りなく薄めて、模倣すればいい。そんな理論だったのだろう。そして彼に近づく為に、彼の行動を、言葉を、精神を刷り込んだ。

私は仮面を作って、統計と学習を繰り返した。王賀美陸そのものになる事は不可能だとそうそうに切り上げた私は、彼の結果を模倣することにした。彼と同じ、売れる作品を作ることだけに力を注いだ。

でも結果はどちらも失敗だった。

私の女優人生は後2年足らずで終わり、彼女は精神が歪んでしまっている。

私が恋歌ちゃんに最初、怒りを抱いたのは彼女が私と似ていたから。私の心に踏み入って来たのもあるけどそれ以上に似ていたのだ。私が恋歌ちゃんを愛しているのは、凄く最低な理由だ。彼女が私と同じ偽物だから。同じ穴の貉だから、愛しているのだ。…まあ、恋歌ちゃんが愛らしいというのもあるけど。

私が「羅刹女」に出演する理由は2つ。

1つは、私の女優人生を長らえさせる為。まだ、私は満足の行く結果を叩き出せていない。夜凧さんにも、恋歌ちゃんにも勝っていない。

もう1つは、王賀美陸との決別だ。私はこの舞台で王賀美陸の偽物を辞める。私は新しい翼を携えて、百城千世子として、舞台に立つ。私は貴女に愛される女でありたい。私は、貴女を独占したい。貴女とデートがしたい。貴女とずっと愛し合いたい。貴女の笑顔を永遠に見ていたい。

その為には可愛い天使じゃ駄目なのだ。そんなあまっちよろいモノでは、貴女には釣り合わない。

だからこの舞台が終わるまで、私はこの想いを心の奥底に沈める。舞台が終わって、私が貴女に勝てた時に、この想いをきちんと伝えるために。

愚者の告解

俳優に限らず、人には消費期限が存在する。

時間が経つにつれて人は劣化する。類稀な美貌も優秀な頭脳も老いには勝てない。

ガワだけ取り繕っても結局、何処かでボロが出てしまう。

私の消費期限はこの「羅刹女」で終わりだ。この後から私は景ちゃんと言世子ちゃんに勝てなくなる。この舞台を終えたら技術、美貌、才能を含めてあらゆる点で追いつけなくなる。

今まではそれが怖かった。2人に置いてかれるのが怖くて、ずっと怯えていた。

だけど彼女達は天才で、私なんてものともせず、進化していった。景ちゃんにはひなちゃんみたいな普通の友達ができて、言世子ちゃんには景ちゃんというライバルが出来た。

：それに私は嫉妬していたんだと思う。嫉妬という気持ちがあるのが正しいのか分からないけど。私以外に特別な誰かが出来たことが嫌だった。

そこでやつと、私は気づいた。置いてかれたくないなら、私が成長しなければいけないのだ。

私は2人と違って、突出した才能や美貌、技術なんて持っていない。凡人なりに2人の才能や技術を限りなく近いものとして模倣しただけ。持つてるものはその模倣した残骸だけ。

ああ、全くもって愚かだ。凡愚が天才に立ち向かうなんて少年漫画みたい。勝てない戦いに臨むなんて私らしくない。

決して届かない星に私は手を伸ばす。偽物の癖に、生き恥を晒して足掻く。

でも勝ちたいから、私は諦めない。

私が2人にとっての特別でいたいから笑顔をやささない。

私は最期まで女優でありたいから。

主人公相手に無謀な戦いを挑む無理ゲー、やっていきたくないと思います。

さて、前回のあらすじをさらっと話すと、恋歌ちゃんが景ちゃん&王賀美陸と千世子ちゃん&阿良也くん相手に、アキラくんと挑みます。

…失踪したいんだよなあ。

ぶっちゃけ言いますと勝ち目は無いです。こちらサイドが余程の天才揃いでないと勝てません。そうですね、景ちゃん程じゃないにしても、そのくらいの天才が居てやっとな勝率5割行くか行かないかです。

これはアキラくんが足を引つ張るどころではなく、純粹に相手側が強過ぎます。“星の王子さま”の時は“銀河鉄道の夜”の方とは被らないように、別のターゲットを狙ってました。評論家より、家族連れとかカップルだとか舞台上に興味が無い人達にも目を向けていたので勝つことが出来ました。

でも今回の舞台“羅刹女”は、その場で相手と同じ観客に見比べられます。ということは優劣がハッキリつくわけですね。その場合、恋歌ちゃんやんは勿論、恋歌ちゃんより演技ステータスの劣っているアキラくんや他のキャストでは、ハリウッド帰りの王賀美陸や舞台専門の阿良也くんは、全く歯がたちません。

なので、恋歌ちゃんの女優人生を終わらせないことが、今回のポイントですね。どうしても勝敗は付きませんが、評価値がある程度高ければ恋歌ちゃんの女優人生が終わることはありません。多分。ちなみに、ここで恋歌ちゃんの女優人生が終わると、そのままGAME OVERです。その状態でやり直すと、最初からに飛ばされますので気をつけましょう。

普通に俳優プレイする際は、景ちゃんか千世子ちゃんのどちらかのサイドに入ることをオススメします。まあ、こんな三つ巴なんて初めて聞きましたし、再現が可能かも分かりませんが…

取り敢えず、進めていきます。台本が届いたようなので、今回は台

本の読み合わせと顔合わせですね。さて、誰が居るのかな。ここで原作に出てきた人が居れば、勝率は少し上がります。景ちゃん関わった人は伸びるので。

> 貴女は顔合わせする為の会議室に、時間より2時間早く到着する。貴女は珍しく緊張しているようで、息を整えてから会議室に入る。

> 中には既に星アキラが座っていた。星アキラはこちらに気がつくと思いを掛けてくる。

おつ、開いてんじやくん！

「おはよう、恋歌君。随分、早いね。予定より2時間も早く来るなんて珍しいな」

> 貴女もおはよう、と返した後、それは堀先輩も一緒じゃないですか、と言う。

「そうだね…でも、あの4人が僕らの敵である以上、一分一秒が惜しい。だから君も早く来たんだろう?」

アキラくんが積極的なのはいい事ですね。これは勝率も1割くらい上がるんじゃないでしょうか。

> 貴女が頷くと、星アキラは早速読み合わせをしようと提案してくる。

ここははいを選択して、全員揃うまで待ちましょうか。

> 貴女と星アキラが読み合わせをしていると、扉が開く。入ってきたのは源真咲以外は知らない者ばかりだ。

あつ??(察し)。いや、でも1人は原作キャラだし…もしかしたら他の人も天才的な俳優かも知れません。王賀美陸とタメ張れるくらいのが天才が居るかも!そしたら、アキラくんクビになりますね。別に構いませんけど。

> 演出家から主演、助演の順に挨拶していく。貴女が見る限り、星アキラ、源真咲以外はそこそこ出来る程度の印象だ。

クッッッ
タレがよオ!
フアアアアアツク!!

あーもうめちやくちやだよ…

明星

「恋歌君、そろそろ休憩しよう」

彼女は顔合わせの日から2日間、ずっと稽古に打ち込んでいる。

彼女らしくない。いや、役者として稽古に打ち込むのは当たり前だ。だけど、彼女はどんな仕事でも余裕綽々としているイメージが強かった。

「…いえ、もうちよつとやります」

演技に熱意はあっても、何処か冷静なのが彼女だ。それが『羅刹女』…いや、夜風君たちと戦うと意識してから焦っているように感じる。

「だが…」

「堀先輩、景ちゃんと千世子ちゃんに勝つには今のままじゃダメです。役をもっと掘り下げなきゃ、もっと、もっと…」

その通りだ。僕らが戦う相手は天才達だ。メソッド演技で観客の心を掴む夜風君、自分の魅せ方を知っている千世子君、巖裕次郎に認められ舞台においては夜風君以上の明神さん、そして…スターズを捨て、海外で活躍する王賀美陸。

彼女が焦るのはよく分かる。そんな化け物じみた天才に勝つには並大抵の努力では敵わない。

しかも、恋歌君はこの『羅刹女』が致命的に合わない。

「ああ、腹が立つ」

彼女が演じるのは、題名にもなっている羅刹女。夫である牛魔王は妾の元に毎年通い、愛息子である紅孩児の悲報によって怒りを募らせる神だ。

頭鬼恋歌が演じることによって、羅刹女の憎悪にも近い怒りと殺意が伝わってくる。

…だけど。

「…だめ、だなあ」

彼女は首を横に振る。

彼女の演技は台本通りだ。台詞も完璧、感情表現も完璧。だが、そ

これは夜風君も千世子君と同じ。では何処で違いが出るか。

どれだけ、自分の羅刹女を表現出来るかだ。

ただの怒りじゃない。ただの感情表現じゃない。自分だけの羅刹女でなければ、観客には響かない。

恋歌君にはそれが出来ない。

「堀先輩、ちよつと私の事怒らせてみてください」

「は…？」

彼女に無茶ぶりされる。彼女が怒るようなことってなんだ…？常に笑顔だし…夜風君とか千世子君のことを侮辱するとか？いや、そんなことはしたくない。

「…えつと、チビ、とか？」

「そんなのじゃ怒らないですよ。もつと真剣に怒らせてくださいよ」

「そんな事言われても、こういうの得意じゃないんだ。前、話した時は怒ったことがあるとは言ってたけど…その時の感情を再現するのじゃダメなのかい？」

「アレは、怒っているのとは違うような気がしたので、没です」

何か、良い怒りの題材が落ちていないものか…

僕も怒ることはあるけど、羅刹女のような怒りを覚えたことは無い。それに羅刹女には怒りだけじゃなく、嫉妬の感情もあるのだ。怒りだけにかまけていられない。

「…私、羅刹女のこと嫌いかも知れません」

「唐突過ぎないか」

「私は可哀想って思ってるんですよ、こいつ。自分が愛されていないのは、自分のせいだって分かってない。人のせいにはばつかして、あーだこーだ愚痴る」

彼女はバッグから台本を取り出して、読みながら語る。

「怒りなんて醜い感情を勝手に燃やして、夫の妾に嫉妬した挙句、それを存在意義にしている。本当に厄介ですよ」

「本当に嫌いなんだね」

僕は苦笑する。だが、これも彼女らしくない。舞台以外では役と自分を分けて考える彼女が、役にこんなに感情移入することは初めて

だ。

「…そうだ。僕だけじゃなくて、色んな人に聞いてみるのはどうかな。休憩ついでに家に帰って、夜凧君にも相談したらどうだい？」

「そうしてみます。というか、堀先輩、全然役に立ちませんね」

「うっ…」

そう言われると何も言い返せない。でも、僕だっていつまでも彼女達の後ろを歩いている訳には行かない。

この舞台上、僕は恋歌君に借りを返さなければいけない。

そのために必ず、彼女を勝たせる。

百城千世子が嫌いだ。臭いを隠して、結果重視。何処までも気に食わない女だ。

それ以上に頭鬼恋歌は気に食わないけど。

「で？なに？」

「阿良也くんを見れば、怒りの気持ちが湧くかなって」

その気に食わない頭鬼恋歌が俺の所にやってきた。どうやら役作りに悩んでいるらしい。

「なんで俺を見たら、怒りの気持ちの湧くと思ったわけ？」

「嫌いだから」

「…へえ、随分素直になったね。頭鬼」

「嫌だなあ、前から私は素直だったよ。阿良也くん」

笑顔で頭鬼に嫌いと言われるが、気にしない。

…それよりも本当に変わりつつあることが気になる。以前は他人の目ばかり気にしていたのに、今では奥にしまっていた感情を少しずつ出すようになっていく。

取り敢えず、役作りの相談に乗りはしない。こいつは口でどうこう言うより直接見た方が早いタイプと見た。だから、俺は提案する。

「これから百城と稽古するけど見ていく？別に俺は見られても構わないし、百城が嫌って言えば帰ればいいんだしさ」

すると頭鬼は笑顔から急に顔を赤らめて、動揺し出す。冬だというのに冷や汗をかき、立ち上がったたり座ったりして忙しない。

「ち、千世子ちゃんが来るなら先に言ってよ!!」

「アンタが勝手に来たんだろ」

「全然オシヤレとかしてないし、稽古場から直で来たから汗もかいてるし…どうしよう!」

動揺している姿が非常に面白かったので揶揄う。

「ああ、だから臭うんだ」

「っ…!」

別に大して臭わないけど。臭うと言った瞬間、固まる。

「お、お風呂貸してください」

「嫌だつて言ったら?」

「…やっぱり、阿良也くんって性格悪いよね」

「頭鬼ほどじゃない。あ、夜風との関係を認めてくれたらいいよ」

「絶対、嫌。そもそも景ちゃんの意味を無視しないで。阿良也くんと景ちゃんが結ばれるくらいならお風呂なんてどうでもいいもん」

「夜風、俺のこと好きらしいよ」

「え…そ、そんなわけないもん。阿良也くんなんて蚊以下だよ!!」

頭鬼を揶揄うの面白いな。

「そろそろ百城が来る時間だけど、どうする? 帰るなら早く帰らないと…」

玄関のチャイムが鳴る。ああ、あいつ、律儀にもちよつと早めに来たのか。頭鬼が慌て出すのを無視して、玄関を開けに行く。

「こんばんは」

「どうぞ、百城千世子」

百城千世子を玄関に入れると、頭鬼の靴を見て立ち止まる。

「…もしかして、恋歌ちゃん居る?」

こいつ、なんでわかったんだ。若干、背筋に悪寒を覚えつつも返す。

「うん。居るけど」

「ふーん…」

王賀美陸という名前を出した時のように、臭いが漏れ出る。

…やっぱり、そうか。頭鬼が来てくれて助かった。百城千世子はまだ化けられる。

その身に宿る愛憎で、誰にも負けない羅刹女を演じることが出来る。

こいつは俺にも手が負えないくらいに進化している。今までの価値観をぶち壊してまで、勝利を渴望している。

なら、俺もそれに応えるのが当然だ。

さて、頭鬼恋歌。アンタが役作りに悩んでいる間に俺らはどんどん完成していく。早くしないと…置いてかれるよ。

主人公は遅れてやってくる

最悪の役者ガチャでしたね…

アキラくんと真咲くんに期待したい所ですが、彼らでは力不足と言わざるを得ないです。

恋歌ちゃんの『恋式演技術』で、アキラくんと真咲くんを仕上げることは可能でも、他の役者が足を引っ張ります。

はーつつかえ。辞めたらこの仕事^{ルート}？

と、数日間思っていました。何とかGAME OVERにならない方法を思いつきました。

『オーバーフロー』という何処ぞの賭博黙示録もびつくりなギャンブルアビリティを恋歌ちゃんは所持しています。

尚且つ、『恋式演技術』という運営に問い合せても、まともな回答が返ってこないブラックボックスまで。

この2つを最大限に利用しつつ、感情値を激怒にします。前々回くらいに感情値は冷静がベストと言いましたが、それはちよつと甘い考えでした。この最弱と呼べる状況で冷静という感情値はマイナス評価になりかねません。役に呑み込まれるリスクを背負ってでも、感情値を激怒まで持っていきます。

賭けに賭けを重ねる行為ですので、一歩間違えたらGAME OVERですが、何もしなければ確実にGAME OVERになるのは間違いないです。

…これ、暗殺者ルートだよな？ 役者ルートじゃないよね？ (震え声)
それより、感情値を激怒にする方法ですが……………

うーん…………… (熟考)

やっぱり、暗殺した方が楽なんじゃないですかね？ (自棄糞)

そうと決まれば、早速暗殺しに行きましょう。善は急げ、悪も急げです。これから羽田空港にて、王賀美陸がハリウッドに戻ろうとします。その時に停電があるので、タイミングを見計らって殺っちゃいましょう！

着きましたね。アキラくんに乗せてきてもらいました。やつぱり持つべきはホム…じゃなかった友達ですね。

＞貴女は星アキラの車から降りると、ロビーに向かう。天知心一から王賀美陸が帰国しようとしていると、メールが届いている。

＞ロビーは多数のメディア人や人に埋め尽くされておりその注目の的になっているのは王賀美陸だ。

人が多いですが、大丈夫です。暗殺者ビルドの研鑽は欠かしてないので、いつでも殺れます。停電さえ起これば、の話ですが。今回は色々イレギュラーが起きているので、景ちゃんが山野上花子に突き落とされている可能性もあります。

対象が減って、楽と言いたいのですが、その場合は『暗殺の天使』は取れません。原作の主人公殺せないのに他の主要人物殺しても意味ありませんからね。

＞烏山武光が王賀美陸を引き留めようとする。

「ただ俺は賭けているんです…この舞台に！」

「武光、これは自慢でも何でもないんだがな」

＞王賀美陸は語る。自分が自分であるが故に愛されている。それは私とは真逆の生き方。『私』という嘘で塗り固め、そればかりが人に愛される私とは真逆の在り方。

「だから…悪いな」

＞羨ましいな。なんで、そんなにも眩しい生き方が出来るんだろう。私はこんなにも惨めなのに。

＞王賀美陸が行こうとすると、その背後から女性が話しかける。周囲はその人物が現れたことにざわめく。

「私と遊んでよ、王賀美さん」

＞百城千世子は、王賀美陸に真っ向から立ち向かっている。

「名前、覚え直させてあげる」

「悪いがもう時間が無い。名前なら今、教えてくれ」

「女の名前を覚えられない男はモテない…そう教わらなかった？」

＞そう言った王賀美陸の後ろから、明神阿良也が現れると百城千世子の隣に立つ。

「あなたの本当の遊び相手は夜凧じゃない。俺たちだ」

>違う。

>王賀美陸も、夜凧景も、百城千世子も、私が。

なんか、ログがバグってますね…後で報告しておきましょうか。

取り敢えず、生きていれば、そろそろ景ちゃんが到着します。

「僕達も行くかい？」

>車を停めてきた星アキラが貴女の隣に立ち、聞いてくる。

ここは行かなくていいです。変に目立つと殺せないのです。

…なんか冷静になって考えると、空港で人殺したら普通にバレるんじゃない…

いや、そんな訳ないですよ。これ、ゲームですし！

>貴女は首を横に振る。星アキラはそうか、とだけ言う。

「王賀美さん！」

>夜凧景が現れる。メディアや衆人はMVの夜凧景が来たと写真を撮り始める。

>…これが、彼女と私の違い。彼女は神に愛された主人公なんだ。

私は、彼女の美しさを引き立てるための道化。

「…今更何しに来た。新宿ガール」

「読み合わせの続きを」

「…期待できるのか」

>夜凧景はそれに答えず、手を前に出す。空気が、変わる。夜凧景から、景ちゃんから目が離せない。

「ああ、腹が立つ」

>どうして。貴女は私を置いて、どんどん行ってしまふの。待つて、嫌だ、私はまだ。

「あの人は毎年毎年妾のところへ。私というものがありながら」

「ああ…」

>雷が空港に落ち、停電になる。偶然だ。たまたま、空港に落ちただけなのに。

「この怒りどうしてくれよう」

>その偶然が、彼女の仕業のように思われる。

「おい、俺だ。孫悟空だ」

>それに王賀美陸は応える。もし、私が彼の「羅刹女」なら彼は私に伝えてくれていただろうか。…きつと、伝えてくれないと思う。

>それは、私が凡人だから。王賀美陸のようなありのままも、景ちゃんみたいに神に愛されることも、千世子ちゃんみたいな美貌も無い。

>…自分に怒りを覚える。手を血が出るくらい握り締める。悔しい、悔しい！そうやって自分を凡人だと言って諦めてしまう私に、初めて怒りという感情モを覚える。

2人の演技が終わると、空港内の電気が復旧する。それと同時に歓声カネが沸きあがる。

「…凄いものを観たな。つて、恋歌君、手から血が出ているけど大丈夫か!？」

>貴女は大丈夫です、星先輩と返す。その目は王賀美陸と夜風景に釘付けだ。

「大丈夫じゃ無いだろう、それ。診療所に行こう。あと、僕は堀じゃ…え?」

>私はもう止まらない。彼女たちに勝てるなら死んでもいい。

>私は、この炎怒りを忘れない。

一体なんなんだ…このログ……

後、停電時に動こうと思ったのに、動きませんでした。また、『知力』が低い影響が出ましたね。

まあ、普通に考えてバレる確率高いんで、殺らなくて良かったかもしれませんね。

今回はここまでです。お疲れ様でした。次回はまた稽古に戻っていこうかな、と思います。

花鳥風月 上

花鳥風月。

この世の美しい風景を指す四字熟語。
そこに私は存在し得ない。

花咲くような笑顔も、白鳥のような綺麗な羽も、風のような力強さも、月のような魅力も、私には無い。

それでいい。

そうやって、私を貶めて、私の足りないものを自覚させる。自分を呪う。私が私を怒る為の薪にする。

…本当は苦しいよ。自分に死ねと言うのも、自分が不細工だつて言うのも苦しい。好きな人の愛を素直に受け取れないのは寂しいよ。

私は：羅刹女ずきれんかは孤独なんだ。牛魔王アナタを誰よりも愛しているのに、それと同じくらい憎んでる。誰かに救われたいと思っているのに、皆を拒絶する。

ああ、腹が立つ。

羅刹女わたしを知ろうとすればするほど、嫌いになる。苛立ちを覚える。
お前が、愛を語るな。頭鬼恋歌お前が愛されるな。お前が、お前が、お前が。失敗作の癖に。

ゾツとした。冬なのに冷や汗が止まらない。

恋歌が2週間前に演じていた、羅刹女の怒りは、なんとというか：滑稽だった。台本通りに大きな声を出して、しかめっ面をしているだけ。少し演劇を齧った人間なら、誰にでも出来そうな演技。スターズの女優ならその程度だろ、なんて他の共演者は笑っていた。

だけど、何か変化があったらしい。

「ああ、腹が立つ。」

以前と比べれば、さほど大きくない声で、表情も笑みを浮かべているようにさえ思える。しかし、確かに怒っている。その身すら焼き尽

くすような怒りを彼女は発露させている。

「真咲くん、次の台詞忘れちゃった？」

「…っ!? あ、あ…悪い」

「大丈夫。ほら、リラックスしていこ？」

突然、恋歌に名を呼ばれて身を強ばらせる。先ほどの怒りを霧散させて、笑顔で話しかけて来る。でも、目は笑っていない。ずっと何かに対して怒っている。

「…：ねえ、真咲くん。私、ちゃんと怒れてる？」

「え?…ああ、2週間前に比べれば断然良くなってる」

「そっか、良かった。真咲くんは劇団天球に所属してるから、私より舞台経験有るからね。技術的な意味で凄く助かるよ」

恋歌の変貌に、共演者はアキラ以外萎縮してしまっている。それもそうだ。今まで舐め腐ってた奴が急に牙を剥き始めた訳だしな…味方なんだけど。

「そりゃ、良かったけど…：てか今日、他の人は？」

「来ないよ。私と、真咲くんだけ」

ふーん…ん? 今、なんて言った? こいつ。

「は?…なんで?」

「今日、稽古休みだからね。私は自主練」

急いでスマホのスケジュールアプリを見る。確かに今日は休みだ。恋歌が普通に稽古してたから、てっきり毎日あるもんだと…スケジュール管理が杜撰過ぎるな。

「はあ…」

「真咲くん、帰る?」

「いや、稽古してくよ…：今のままじゃ、全然敵わないからな」

ぶっちゃけ、分が悪過ぎる。これがゲームだったら、速攻で売り飛ばしてた。相手はハリウッドで活躍中の王賀美陸に、舞台経験豊富な阿良也さん、スターズの天使と呼ばれる百城千世子…とか、他にも有名な人ばかり。俺や武光、和歌月がこのオーディションに受かったのはデスアイランドの宣伝を兼ねてだろう。武光や和歌月には悪いけど、俺がこの舞台に立てるほどの役者だとは思わない。

「休憩中すみません。恋歌ちゃん、今、大丈夫？」

「雪ちゃんだ。うん、大丈夫だよ」

「ちよつと来てもらいたいんだけど…いいかな？」

申し訳なきように、柊さんが稽古場の扉から顔を出して、恋歌に話しかける。

「いいよ。じゃ、真咲くんも行こっか」

「いや、なんで？」

「えつと…」

柊さんが困った顔をする。そりや、そうだよな。恋歌に用事があるのに俺が付いてくるとか訳わかんないし。

「敵情視察ってやつだよ」

恋歌は以前のように馬鹿みたいな笑みを浮かべた。

夜風が狂ったように頭鬼に抱きついていて、中々前に進まない。

「恋歌、会いたかったわ。最近、ずっと家に帰ってこないから…」

「け、景ちゃ…ちよつ!?それはダメだから!!皆見てるから!ね!」

何故か、百合の花を幻視する。真咲が疲れた顔で、隣に来る。

「よう、武光。オーデイション振りだな」

「そうだな。体調はどうだ？」

「親戚かよ…」

ようやく夜風と頭鬼で折り合いが付きたくらしく、腕を組みながら歩き始める。俺と真咲も他愛も無い話をする。決して、互いの演技の話だけはしない。互いの芝居を見るのは舞台の上で、と約束したからな。

「ごめんね、けいちゃん、恋歌ちゃん」

「…?」

柊さんはサイド乙の稽古場の扉に立つと、急に頭鬼と夜風に対して謝罪する。2人とも疑問に思っているようだ。そして、扉を開ける。「羅刹女よ!寂しいな!悔しいな!あんた、なぜ、今独りで戦っている

んだ!?!あんたの旦那…牛魔王のおじきはどうした!?!」

明神阿良也と女性が殺陣を行っている。明神阿良也の動きも激しいが、それ以上に女性は激しい。暴風のように、荒ぶっている。

「黙れ猿!!」

喉から絞り出したような怨嗟の声。声質は変わっているが…アレは。

「おい、百城。また芝居から迫が欠けてる。お前の敵は誰だ?孫悟空か?違うだろ?」

サイド乙の演出家黒山墨字が、今までの印象とは真逆の百城千世子に語り掛ける。彼は何を言っているんだ?この物語の敵対図は、羅刹女と孫悟空たちだろう?それ以外の敵なんて…

「感情…特に怒りは直ぐに消える。だから、消える前に火を付ける。お前の敵は…」

百城千世子が、大きな眼で頭鬼と夜風を捉える。…成程、夜風たちを利用するのか。これが、黒山墨字の演出。百城千世子の役作り。役者として甘い考えだったと恥じる。

友人にあんな目を向けるなんて、並大抵の覚悟では出来ない。だが、そこまでしなければ勝つことは出来ないということだろう。

俺も、精進しなければいけない。

花鳥風月 下

頭鬼恋歌の才能の本質は、経験を武器にしたメソッド演技でも、カメラワークを完璧に把握する俯瞰技術でも無い。

あいつが得意としてきた技術の模倣は、とある才能によって出来た結果に過ぎない。

そう、あいつの才能は、夜風と千世子に対する異常なまでの執着心だ。あいつは誰よりも夜風と千世子を見てきた。

あいつらに嫌われたくない、好かれない。あいつらの好きなものを知りたい、嫌いなものを知りたい。あいつらは何をすれば喜ぶ？何をしたら怒る？

演技の技術もその付属品にしか過ぎない。

一般人には理解出来ないほどの愛する人への執着が、あいつの原動力であり、唯一無二の才能だ。

だからこそ、2人から本当の敵意を向けられた時に新しい進化を遂げる。今まで好かれようとしてきたあいつでは知り得なかった、愛する人の負の側面を知ること、頭鬼恋歌は面白くなる。

「…千世子ちゃん」

千世子と目が合った頭鬼が、驚いたように言葉を漏らす。そうだ。千世子の眼を見る。お前は千世子の愛憎をどう受け取る？愛は愛だけじゃ成り立たない。憎悪によって引き立てられる。そんな愛もあることを理解しろ。お前も役者なら、稽古で学べ。稽古で進化しろ。

「悪いな、2人とも。少し見学していってくれ」

夜風達サイド甲、頭鬼と源の2人だけのサイド丙に一言かけておく。すると、頭鬼と目が合う。出会った時は夜風家以外の人間が映っていないかった闇夜を思わす黒い目が俺を捉える。ああ、少し怒っているのか？お前じゃなくて、俺が千世子に手を加えたから。

出会った時はつまらない役者だと思った。夜風と千世子の模倣で生まれた、完璧な演技をするつまらない役者。せいぜい、夜風の糧となるだけの役者だ。

デスアイランドで、奴の演技の本質を掴んだと思った。模倣性では

無く、他者へのメソッド演技という意味の分からないものだと思うた。

星の王子さまでは、正直落胆した。著しい夜風の進化と比べて、頭鬼は停滞していた。

他の役者も付け焼き刃に近い演技だった。上手いだけの演技。感情の乖離に気づいていないまま演じれば、その後の演技は乱れていく。

そして星の王子様の後は、別人のように演技が変わった。少しずつ、感情が漏れ始めた。それでいい。つまらない演技は必要ない。もっと、お前の演技を魅せろ。

羅刹女で、頭鬼恋歌の将来これからが決まる。今まで機械的に生きてきた人間が、感情的な羅刹女をどう演じるか。牛魔王に対しての怒りに満ちた羅刹女。牛魔王の浮気を赦した羅刹女、それとも別の羅刹おまえ女か。

兎も角、お前だけの羅刹女を見せてみろよ。

…ただ、吞まれるなよ、羅刹女に。それでも、お前には期待しているんだからな。

決意を新たにして、稽古に臨むけど主人公相手と戦うとかやつぱり無理ゲーじゃん…ぴえんなゲーム実況です。どうでもいい話ですが、ぴえんってうざいですよね。

今回は自主練ですね。羅刹女編は他の仕事は殆ど取らずに、「羅刹女」に時間を割きます。まあ、当たり前だよなあ……

「羅刹女」はこのゲームでも非常に特殊な位置にありまして、これの動き次第ではENDが大きく変わります。以前も言及したように、「羅刹女」で失敗するとBAD ENDですし、成功したとしてもここが終着になる可能性が高いです。

理由は、頭鬼恋歌という少女の演技ステータスにあります。

最初から演技ステータスが高いということは、それ以上の伸びが見られないということでもあります。早熟型と言うやつですね。恋歌

ちゃんの『器用』で行って来た演技ステータスへの補正や小手先勝負が通用するのはここまでです。

ここから先も役者として生きることが可能ですが、もう景ちゃんや千世子ちゃんと対等な形での演技は不可能でしょう。

ですので、ここで終わらせませす。刺し違えてでも、頭鬼恋歌の手で夜風景と百城千世子を殺ります。(成功するとは言っていない)

というわけで、自主練をやりましょうか。何故か、休みなのに真咲くんも来ましたが、ルートに実害は無いですし、一緒に稽古でもして、成功確率を少しでもあげましょうかね。

> 貴女と源真咲は自主練習を行う。だが、貴女は自分の中にある違和感が拭えない。源真咲も呆然としており、気持ちここにあらずという感じだ。

うーん…伸びが悪いですね。このままだと恋歌ちゃんも真咲くんも評価値B以下ですね、今のところ。ていうか、真咲くん、どうした？

> 貴女と源真咲が話していると、柊雪が話しかけてくる。どうやら、貴女に来て欲しいらしい。

あつ、ふくん(察し)。これは例のイベントですね。恋歌ちゃんも何故か千世子ちゃんとの好感度高めなので薪としてくべられるのでしよう。

あ、真咲くんも連れていきましよう。サイド乙から学べるところは学ばせた方がいいですからね。特に演出家が黒山墨字なので、非常に勉強になると思います。

> 貴女は頷くと、柊雪に付いていく。道中でサイド甲の面々と合流する。夜風景が嬉しそうに抱き着いてくる。貴女も久しぶりに出会えて嬉しい気持ちになる。

「ずっと会いたかったわ、恋歌。何週間ぶりかしら。本当に会いたかった」

> 貴女が私もだよ、と照れながら答えると、夜風景はそのまま首筋に顔を埋め……

あつ、ここからはちよつとカットしますね。取り敢えず、景ちゃんのスキンシップが凄かったとだけお伝えしておきますね。…これつて、全年齢対象だよね？

>サイド乙の稽古部屋に入ると、和歌月千からの鋭い視線ともうひとつ。愛憎入り混じった視線を感じる。その視線の主は…

何故か、和歌月ちゃんからもヘイトを買っている件について。なんですかねえ…恋歌ちゃん、なんかしたつけ。まあ、取り敢えず先に進めましょうか。

>視線の主は、百城千世子だった。百城千世子と目が合い、貴女は思わず、彼女の名前を呟いてしまう。

ヒエツ…画面越しに見ても震えるくらい恐ろしい眼光ですね。そんなヘイト向けられると殺しちやいますよ??

恋歌ちゃんの『精神』で耐えられますかね、これ。失神とか、狂気に陥るとか止めてくれよ?!

>貴女はその眼光に、歓喜する。
は？

>やつと、見てくれた。私を、私だけを見てくれた。好き。大好き。愛してる、なんて陳腐過ぎる言葉かもしれない。愛情と憎悪の入り交じった百城千世子の眼が、貴女には心地好く感じる。

ふええ…なんですか、このログ。狂気に陥りましたかね。そうであつてくれ(懇願)

>貴女はその狂おしい程の歓喜を抱えながら、黒山墨字に視線を向ける。彼が百城千世子を変えたことに感謝と少しばかりの怒りを感じる。自分の百城千世子に手を出したことを後悔させたい気持ちと、自分の予想以上の百城千世子を見せてくれたことに興奮を覚える。

この子、怖いんですけど。ええ…?大丈夫かな?『無我の境地』とか取つておこうかな。これは絶対に冷静にさせたほうがいいよ(震え声)

きよ、今日はここまでにしようかな。皆さん、ご覧頂きありがとうございます
ございました。

…恋歌ちゃんってこんな子だっけ?

石の上にも三年、山の上には何年

疾走感溢れる失踪(笑)かました大馬鹿者のルート開拓ですどうも。
ふええ……いつの間にか年が明けてるよお……

という訳で簡単に前回のおさらいをしたいと思います。このゲームにおける私の操作キャラクターである頭鬼恋歌ちゃん(JK)が、百城千世子ちゃん(超絶美少女)に対して、クレイジーサイコロズの片鱗を見せました。

まあ、恋歌ちゃんの狂気は、多分きつと絶対おそろくルート本筋には関係無いので無視します。それよりも、行わなければならないことを忘れていました。

>貴女はとあるホテルの一室に足を踏み入れる。そこには眼鏡をかけた女性が貴女を待っていた。女性は貴女を見ると口角を上げる。「待っていましたよ、恋歌さん」

>貴女を待っていた女性の名は『羅刹女』の脚本家であり、サイド甲の演出家である山野上花子だ。

はい。これが私がずっと忘れていた山野上花子さんと頭鬼恋歌ちゃんの絡みですね。いや、絡まないルートにしようと思っていたんです。そもそも、サイドが違う以上、他サイドの演出家と馴れ合う必要も有りませんしね。

でも『羅刹女』の演技に詰まってしまったので、急遽会うことにしました。『羅刹女』限定ですが、演技に詰まった際は彼女が効果的です。ここ、テストに出ますよ。『羅刹女』は山野上花子自身がモデルなので、彼女を知ることが演技をする上でも参考になります。

ちなみに、参考となる場合は、先程も述べた通り『羅刹女』の演技に詰まった場合や景ちゃんを操作しサイド甲に所属した場合くらいですね。これ以外で山野上花子と近付いても、特にメリットは無いですね。サイド甲と似通った演技をすると、独創性とかの評価は低くなります。そうすると最終的な評価も低くなり、BAD ENDになる可能性が高くなるので、キャラの性能と相談して、なるべく影響を受けないようにしたいところですね。

「>貴女が口を開こうとした時、それを遮るように山野上花子が口を開く。」

「立ち話もなんですし、座りませんか？」

「>貴女はそれに頷くと椅子に座ろうとするが、山野上花子に手を引つ張られると隣に座らせられる。そして、手を強く握られる。貴女が顔を山野上花子に向けようとすると、凄まじい形相の彼女と目が合う。気迫に押されて、貴女は後ろに退こうとするも、彼女の手が離れず動けない。」

「私、貴女が気に食わないんです。最初に見た時から、ずっと。その顔も、その内面も」

「>怒りが、憎しみが、嫉妬が、貴女を襲う。」

「私は私の作品が好きじゃない。燃え盛る炎が、私を捉えて離さない。ああ、腹が立つ。燃え盛る炎の先が見たいのに、貴女は鮮明に私に炎を思い出させる。私の中の炎を、更に燃え盛らせる」

「ちよつと待ってください！それ、八つ当たりじゃないですか!?恋歌ちゃん、関係無いですよね？」

「私は貴女が嫌いです。貴女わたしが私あなたである限り」

「恋歌ちゃん自身もそうだけど、なんで周囲の女性も大概やばいんですかね…」

「…帰ってください」

「>山野上花子はそう言うとう手を離す。貴女はこれ以上の対話は無理だと判断し、部屋を出た。」

「ツス…：次回挽回の為に、動こうと思います！まさか、救済措置枠が救済措置どころか、地獄だとは思ってもよらない展開でしたね。久しぶりのご視聴ありがとうございますました。」

「彼女が帰ったあとも、苛立ちを隠せない。それは彼女に対しても、私に対しても。炎がずっと燻り続けている。ああ、腹が立つ、腹が立つと私の心を焦がす。」

「やってしまった…」

そして、後悔もある。彼女だって驚いただろう。似ているからと、急に敵意を向けられて。いや、何も感じなかったのかもしれない。彼女と目を合わせた時に、彼女の目には私は映っていないかった。彼女の目には『羅刹女』あるいは…他の誰かしが映っていないのだ。

恋は盲目と言うが、彼女も私もそうなのだろう。彼女の目には、愛する人しか映らない。私の目には、もう居ない彼と炎しか映らない。そういう人間は、結果的に独りになる運命だ。孤独に、誰にも愛されず、自らの炎で苦しみ続ける。

「この絵も違う」

創る以外を知らないから、私は創る。愛は創作のようには行かない。思い通りになんてならないのに。

「これも、これも、これも」

演じる以外を知らないから、彼女は演じる。愛は演じれば、演じるほど愛されないことも知らずに。

「…全部捨てられたら、楽になれる」

『羅刹女』において、三蔵法師は羅刹女を赦す。仲間である孫悟空たちを傷つけられても、羅刹女に赦してみろと命じられても、彼は慈愛の心を持って、彼女を赦してしまう。その姿を見た彼女は、全ての怒りを封じ込め、炎を鎮める。

…そんなわけない。私が、私の炎がそんな程度で鎮まるわけが無い。

きつと、貴女もこうなる。羅刹女を演じれば演じるほど、私に近づくということ。元から私とよく似た貴女は、私と同じ景色を見ることになる。

「そうしたら、もっと嫌いになるかもしれない」

だけどそれでいい。私たちは相容れないから。愛されたい人間が集まっても、愛は生まれえないから。

ああ、私は貴女が大っ嫌いだ。